
ゆたにたゆたに

稲垣圭吾

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ゆたにたゆたに

【Nコード】

N0001K

【作者名】

稲垣圭吾

【あらすじ】

四月寧日。晴れて大学へと進学した俺は、綺麗なんだがそれ以上に奇妙な女性と出会う。大学の先輩らしいその女性は俺に藁束を押し付けると、一度目の前からいなくなる。後に、したくもないのに再会をしてしまったその先輩に強制入会させられたのは「LDK同好会」とかいう明らかにおかしなサークルで――！？

ブローグ

—— たなつもの 百の本草も あまてらす 日の大神の めぐみ
えてこそ

女性は、大きく取られた窓から外を眺めていた。

木目の鮮やかなアンティークの窓枠が、温かみのある光沢を放つ。
木製のもので統一された部屋の内装も豪奢であるが豪奢すぎず、あ
る一定の節度を持って整えられている。

喧騒などが似合うはずもなく、天井で回るファンの微かな音しか
聞こえないこの静謐な空間には、どこか神聖な雰囲気があった。

いやむしろ、その雰囲気は窓際に佇む女性が醸すものだったか。清連のような、無限に続くかとも思われる黙。その中に溶け込む妙齡の女性。稀代の天才画家をして放っておかないだろう画が、そこにはあった。

そこに、騷擾を持ち込む人間が現れた。

節操の見当たらない大きな足音を響かせながら近づいてくる人間の正体など、女性には一人しか思い当たらなかった。

出迎える準備をする。

たおやかな右脚を引き、腰を落とす。膝を曲げて力を溜め、後は、扉を開かれた瞬間にそれを解放するだけだ。

足音が近づいてくる。止まる気配がないのもいつものこと。

だから女性は、何の躊躇いもなく床を蹴った。

部屋に似つかわしくない大きな音を立てて扉が開かれる。と同時に、開けた男の鳩尾に女性の両足が突き刺さった。

その手のプロですら惚けてしまいそうなほど、美しいドロップキックだった。

「ぐほうあー!!」

有名高級ブランドのハイヒール。そのヒールが深々と食い込んでいた。受けた屈強な男はというと、くの字のまましばらく停止し、やがて床に倒れ伏す。

「騒々しいわよ」

「あ、姉上……。……我はまだ、何も……。……」

「アンタは存在が騒音なのよ。もう少し自己分析を徹底なさい」

「そ、そんなことより姉上!」

早くも痛みから復帰した男が、姉と呼んだ女性ににじり寄った。

「朗報です! ついにこの大学に」

「『猿』が来たんでしょう」

「あ、姉上もご存知で?」

「学長ですもの。それより」

と、そこで女性は笑みを浮かべた。太陽のように晴れやかで、そ

の実永久凍土のように冷え切った、極寒の微笑。

「私はあなたがそれを知っていることの方が疑問なのだけど。まさかあなた、校内でまたアホを晒したんじゃないでしょうね。例えば……そうね、入学式準備の体を装って朔耶に近づく男子がいないかを監視してたとか。確か『猿』は朔耶と同じ、園芸学科の新生だつたものね」

「ぎくっ」

「ふふ、これは折檻が必要かしら」

「ひいい！」

女性は男の襟首を掴むと、引き摺りながら引つ張っていく。

向かった先は、部屋の奥にある一際重厚な造りの両開きの扉。

そこに着く頃には、男の表情は綺麗に失せていた。

「全く、あんたが廃人寸前にまで追い詰めた男子のフォローをする身にもなりなさい。お陰で変な噂は立つし、職員が目が痛くてしょうがないわ。今日だってもうすぐ入学式だっていうのに、あんたを賤げるせいで遅れでもしたら、何て言い訳すればいいのかしら」

文句のわりに弾んだ声音を隠すように、重低音を響かせて扉が開く。文字通り一寸先すら闇に包まれたその中に男を放り込み、自身も闇の帳に身を投じた。

どういう仕掛けか、自動で閉じていく扉。

それが閉まりきる直前、女性は面白そうにこう呟いた。

「さて、どうしようかしら。——いえ、どうなるのかしら、ね」

これから、とは唇の動きだけで。

——ボタン。

女性の言葉がどういった意味か、誰に向けたものか、それを判じる人間はいない。

動くものは無くなり、そして部屋は静寂を取り戻す。

ふと、開放していた窓から冷たさの残る風が舞い込む。

その風は、温もりのある部屋を踊りながら、シックな文机に到達する。

そして、とある新入生の書類を楽しげに揺らしたのだった。

入学式という儀式を俺が経験するのも、これで四回目だ。

小、中、高ときて今回が大学の入学式だから四回目で間違いない。この独特の緊張感は何度を重ねても慣れるものではないが、今回に限っては加えて着慣れないスーツで身を強張らせているということもあるのだろう。

受験で辛くも合格した農業大学——とは言っても、農学科以外の学科も結構ある。環境学科、畜産学科、栄養学科、醸造学科、そして園芸学科の全部で六つ。俺はその園芸学科にこの度入学と相成った。

その入学式が行われるアリーナとかいう体育館は、ごく平凡な公立高校出身の俺にとっては夢のような規模で、高校生の時分に目の仇にしていた私立高校など足元にも及ばない大きさだった。これが大学というものか。

その大学までになると、なんだか偉そうな外国人が祝辞を述べたりするものらしいのだが、理解などとうの昔に放棄したネイティブなイングリッシュも俺の睡魔とはなり得なかった。

それくらい俺は身をガチガチにしていた。

にしても、どうして自分だけが場違いに見えるのか。他のヤツが皆、大人に見える。

少しばかり焦燥感を掻き立てられつつ、しかし千人単位でアリーナに集まっている新入生の中の一人である俺の焦燥などで何が変わるわけでもなく、入学式もつつがなく終了。新入生は学科ごとにガイダンスが開かれるという教室に移動することとなった。

アリーナを出れば、青く澄み渡った空に、散った桜の花筵。その鮮やかな青天井と桃色のカーペットに挟まれて新緑の生き生きとした緑が揺れている。

凝っていた身体を、ぐーっと伸ばす。

アリーナのエントランスでは、待ち構えていた複数の上級生が後輩となる生徒たちに一輪ずつガーベラを手渡していた。

俺も胸を張って歩いていくと、先輩方の何人かが俺に気付いて近づいてきてくれた。

その内の一人と目が合う。男性の先輩だったことに内心だけで舌打ちし、それでもここで目を逸らしたら入学初日から先輩との軋轢を生みかねないと自分自身に言い聞かせ、あくまでにこやかに手を伸ばした。

その時だ。俺と男性の先輩の間に人影が滑り込んできたのは。

確かに、綺麗な女の先輩だったらいいなー、とか思ったりはした。

……したのだが、

「入学、おめでとう」

服装や日焼け具合から考えて、どうやら農学科の先輩らしい。

作業用のつなぎを着たその女性だが、襟からのチラリと覗く細い首筋はほんのりと小麦色で、健康的かつ活発な印象。同じく澁漑とした雰囲気の顔の造形は整っていると評して申し分なく、長時間日に当たり続けて黒い色素が若干抜けたらしい長髪をポニーテールにしているのが一層ポイント高かった。

どこをどう見ても、綺麗な女の先輩だった。

ただ、そこに『嫌がらせをしてくる』なんてオプションが付いているんだったら、いくら俺だって遠慮したい。

まったく、これを嫌がらせと言わずして何と言うのか。

今日の天気みたいな晴れやかな笑顔で女性が俺に突き出しているのはガーベラなどではなく、そもそも花ですらなかった。

麗らかな春の日差しの下。一際強く吹いた春風に、地面を覆っていた桜の花びらが舞い上がる。

ともすればロマンチックな情景の中、俺はどんな顔をすればいいのか分らない。

自信を持って言うが、誰だって分からないはずだ。

何と言っても、その女の先輩が俺に差し出したのは――

――藁束だった。

「はぁ……」

入学早々早速だが俺は、この大学の笑い種となりそうな悪い予感に苛まれている。

それもそうだろう。色とりどりのガーベラの花を携えてパリッとスーツを着こなした新入生の中でただ一人、ガーベラに加えて納豆が入っていきそうな藁束まで抱えていれば、周囲の目も集まるうというものだった。

あの後すぐに女の先輩はどこかへと去ってしまっていた。

長く拘束されなかったことは一安心。

「これが農大の恒例………な訳ないよな」

気落ちもするが、しかし折角の新生活の初日だ。暗い顔もしていられない。

先ほどの女の先輩とも、もう会うことはないだろうし、いっそのことこの藁束で俺の明るいキャラクターを定着させてやろうじゃないか。

そう気を取り直して向かったのは、俺が新しく所属する園芸学科のガイダンスが開かれるという教室だ。

入口で手渡された出席番号順の席指定表をぼーっと眺めつつ、俺に割り振られた席へ向かう。今後の授業では、座る場所は基本的に自由らしい。

同級生がこつた返す教室で、席は二人掛けだった。俺の隣に座る人の名は『高木朔耶』とあるので、恐らくは女性だろう。

俺は先ほど、綺麗な女の先輩に期待を裏切られたばかりだし、油断は禁物。

「え………っと。あ、ここだ」

すぐ傍、斜め後から澄んだ声が聞こえた。決して聞き間違いなど

ではなく、涼やかな女性の声だ。

「えーっと……あなたが佐田君、でいいのかな？」

俺の名前を呼んだということは、この声の主が俺の隣に座るはずの高木朔耶さんで間違いないんだろう。

振り向き、肯定の意を伝えようとした——ところで。

「よかった、すんなり見つかった」

脳味噌がただの味噌にでもなってしまったようだった。

辛うじて機能を保持している聴覚だが、ついさっきまで辺りを包んでいた喧騒が聞こえてこない。息を呑んだ雰囲気だけが、空気の硬さとして俺にまで伝わってくる。

月並みな表現かもしれないが、天女と見紛うばかりの美人がいた。テレビなどで『ミス。○大学』といった肩書きを持つ女性を時々見るが、はつきり言って、そんなもの足元にも及ばない。

万緑叢中紅一点。それを素で行く女性だった。

ちなみに万緑とは、ここでは全ての女性を示す。それくらい彼女は際立っていた。

純粹な漆黒の髪は教室の蛍光灯の光すら天上の靈光に変容させる艶を持ち、上等そうな簪でそれを結わえている。それに相反するように滑らかで白い手足がフォーマルスーツから伸び、そのコントラストが絶妙。

そして極めつけは、どこぞの芸術の神様が全ての神経を傾けて造形したとしか思えないほど整った顔立ち。

その高木さんが隣に座ってきた時は何かの間違いではないかと座席表を疑い、それから一瞬で身体をガチガチに緊張させた。

「？ どうしたの？ 顔が赤いよ？」

あなたのせいだ、とはとても言えない。そもそも口が動かない。返事がないことに首を傾げる高木さんだが、そんな仕草がいちいち様になっていて、こっちは益々フリーズしてしまう。

高木さんが座席表に目を落としてくれたことで脳不全の状況からは脱した。

なのにその一瞬後。

「……素敵な名前」

「は？」

いま彼女は何と言った。俺の脳細胞が極度の緊張に狂ってショートしたのでない限り、素敵な名前、と呟いた気がする。

「な、何が？」

ぎこちなくも、聞き返すことに成功した。

「何って、君の名前」

高木さんは微笑むと、紙に書かれた俺の名前を指でなぞっていく。
「『佐田彦名』……うん、やっぱり素敵。優しい人だっていうのが伝わってくるよ」

大学生ともなると、初対面の相手の名前を褒めるのは当然の礼儀なのだろうか。つまりは、これが大学生のスタンダードなのか。

ならば、こちらも返しておかねばなるまいて！

「き、君の名前もいい、じゃん。『朔耶』って……何だか落ち着いた雰囲気で」

途端だ。高木さんは一瞬で顔に紅葉など散らしてしまった。

この反応、あまり褒められ慣れているようではなかった。

でも、その表情は一見ただけで昇天してしまいそうな威力を秘めていた。恍惚とする頭に負けないよう激しく首を縦に振ると、彼女は仄かな月明かりのように、控えめに顔を綻ばせた。

「へへ、嬉しいな……。私も自分の名前大好きなの。ありがとう」
「どうやらお気に召したらしい。」

育ちの良さそうな深窓のお嬢様といった雰囲気の高木さんと話ができるか不安だったが、意外と気さくな人だった。

となれば、これはチャンスに他ならない。隣の席という地の利を生かしてお近づきになっておくに越したことはないだろう。

周囲の男子からの視線が痛い、気にすることもないさ。

「改めて、俺は佐田彦名。よろしく」

「うん、こちらこそ。私は高木朔耶。これからよろしくね、佐田君」

名前を覚えてもらうことには成功したようで内心ガッツポーズ。
大学生活だって悪いことばかりじゃないな。
それに俺の女運も、なかなか捨てたもんじゃない。

大学生生活指針、とかいう通過儀礼的な講習も終了し、次に学科の教授紹介となったところで、司会の先生が生徒たちの睡眠脱落具合を嘆いたのか休憩を挟むことになった。

高木さんが少し赤らみながらハンカチを持って教室を出て行ったが、その恥じらいがまた素晴らしい。

その時。急に肩を叩かれて息を止めた。

「ようようにいちゃん」

一瞬不良にでも絡まれたかと戦慄したが、振り返るとそこには黒髪天パ。小柄で垂れ目かつ撫で肩。草食動物チックな、いかにも悪事のできなそうな顔立ちの男がいた。

そういえば、声も男性にしては高めだった気がする。

全く、これでは刹那でも恐怖した俺が馬鹿みたいだろう。

「ご苦労様」

その意趣返しも込めて、そう言ってやった。

「何その反応！　いくら掴みが失敗でも、そう冷たくあしらうのはどうかと思うよ！」

「失敗だとは気付いてるんだな」

「だいたい、出身がかなり田舎なのは認めるけど、僕のところでもヤンキーなんて殲滅されてるんだから！　……三ヶ月前くらいに」

「意外と最近だな。あと『ヤンキー』って言葉自体が若干古い気がするぞ」

「なに！？　都心はもつと昔だって言いたいのか！？　僕の田舎をバカにしてるのか！？」

「いや別にそういう」

「田舎を舐めないでよ！　春先、家のすぐ裏にある雑木林の中に入

れば鹿がもしやもしや木の芽食べてるんだからね！」

長閑だ。

「季節になればアケビとかムベとかイチジクだって普通になってるし！……あそこは、おやつ宝库だった。うんうん。むべなるかな、むべなるかな」

既にホームシックなのか、窓の外へと郷愁の眼差しを向ける。脳裏にはきつとイチジクの木にアケビの蔓が絡み付いている絵が浮かんでいることだろう。

「……おいしかったなあ」

「涎を垂らすな！」

頭をはたいてやると、いかんいかんと口走りながら口元を袖で拭う。それから俺を睨んできた。

「ふう、誰かのせいで話がずれたよ」
全くだ。

「それで、素敵な名前の佐田彦名君」

盗み聞きとは褒められん奴だ――が。

そんな文句も彼の名前を聞いた途端に遙か彼方へ吹っ飛んだ。

「僕の名前は加藤清侯」

「つ……き、君も、素敵な名前じゃないか」

「今、笑い堪えたよね。馬鹿にしたよね！あだ名は虎之助とかでいいんじゃないね、みたいな安直な思考をしたよね！？」

「被害妄想だぞ」

「嘘だ！」

「ご名答。」

「それで、何だよ虎之助」

「……くう、やっぱり大学生になっても、僕は虎之助の運命からは逃れられないんだあ」

むしろお前の方から話をフツてきたような気がしたが。

「まあいいや。それで佐田君、随分と高木さんと親しげだったね」

「ん？ ああ、隣の席だったからな」

「それだけ？」

他に何がある。以前から知り合いだったら名前を褒めあうなんて
気恥ずかしい真似、とてもできんだろう。

「僕のお父さんがこの大学の関係者なんだけど。……言っておくけど裏口じゃないよ」

「俺は何も言つてない」

「君は口よりも顔の方が饒舌だよ。それはともかく、同級生の誼で忠告しておくけど」

虎之助がずっと顔を近づけてきた。もちろん男に急接近されて喜ぶ趣味は持ち合わせていないので、ほんの少し身体を離す。

「お父さんが言ってたんだけどね——この大学で注意することはただ一つ。高木家に目を付けられるな——ってことらしいよ」

「？ 何だそれ」

「佐田君、ちゃんと入学式の時に渡された冊子見た？」

「いや全然」

「まあそうだと思ったけど。とりあえず、最初のページ見てみて」

何を言わんとしているのかさっぱりだが、とりあえず訝りながらも言われた通りにすると、そこにあつたのは妙齡の女性の顔写真と、

「学長、高木晴香……？」

「高木さんの、実のお姉さんだよ」

「……学長って、トップ？」

「そう。これまで何度も、妹に言い寄ってきた男を社会の掃き溜めに放逐してきたって専らの噂の」

……そんな人間が学長なのか、この大学は。

冗談だろ。

「……んなこと言つて、実は自分がお近づきになりたいってだけじゃないのか？」

「じよ、冗談止めてよ！」

そっちが冗談なのか。

「僕、あんな風になりたくないよ！」

「……………」
本気で顔を強張らせて首を振るほど、学長の暴虐は凄まじいのか
つか、あんなふうってどんなふうだ。一体先人はどんな仕打ちを
受けたんだよ。

「……それは、マジなのか？」

「マジもマジ、大マジだよ。だから高木さんと関わるなら注意した
方がいいよ。あっそうだ。高木さんには実はお兄さんもいて、この
人がまた——」

その時だ。

教室の扉が、決して立てるはずのない爆音を伴って開かれたのは。
そこに立っていたのは、二メートル近い長身で、およそ学生とは思
えない頑強な身体を小刻みに震わせている大柄な男だった。

獣のように獰猛な息を吐く男の顔は凶悪に歪んでいて、見るに耐
えない。

続いて、人体はここまでの声量を獲得しうるのかと人類創造の深遠
なる神秘にトリップしてしまいそんな大音声が、教室内に響き渡っ
た。

「さ、さ、さ……朔耶ア——！！ 入学祝いに来たぞオ——」

窓がビリビリ震えている。

考えたくもないが、叫んでる名前からして……

「……あれが、その？」

「……うん」

虎之助の肯定を裏付けるように、男がもう一度咆哮した。

「お前の愛する兄、高木風馬はここにいるぞオ——！！」

十メートル近く離れた場所に座っている俺ですら耳を覆いたくな
るような絶叫だ。すぐ傍で叫ばれた人は堪ったもんじゃないだろう。
それに『お前を』ではなく『お前の』な辺りが痛々しい。

「ぬ！？ 見当たらない、見当たらないぞ我が妹朔耶！！ どこへ

行つたア——！！　愛する兄に顔を見せておくれエ——！！

血の繋がった妹の姿が見えないことに本気で悲しそうに吠える高木兄はもう一種の病気なのではないか——なんて、そんな事を考えていたからか。

「……！」

何やらくんと鼻を動かしていた高木兄が唐突に、研ぎ澄まされた矢のような視線を俺に向けてきた。

なぜか明確に俺へと殺意の籠った視線を突き刺し、次の瞬間には他の生徒や机を弾き飛ばしそうな——いや、実際に弾き飛ばす怒涛の勢いで俺の元まで突進してきた。

いくら日和見主義な俺でも、分かることがある。

ここにいたら危険だ。

「に、逃げるぞ虎之助！……虎之助？」

促すまでもなく既に逃げていた。見回してみると、二つくらい後ろの席に座り、素知らぬ顔で隣人と談笑している。あの野郎。

虎之助を見つけることに時間を費やしてしまったことで、とうとう俺は逃げるタイミングを逸してしまった。甲高い悲鳴と重い破碎音は瞬く間に近づいてきて、漸減していく相對距離は俺自身の命脈も表しているようだった。

そして、到達。

「……朔耶の残り香がある」

そんなもので本当に妹の席を当てるような男の称号はシスコンなどではない。ストーカーの方が適している。

高木兄は俺に肉薄すると、どうしてか再びくんと鼻を鳴らし始めた。

まるで俺の臭いを嗅ぐように。

「な、なんすか？」

奇妙な行動に面食らいながらも声を絞り出す。が、高木兄は聞いていない。

しかし、数秒の後。

「……………なぜ貴様からも朔耶の匂いがする？」

上がった高木兄の顔は、般若の形相だった。

「……………なぜだ？」

「だ、だって隣の席でしたから……………」

「……………どこだ？」

一応、疑問詞は変わった。でも、俺への圧力は一パスカルも減りはしない。

「どこって……………たぶくげえ！！」

その圧力に負けて答えようとしたのに、高木兄は問答無用というように俺の胸倉を掴み上げた。どうやら被疑者の話になど聞く耳持たないらしい。

妹を愛するがゆえの盲目、とかそれっぽく言ったところで結局こいつは変態に変わりない。普段だったらどうにかして接触を回避するところだが、残念ながら現在に限ってはそうはいかない。なにせ、締まる胸襟のせいで呼吸すらままならないんだからな。

「……………妹を、朔耶を、どこへやった？」

もう俺は彼の中で誘拐犯に確定しているらしい。

息が苦しい。目も霞んできた。喉を絞められているせいで声も出せない。周囲の生徒たちに救いを乞う目を向けてみても、申し訳なさそうに目を背けるだけだった。

日本人って薄情だな。

どうやら俺は、辞世の句を読む暇もなくあの世へ旅立つことになりそうだ。この際だ、声には出せないが日本人への濃厚な恨み節を唱えながら死んでいつてやるよ。

でもやっぱ……………大往生が良かった。

父さん母さん、先立つ不孝をお許しください。

……………。

……………なんだ？

辞世の句を一首どころか四首五首くらい読めそうな時間が経過し

ても意識が途切れない。

それどころか急に尻に衝撃を感じ、自分が落下したことを知る。いつの間にか息苦しさもなくなっていた。

一体、何が起きた？

まだ少し痺れているように感じる瞼を、ゆっくりと持ち上げていく。

まず見えたのは、高木兄の足だ。なぜだろう。宙に浮いているように見えるのだが。

そこから視線を上げていき、次に見えたのが彼の胸元。高木兄が節張った無骨な手で押さえるそこからは、他の誰かの腕が伸びていた。妙に細くて白い腕だ。

見た感じ、高木兄が誰かに掴み上げられているらしい。

しかし誰だ。さつき日本人に恨み節を吐こうとしていた不敬な俺をして救いたもうた天使のようなお人は。

その腕を辿っていく。

どう見ても体重八十キロは下らない高木兄の身体を持ち上げるには頼りない細さ。

加えて、男にはあり得ない肌理の細かさ。滑らかさ。

薄々、俺も勘付いた。

その腕の持ち主が、本物の天使だということに。

「ねえお兄ちゃん」

笑顔だ。俗に言う、天使のような悪魔の笑顔。

天使——高木朔耶が兄の首根っこを締め上げていた。

「さ、朔……耶、こ……の腕を、外し、て、くれな、いか……？」

「だめよお兄ちゃん。金輪際、私のお友達に関わらないと約束してもらえないなら、このまま絞め殺す。……本気よ？」

翳が差しているように見える瞳からも、その意思是ヒシヒシと伝わってきた。首を傾げながらのも、一層の怖気を誘う。

一向に弱まる気配を見せない高木さんの握力に、さすがのシスコン兄も生命の危機を感じたのか、掴んでいる妹の腕にタップした。

その表情は、ただ恐怖に彩られていた。

「約束してもらえるわよね？」

まさに死力を尽くして頷く高木兄。すると間を開けず、その大きな身体がドスンという音を立てて床へと落ちた。

頑丈な壁のような身体からは想像できないほど小さく背中を丸めており、未だ恐怖を煽る笑みを消していない妹へと、高木兄は慈悲を乞う目を向けている。

「そう。なら、もう話すことはないわよね？ さあ、戻って。そろそろお昼時だし、好物のお蕎麦でもいただいできたら？」

「……朔耶の傍にいたい」

寒いな、この男。

「あらら、まだ足りないみたい。こうなったら頭の風通りを良くしてあげないとダメなのかもね」

俺が言うのも何だが、もう止めておいた方が懸命だ、高木兄。それが伝わったのかどうなのか、彼も完全に閉口した。俺としては目の前で人死に出なくて一安心。

満足したように一つ息を吐いた高木さんは俺に向き直り、

「ゴメンね、佐田君。見苦しいもの見せちゃって」

「み、みぐ……う、うわああああん！」

確信犯的なトドメの一撃に号泣しながら教室を駆け出ていく兄には目もくれず、その場で反転すると、同級生たちへと優雅に一礼して見せた。

俺には、その仕草が天使のそれではなく、悪魔が人を欺く際に見せるであろう媚のように見えたが、決して口にはすまい。

明日は我が身——という言葉を、俺は知っているのだ。

「皆さん御免なさい。お騒がせしました」

彼女が褒められ慣れていない理由が、痛いほど理解できた。

もういつそ認めよう。

やはり俺には、女運がないらしい。

「佐田君は、入る部活とかサークルってもう決めた？」

対面に座った高木さんが問い掛けてくる。

高木兄強襲事件のあと、教授紹介も終了したことで午前中のうちにお開きとなった。午後の時間は各自で敷地内を見て回れ、ということらしい。

丁度お昼時ということもあって、最初の見学場所に学食を選択する学生は多かったようだ。かく言う俺たちも、そのグループに含まれる。

未だ捨てることなく律儀に藁束を足元に置いている俺の隣には、無理矢理引っ張ってきた虎之助が肩身の狭そうに座っているが、別に構わない。

先ほどの武勇を見た直後ということもあり、高木さんと二人という状況は、どうやっても回避したかったからな。

「いや、特に。虎之助は？」

「ぼ、僕？ 僕も別に……」

学食はかなり大規模なもので、三つくらいの学科なら全員まとめて座れそうな数の椅子とテーブルがあった。

メニューも豊富で、それを選びかねている大多数の学生を抜き去り、俺たちは手ごろな席を確保した。

アスパラのクリームパスタを上品に口に運び、いちいち唇を軽く拭く高木さんは、それを聞くとパツと顔を綻ばせた。

「だったら、この後一緒に見に行こうよ！」

「あ、ああ。別に構わないけど。虎之助も行くよな！」

「えーっと、僕は」

「行くよな！？」

「えー、でもやっぱり」

「よし決まり！」

「何が決まったのか、是非僕に教えて欲しいな」

「それじゃあどの辺りから回ろうか」

内心焦りながら、ガイドンスで配られた構内の簡易地図を広げる。このまま明確に断られないうちに行動に入るのが一番の良策だ。虎之助には悪いが。

二人とも食べ終えたみたいだし、早々に席を立つ。

俺が先頭で、その後を二人が付いてくる形だ。何度も何度も背後を気にしてしまうマイチキンハートを恨めしく思いながら、いやに長く感じた道程をどうにか消化して、安普請のサークル棟の前まで一人の欠員も出すことなく無事に辿りつくことができた。

その案内板の前で、

「それで佐田君。どこから見てる？」

「……僕、まだいなきゃダメ？」

「どこがいいかな。あつ！　ねえねえ佐田君、磯辺焼き研究会とかあるよ。どんな活動してるんだろっね」

「ほら、高木さんも『さつさと消える』オーラ出しまくってるし」

「え！　そ、そんなことないよ加藤君。ほらほら、加藤君はどこがいい？」

「もういいよ、その取ってつけたような応対。むしろ悲しくなるよ」

「LDK同好会をお勧めする」

「え、何それ。どんな活動してるの？」

「知らないよ、部屋の間取りについて熱く議論するサークルじゃないの」

「もう、だから加藤君、そんなムキにならないでっば。ねえ佐田君？　それで、LDK同好会ってどんな活動してるのかな」

「知らん。何だそれ」

「え？　だって今お勧めしてくれたじゃない」

「俺がサークル棟の前に来て初めて発した言葉は今の『知らん』だぞ。そんなアットホームなサークル名を口にした覚えはない」

「……え？　じゃ、じゃあ誰が——」

「あたしだ」

「きゃあ——！！」

そろそろ太陽も南中しようとして一層の陽光を撒き散らす白昼に、響き渡る悲鳴。場違いもいいところだ。しかし、それ故により多くの視線を集めてしまった感も否めない。

飛び退いた高木さんはバツと振り返り、背後に立っていた人物を見て目を見開いた。

「あ！」

という高木さんの声。しかしそれは俺の口から飛び出した驚きの声でもあった。

「本当に騒がしいな、高木の末っ子。どこかの誰かにそっくりだ。今日のドロップキックの冴えはどうだ？」

そこに立っていたのは一人の女性。

入学早々、俺に悪質な嫌がらせを仕掛けてきた、あの先輩だった。

「何でアンタがここにいるの、御厨斎都姫！」

「勧誘だ」

「気配なく背後に立ってばそつと声掛けるのは勧誘とは言わないわよ！」

「なら何と言うんだ」

「知らないわよ！」

「そうか。ならこれは勧誘だ。逆にして勇敢と言ってもいい」

「確かに勇気がないとできない行為だとは思うけど！」

「ありがとう。では、彼を貰っていこう」

「それは勇敢じゃなくて誘拐……って、ちょっと待ったあ！ 佐田君をどこに連れてくのよ！」

高木さんの台詞と第一印象のギャップにも今さら驚くことはない。少しショックではあるが。

それでも高木さんが喧嘩腰でかなり立てる声や、御厨斎都姫というらしい先輩の意味不明な受け答えに翻弄されるがままになっていた俺だが、その先輩に腕を引っ張られる状況になってようやく現状に復帰した。

「あ、アンタは」

「先輩に対してその呼び方はいけない。LDK同好会に入会する人間として、基本的な礼儀は弁えてもらわないと困る」

「ど、どうということ!? 佐田君、さっきは決めてないって」

「それは彼の照れ隠しだ」

照れる要素がどこにあった。

「事実無根なことを言わないでください。俺はまだどこに入るか決めていますし、万に一つも先輩のところに行くことはありません」

「うむ、ちゃんとした言葉使いもできるではないか。合格だ」

「試験を受けてる気すら無かったんですけど」

「そう謙遜するな。どんどんあたし好みの男になってしまおう」

「嘘です。合格する気満々でした」

「そうか、なら行こう」

「はっ!」

しまった。会話の意味不明さと勢いに乗せられて無様に誘導されてしまった。

もし今のが全て周到に張り巡らされた伏線による誘導尋問だとしたら、この先輩はとんだ食わせ者かもしれない。

しかし、まだ断るチャンスは――

「喜ぶといい、一連の会話はこのカセットに録音済みだ。これがあれば会長の厳しい入会試験も免除になる。今朝あたしに見つけられたことといい、君はつくづく運がいい」

――どうやらなさそうだった。それにしても録音メディアがカセット。前時代的だ。

「……はあ」

どうも俺と先輩では価値観の相違が甚だしいようだ。貴女の言っていることが、俺にはどうしても『運がいい』とは思えない。

一瞬カルト教団が何かとも思ったが、大学の最高責任者――学長の妹である高木さんと先輩が旧知の間柄であるということで、その最大の不安は解消された。

しかしながら、得体の知れない薄気味悪さはまだ消えてないわけ

で。

「……ちゃんと説明を聞いてからでもいいですか？」

せめて、基本的なことは把握しておきたい。

「ああ、構わない」

肩を落としながら本気のトーンで言った言葉に首肯すると、先輩は農作業を続けてきたためか皮膚の固くなった手で俺の腕を掴むと、何処かへと先導していく。

「ちょ、佐田君！」

「君たちは来なくていい。もっと似合いのサークルが見つかるはずだ。アマレス同好会とかどうだ？」

「アマ……っ！ は、入らないわよそんなの——！」

高木さんの叫びだけが、空しく俺の頭で木霊した。

解体場へと向かう食肉用の動物たちはどんな気分なんだろうか。

己の運命を知って、しかし抗うことも出来ず、人間の胃で己の肉が消化される末路に諦観するのか。もしくは、そんなことを考える暇すらなく、意識を途切れさせるのか。

はたまた、そんな感情すら持ち合わせていないか。

なんて。最後のは人間のエゴが過ぎたな。俺だって普通に美味しい美味い言って肉を食ってる。何も変わらないさ。

自分でもよく分からない奇怪なことを考えているのは、ドナドナの曲の中で運ばれていく仔牛の気分を疑似体験しているからだろうか。

「はあ」

どうして入学初日から、こんな暗澹たる気分を味わわなければならないのか。全くもって承服しかねる。今の俺の気分を表すのに最も適した言葉は、前途洋々などではなく前途多難の方で間違いない。「ここだ」

しばらく歩いて到着した場所は、お世辞にも綺麗とは言いがたい、

立て付けの悪いドアの正面だった。磨りガラスには『LDK同好会』と女子っぽい字で可愛く書かれたプレートも下げられているのだから、ここが目的の場所だろう。

「歓迎しよう。ようこそ、我らがLDK同好会へ」

先輩の手により、ゆっくりとドアが開かれていく。ぎーっという音は、さながらおとぎの国へ向かう前のようなアトラクション性を秘めていると思えなくもない。

しかし、そんなものに心ときめく年齢なんて何年前に訪れたか憶えていないし、そもそも男である俺にそんな時期があったかどうかさえ疑わしい。

だから、その扉の先で待っている何かに期待など微塵も抱いていなかった。

果たして、それは正解だったように思う。

ある意味で。

「やあ、君が佐田く
ばたん。」

条件反射で扉を閉めてしまったのは不可抗力だ。

とつさの事で先輩も対応できなかったらしい。いつの間にか己の操作を離れて俺の手の中にあるドアノブをぼーっと眺めていた。

俺が反射行動として扉を閉めることとなった条件の部分を、ここで説明しよう。

先輩がドアを開けたとき、中からはまるで室内ではないかのような光が漏れ出し、俺は目を覆った。

恐らくスポットライトか何かを持ち込んで内側から照らしていたのだろう。確かに眩しかったのだが、実は問題はそこではない。

その眩しい逆光の中、くっきりと浮かび上がった男の影。これがいけなかった。

ジャケットをはだけるように手を広げているその男の胸板は引き締まっていて尚且つ厚く、男としては嫉妬を禁じえないものだったが、それと同時に生理的嫌悪をも催した。

加えて、自分に酔ったような緩みきった声。顔こそ見えなかったものの、どうにかしてその姿を視界から排除しようとする反射行動の条件としては、申し分ないだろう。

一人納得していると、内部から何やら焦ったようなドタバタという振動が、複数人の会話と併せて伝わってきた。

——だから言っただんです。これでは相手を怖がらせるだけだと。

——ミ、ミオも止めた方がいいって言いました。

——ブヒブヒ。

——そ、そんなこと言っただって、ボクはこれ以外の歓待の作法を知らないんだよ。

真人間が二人、ちなみに女性の声。

そしてもう一人のテノールが先ほどのネイチャリスト男のものだろう。

それと、よく分からないが、豚の鳴き声。

もはや理解しようとする方が無茶というほどのちゃんぽん状態だ。

1対9の割合で踵を返す方向に意識が傾き始めていたのだが、先輩の笑いを噛み殺したような声に足止めを食らった。

「どうだ、賑やかだろう？」

「ええ」

「君もきつと気に入る」

「それは無いです——ってえちよつと！」

先輩を振り切って駆け出すタイミングを計り始めた俺の内心を見透かしたように、俺の手首を万力のような腕で掴むと、部屋の内部へ無理矢理引っ張り込んでしまった。

女性とは思えないほどの膂力に、全くもって為す術がない。もしくはこれが農業という直に自然と向き合う仕事に生きる女性の力強さかもしれない。

引き込まれるままにポイントオブノーリターンであったはずの会室の敷居を跨いでしまうと、背後ではボタンとドアが閉じる音が聞こえる。

その音が示す事実は明白。退路を絶たれた。ならばもう、逃げ場は無い。覚悟を決めて現実を見つめるしか、俺に道は残されていないようだ。

いつの間にか瞑っていたらしい瞼を持ち上げると――

「ブヒ」

――目の前にピンク色の物体があった。

そういえば、遅ればせながら獣臭いし、生暖かい空気が顔面に吹きかけられてもいる。

少し顔を離して見てみたそれは、どの角度から二度見してみても、
「……………豚？」

でしかありえなかった。

それにしても、なぜ部屋の中に豚がいる？ 畜産学科もあるこの大学では割と普通のことなのだろうか。

「シュールだよ」

一瞬、豚が喋ったのかと思った。

真実は、豚の向こうから掛けられた男の声だった。

「は？」

「この子の名前。シュールって言うんだ」

豚を受け取りつつ、渡してきた男に当然の疑問をぶつける。

「……………なぜにシュール？」

すると、向こうもさも当然のように返してきた。

「え、だって……………シュールでしょ？」

確かに人の生活空間にちゃっかり入り込んでいる豚なんて、シュールと言えばシュールだが。インテリアにするんなら、せめて豚の置物くらいにしておいて欲しい。

いや、それは置いておいて。

豚を俺の腕の中に押し付けることで明らかになった、先ほどの生理的嫌悪を催した男の顔。それを見た俺は今度こそ明確な嫉妬を覚えた。

「さっきはゴメンね。驚かせてしまって」

申し訳なさそうに目尻を下げる瘦身の男は、なんと外人だった。詳しくどこの国か判じるのは難しいが、顔立ちからしてヨーロッパ系のように思う。

全ての女子が放っておかないだろうほどの整った容姿をしており、長く伸ばされた銀髪が神々しい。遠目から彼を見つけた男は性別などを考慮する暇もなく一瞬で恋に落ちてしまっただろう中性的な魅力に溢れている。そんな雰囲気を持った男だった。

今ではちゃんと真っ白いシャツを着込んでおり、逞しかった胸板は隠されているが、そのお陰で貶すことのできる要素も見つけられず、しかして男の格の違いをまざまざと見せ付けられる結果となった。

ただ話の分からない人ではないらしい。日本語も流暢だったし。

「ボクはフレイ・エツダ。二年ほど前に、フィンランドから日本に来たんだ」

「あ、ども。園芸科一年の佐田彦名です」

お互い自己紹介も終わったところで、部屋の中を見回してみる。

意外と片付けられている室内は八畳ほどの和室で、色々な小物が入った棚が二つに大きな丸テーブルが一つ、そして座椅子が複数あった感じだ。所どころに油揚げやら毛皮のコートやら謎の物体が落ちているが、まあそこは豚が居座る部屋という容認しがたい事実を既に目の当たりにしているので黙殺。

中の様子を見ると、フレイ氏の他に二人が座椅子に座っていた。

一人はダークブラウンの長い髪にウェーブをかけた、おっとりした雰囲気の人。整った目鼻立ちには絶えず微笑が浮かんでいて、どこか世俗を離れた禁欲の修道女を髣髴とさせる。落ち着いた空気をまとって佇んでおり、俺よりも年上に見えた。

「こんにちは。はじめまして、佐田君。私は環境学科一年の稲倉ちづるよ」

「い、一年!？」

同年だと知り、ついつい声を上げて驚いてしまった。

「あら。なあにその反応。私は紛うことなく今日入学式を迎えたあなたと同年の女子なのだけど、一体あなたには何歳に見えたのかしら？」

「は、はは。……な、何歳でしょう。み、未知の美貌過ぎて、俺にはなんとも」

「あらそう。そうなの。ふふ、これから仲良くしましょうね。私の事は『ちづる』と呼んでくれて構わないわ。でもちゃんと愛が籠ってないと私、あなたに何してしまうか分からないから、よろしくね？」

一瞬でヒエラルキーが決定した。

背筋を伝う冷たい汗に引き攣った笑みを貼り付け、もう一人を見る。

少し俯きながら口元に手をあて、可愛らしい大きな瞳を心細げに潤ませながらオロオロと左右を見回している少女。色の抜けた茶色のショートヘアを揺らす彼女の顔は少し青白く、その不健康さも相俟って儚げな印象を受けた。

「は、はじめまして。保宜ミオといいます。今日、栄養学科に入学しました」

「君も新人生？」

「は、はい！　それで……っ、げほっごほっ」

「……………大丈夫か？」

「けほけほ、……………はい。ご心配お掛けしました」

「いや、別にいいんだけど……………。……………君、なに学科って言うてたっけ？」

「栄養学科です」

医者の不養生という言葉を思い出さずにはいれなかった。

それにしても、入学初日にも関わらず俺以外の一年生がいるとはな。このサークル、意外と前評判でも良かったのだろうか？

「二人とも、今日入学したばかりなのにもう入会を決めてるのか？」

「私たちは付属高校からのエスカレーター組なのよ。だから、この活動には高校生の時から参加してたわ」

「へえ、そうなのか」

今でも何の活動してるのかイマイチ分からないけれど、という告白は聞かなかったことにした。

「で、でも高校の校門にイツキ先輩が仁王立ちしてた時はミオ、驚きました」

「あの人は高校生の時からそんなことしてたのか」

「はい。一年生だったミオとちづるちゃんを問答無用で捕まえて、大学に連行していった時のイツキ先輩はもう凄い剣幕で、ミオたち宇宙人に改造されちゃうんじゃないかとヒヤヒヤしてました」

アブダクションを怖がる夢見がちな高校生か。

宇宙人なんてこの世界にいない、という現実を教えてあげるのが。

「……………、……………そうなんだ」

純真無垢な彼女を見ると結局、口には出せなかったが。

「ごめんなさいね。この子、こういう子なのよ」

「ど、どう意味ですかちづるちゃん……………っけほ、こほっ」

「あーはいはい。興奮しないのよミオちゃん。向こうで日向ぼっこしましょうねー」

ちづるさんに背中を支えられ、窓際へと連行されていく保宜の背中を見送った俺は、山積している疑問を解消していく作業に移ることにした。

「ところで、いくつか質問があるんですが」

話しかけるのは、ここの代表者らしきフレイ氏だ。

「どうぞ」

「あなたがLDK同好会とやらの会長ですよネ？」

「違うよ」

「それじゃあ活動内容を教えてください……………い……………？」

ちよっと待て。俺は当然の流れとして今の質問をしたんだが、ど

うも否定の言葉が聞こえた気がした。

「……今、なんと？」

「違うつて言っただ。ボクはこの顧問だよ。一応、フィン語を教える先生です」

「……。……なら、会長というのは……」

「会長はあたしだ」

例の先輩が挙手した時は本気で殴り飛ばそうかと思った。

「……。……なんかさっき、会長は別にいるような口ぶりだった気が、しないでないんですけど」

「趣向だ」

「……。先輩に今度、ささやかなプレゼントを贈ろうと思います」

「ほう、何だ？」

「国語辞典です」

「ぜひともそれで日本語を勉強してください。」

「分かった、楽しみにしていよう」

皮肉で言っただけなのに、存外に嬉しそうなのが気になった。

とまあ、こんな調子で会長であることが判明した先輩だが、この人に質問をしていても明後日の方向からさらに空間転移して地球の裏側にまでレポートしてしまうだろうことは目に見えているので、俺は顧問であるフレイ氏に目標を定めた。

元々この人に質問するつもりだったんだ。会長から顧問へ、ちょっと肩書きが変わっただけだ。

「それで先生。LDK同好会の活動内容とは？」

「それはね、部屋の間取りについて熱く議論すること」

「……。……はあ」

「ウソ。油揚げを世界に広めること」

「……。……ふう」

「それもウソ。日本を救うこと」

「……。……ほお」

「どうでもいいじゃないか、そんなこと」

「投げたな」

「大学のサークルの活動内容なんてあつて無いようなものだよ」

「あるのにもかかわらず無いものになっているだけとしか思えません」

「佐田彦名君」

「はい？」

なぜにフルネーム？

「君は、自分の名前をどう思う？」

話の流れが急すぎる気もするのだが。

それにしても、今日はやたらと名前に言及される日だな。高木さんの時といい、このフレイ氏といい。大学生の間で今さら姓名診断でも流行っているのだろうか。

ただ、そこで高木さんに言われた言葉が脳裏をよぎる。

——素敵な名前、か。

俺はこれまで、自分の名前に思い入れなど持ったことがなかった。小学生の時は他の人と違った響きの名前を茶化され、中学生になると渾名が彦根城になり、高校生では意識することすらなくなった。どちらかというとな前に関して、いい思い出の方が少ない。

しかし今日。自分の名前を褒められた。

あの何とも言えないくすぐったさ。少し恥ずかしく、それ以上に嬉しくもあった。

世の中には色んな人がいるものだ。若干嫌いでしたらあった自分の名前を素敵と言ってくれる人もいる。

我ながら単純だとは思うが、好きになってもいいかも、とか考えてしまっていた。

だから、こう答えることにした。

「分かりません。でも……嫌いではない、かも知れません」

「そっか。うん、そうか。ならいいんだ」

微笑付きの顔きが返ってきて、何故かホッとしている自分がいた。なんでだろうな。

とか考えていたら突然、

「よし、合格！」

「また言われた」

「今日から君は、このLDK同好会の一員だ！ 顧問であるボクが認める！」

「まだ俺の疑問は何一つ解消していないはずなんだけど」

「気にしないで。じきに気にしていられなくなるから」

「意味深なセリフをマジ笑顔で吐かないでください！ ますます入りたくなりましたよ！」

「はいダメー、ブブー。君に拒否権はありません」
小学生か。

「という訳で、今日これから懇親会を開きたいと思いまーす！」

どことどう繋がって『という訳で』なのか、俺にご教授願いたい。すると、ぽんぽん、と肩を叩かれた。そちらを向くと、

「どうだ、気に入りそうか？」

先輩の笑顔があつた。

「……さて、どうでしょう」

「まあ騙されたと思って」

既に稀代の天才詐欺師にまみえてしまった気分です。

「はあ」

理解した。この人たちと普通の会話をこなすことがどれだけ困難か。

そして、もう一つ理解したことがある。

認めたくはなかった。でも――

どうしてか居心地がいいのだ。この場所が。

御厨斎都姫という先輩は人格破綻しているし、フレイ「エツダとかいう顧問はまともそうに見えてその実標準ラインの遥か上方をかつ飛ばしていく奇人だし。

なのに、彼らと話していると、緊張を解されている自分がいる。言うなれば、途方もない長い時間を共に過ごしてきた、気心の知れた仲間に囲まれているように。

この空間は、この仲間は、楽しいかもしれない。

予感なんて高尚なものじゃなく、もつと漠然とした感覚。

「ブヒ」

そういえば腕に抱いたままだったシユールという名の豚も、いつしか獣臭さも気にならなくなり、今では温もりによるちよつとした安心感があるだけだ。

なんだろう、この気の抜ける感じ。

認めよう。悪くない。

俺だって、新しい環境に初めて飛び込んだ緊張というものは持ち合わせていた。当然だろう。人間だもの。

友達ができるだろうか。ちゃんと人と話せるだろうか。小学校入学当時に不安がっていた心配事を、大学の入学式でも律儀に持ち続けていた俺だが、きつと皆そうだったんじゃないかと思う。ただ、顔に出さない術を憶えただけで。

捨てたくても捨てられないその緊張を、新しく構築した人間関係や、自分のやりたいと思っていた活動などを通して、人は時間を掛けて消化していく。

俺の場合、それはこのLDK同好会のような気がする。

先ほど1対9で否定的な方に傾いていた心境は、既に逆転していた。

不本意ながら、俺はLDK同好会に興味を持ち始めてしまっているようだ。

いや違うな。きつとこれが本意なのだ。

「飲むぞー!」

既に若干頬の赤らんで見えるフレイ氏が、長い銀髪を振り乱しながら拳を突き上げる。

「私たち未成年ですけど」

座椅子に座っていた二人の内、ちづるさんがやんわりと言う。

「ノンアルコールビール!」

「そ、それでも未成年のミオには抵抗があります……」

こちらはもう一人の座椅子組、保宜のアタフタしながらの弁。

この二人とはまだ交わした会話が少ないが、まあこの後の懇親会とやらで話す機会もあるだろう。

「楽しそうだな」

我知らず顔を綻ばせていたところに再び、先輩が声を掛けてきた。さぞしてやつたりの顔をしているかと思いきや、年長者らしい落ち着いた笑みを浮かべている。

それを目にした瞬間、ちよつと心臓が高鳴ったりしたのは秘密だ。さて、どうでしょう」

「はは、そうか。照れ隠しもほどほどにな」

「……………」

この人には敵いそうにない。

しかし先輩との会話は、思いの外楽しかった。

LDK同好会。少しおかしいメンバーが揃っているけど、面白そうだ。

ここにすることが面白くなければ、こんな心からの笑顔を浮かべられるはずがない。

俺には、特に大学生活を始めるにあたって決まった計画や目標があったわけでもなかった。だったら、ここに飛び込んでしまっても別にいいだろう。

気持ちが高まったなら、後は自分から動くだけだ。

「俺はソフトドリンクでお願いしますよ」

「ええー、つまらないよ佐田君！」

「法律に引っかけた問題を『つまらない』って理由だけで片付けないでください。仮にもあなた顧問でしょう」

「うわー、正論過ぎて冷めるよ」

「先生だけが盛り上がり過ぎなんです」

俺とフレイ氏の遣り取りに、会室の彼処から控えめな笑声が漏れる。

ほんのちよつと、自分もLDK同好会の一員になったような気がする。

した。

……結局、活動内容は不明のままだがな。

「ねえ、大丈夫？」

「……うー……」

机に突っ伏す俺の背中を、隣の高木さんが擦ってくれていた。

昨晩の懇親会は、一人酒の寂しさに即悪酔いしたフレイ氏が自らのみ参加する自慢大会を始め、続いて服を脱ぎだし、それを止めるのに四苦八苦していると終いにはテンション上がりまくってガチアルコールを未成年にまで無理矢理飲ませ始めるといふ最悪の展開になり、それから十数時間が経過した現在、俺は絶賛グロッキー状態だった。

「あのナルシー野郎……」

静止するべきはずの大人であるフレイ氏が学徒に酒を勧め、拳句明けた今朝はその一切の記憶を無くしているという始末。

こちらが必死になって顧問の公然わいせつ罪を未然に防いでやったというのに、それすら欠片も憶えていない。

本当に性質が悪い。

それにしたって、今朝チラッと見たちづるさんがケロツとしていたのには驚いた。昨日は俺以上に飲まされていたはずなのに。

今思い返してみると、お開きまで顔色一つ変わらなかつた気がする。保宜なんて口をつけた瞬間に真っ赤になってトイレに駆け込んだのにな。

「昨日、大変だったの？」

「……そりゃあもう」

「そう言ってる割に満足そうな顔してるんだけど、それってどういうことかな」

「どういふことなんだろうな」

なんて言いあっていたら背後から、ゲンナリしたような声が掛かった。

「おはよう。朝からお熱いね、お二人さん」

「な、何言ってるのよ加藤君！」

「やーやー赤くなっちゃって。ごちそうさまです」

「……なあ虎之助。その朝から熱い俺の想いが今にも口から飛び出しそうなんだが、お前にぶつけてもいいだろうか」

「空気ブレイカーだねサタン君！」

「誰のことだよサタンって」

「佐田君以外に誰がいるの？ 佐田、さだ、さた、サタン。……どう！？」

「それはフリだと考えてもいいんだよな」

「え、何の？」

「サタンって、RPGとかでも結構色々吐いてるよな。なんちゃらプレスみたいなの」

「本気がビシビシ伝わってくるね。止めて」

「そうか、残念だ」

虎之助を加えての他愛もない談笑。俺も喋っているうちにグロッキー状態から抜け出せてきた。

授業の開始時間も迫ってきた。この時間になると急に教室内の人も増えてきて、大学生活初めての授業が始まるという実感が一気に込み上げてきた。

記念すべき最初の授業は『植物論』。内容を見るに高校までの『生物』でやった範囲と大差ないようだったが、『論』とつくと途端に大学らしくなる。

いよいよ、チャイムが鳴った。

柄にもなく背筋などを伸ばしながら、教師の登場を待つ。

そしてガラガラとスライドドアを開く音と同時に姿を見せた人物に、教室が固まった。

特に、俺の隣に座っていた高木さんなどは『カチーン』という効果音が聞こえそうなほどに全身を硬直させていた。呆然といった具合に近い、魂が抜けたような現の抜けっぷりだった。

「どうも皆さん。お元気？」

……元々お元気でなかった上に、あなたの登場で益々お元気でなくなりまして。

教壇に登ったのは、資料で確認しておいたこの授業の担当教員とは違う人。

更に言えば、俺の隣で見事な石灰柱となっている高木さんに言い寄ってきた男たちを、一人残らず社会の掃き溜めに追放してきたという慈悲なきエクスキューションー。

烈火の如く燃え盛るシスコンお姉さんにして、この大学の学長。

……俺、消されるのかな」

高木晴香が、そこにいた。

「ご愁傷様だね」

一つ後ろの席に座っていた虎之助が、慰めるように俺の肩を二度叩いてきた。隠そうともしない含み笑いは腹が立つ。

「少しの間だったけど楽しかったよありがとう」

「棒読みは止めてくれ」

「だって、感情を押し隠してないと涙を催しちゃいそうで」

笑いの間違いだろう。

「まあとりあえず、さようなら」

「泣きそうな割に最後はあっさりしてるんだな」

「僕のせめてもの強がりだよ」

自分で言うところが何とも何とも。

そんな遣り取りを取り繕った表情でする俺だが、内心ではピューピュー寒風吹きすさぶ心象風景。

隣から伝わってくる固い空気もあって、俺も一緒にカッチコチになりそうだったが、その一步手前でお隣さんが茫然自失状態から復帰した。

「な、何でお姉ちゃんが……？」

「……俺を亡き者にしに来たんじゃないか？」

「……、……………」

否定はしてくれないのね。

そんなこんなで俺が絶望していると、

「『植物論』の担当だった岩倉先生が産休ということで、急遽私が受け持つことになりました」

産休なんて急に決まるものでもないと思うんだが、そのところどうだろう。

それ以前に、岩倉先生は男だ。

岩倉先生が身包み剥がされて荒野のような何も無い場所に転がされている、嫌な想像だけが膨らんでいく。

「この『植物論』も、私なりに進めていきますので、そのところよろしく」

その『私なり』の方向性が未知なのは、よろしくされがたいのですね。

「それでは早速、授業を始めたいと思います」

「……………」

「返事は？」

「……………はい……………」

予想以上に面倒くさい人らしい。

しかし。その面倒くさがが凝集されていたのは、この直後のセリフだった。

「それでは、行ってらっしゃい」

「は？」

生徒全員の頭上に？マークが浮かんでいたことだろう。いろいろ端折り過ぎだ。

訊ねたくても訊ねられない空気の中、教室にいる全ての人の中で最も学長と親しいであろう高木さんが、思い切って手を挙げた。

「せ、先生」

「どうしました、高木さん？」

「行く……………」というのは一体、どこへでしょう？」

「探検に決まってるじゃないですか」

探検とな。どうやら俺の公開処刑ではないようで、ひとまず安心。

「皆さんは大学に入学したてで、構内の棟の配置や教室の位置などまだ分かっていない部分も多いことでしょう。なので、この時間を使って存分に構内を探検してもらおうと思います」

意外とマトモな提案だった。

「ただし、私の指定したチェックポイントを通過しないといけません」

余計なオプションが付かなければ、な。

「これから皆さんに、一枚の地図を渡します。そこに複数示されている構内のチェックポイントにちよつとした小物が人数分置いてありますので、それらを持ち帰らないといけない、というルールです。時間以内に帰って来れなかったり、小物を持って来れなかったりした場合、例えば期末テストでいい点を取っても単位はあげられませんので悪しからず」

最後の一言はいけない。

高校まではあまり馴染みのなかった『単位』という単語とは、大學生がこれを取った逃したで一喜一憂する禁断のワードであることを、俺は理解している。

すなわち、昨日付けで大學生となった俺だって、それに一喜一憂する人種になったということに他ならない。

「皆さん頑張ってください。ちなみにこの授業……………『必修』、ですからね」

「……………！」

必修。それは単位という禁断のワードの中でも最も忌むべきもの。これを逃せば留年確定という、禁忌のスペルだった。

記念すべき大學生初授業の単位であり、しかも一年次から留年の危機とあつては、生徒たちの起こすアクションなど、火を見るより明らかだった。

一様にシユタツと席を立つ。血相を変えて学長の下から地図を引

っ手繰ると、瞬く間に教室から駆け出していった。

出遅れてしまったのは、俺、虎之助、高木さんの三人。他の同級生は綺麗さっぱり教室から消え失せていた。

「……とりあえず、俺らも行くか」

「……そうだね、佐田君」

「……僕、また巻き込まれポジション？」

恐る恐る教卓に近づき、教卓上にある地図を掴もうと手を伸ばす。予想していたような暴力イベントも起こらず、シスコン学長という関門を無傷で突破することができたのは僥倖だった。

なぜか抜き足差し足で教室を退出しようとする俺たち三人。ドアに手を掛け、ようやくこの微妙に張り詰めた空気から抜け出せる――

――と、安堵の息をついたその瞬間。

「佐田彦名君、といったかしら」

ビクウツ！！ と背筋が伸びた。

背後から、高木晴香学長の御声が掛けられたのだ。

俺一人、名指しで。

錆びの回ったブリキのようにぎこちない動きで、振り返る。

どこかで見たことのある気がする種類の笑顔を浮かべた妹大好きお姉ちゃんが、こちらへ目を向けていた。

その表情のまま、再び口を開く。

「妹のこと」

キタ――！！

「……な、何でございましょう？」

下手に出してしまうのも生物の生存本能からして無理からぬことだったように思う。

それでも次にどんな辛辣な罵言が俺に浴びせかけられるのか半ば覚悟しながら、待つ。

しかし、その口から発せられた言葉の続きは、俺にとって意外なものだった。

「よろしく頼むわね」

苦笑に顔を歪めながら、そう言ったのだ。

それは何だか……そう、妹のことを真っ当に心配する姉の顔で、聞いていた印象と丸つきり違う表情に面食らってしまう。

俺が呆然としていると、学長はシッシと追い払う仕草をする。

「早く行きなさい。君はきつと、他の人よりも時間が掛かるわ」

虎之助に肩を掴まれることで現に復帰した俺は、最後の学長の言葉に首を捻りながらも教室を出る。後にはちゃんと、どうしてかムスツとした顔の虎之助と、頬を赤らめた高木さんが付いてきていた。しかし、かく言う俺は、今どんな表情をしているのだろうか。緊張しすぎて凝り固まった表情筋のせいで、自分で自分の表情が把握できない。

でも、少なくとも気分的には悪い表情でないことだけは確信できる。

俺の大学生活の先を閉ざしていた暗雲が一つ、晴れたのだからな。

構内ですれ違う園芸学科生も複数人で固まって動いていたので、三人でいる俺たちも特に問題ないだろう。

とりあえず、それぞれ受け取った地図を広げてみる。

「第一チェックポイント、構内南西にあるグラウンドのベンチ、か」

「第二チェックポイントは、構内南東にある四号棟の屋上だって」

「第三チェックポイントなんて、構内北にある学食のカウンター下とか書いてあるよ」

「綺麗に三つ隅っこに配置しやがって」

「これ、意外と時間かかりそうだよね」

「僕、留年とか嫌だよ」

文句たらたらと垂れ流しながら、それでも足を止めることなく第一チェックポイントへと向かっていった。

大学での一単元は九十分。高校に比べたら欠伸が出るほど長いといっても、今回に限っては、その間に構内三箇所を設置されたチェ

ツクポイントを回らなければならないのだ。あまり悠長に構えても
いられない。

という訳で、第一チェックポイント。当大学のグラウンド。

「ベンチベンチ……」

「あつ、あれじゃない？」

高木さんが指差す先に、確かに真新しい木製のベンチがあった。
ビー玉のようなものが入った籠が、そこに置かれている。あれが学
長の言っていた小物とやらだろうが、籠の中の残りは三個。教室を
出た時間を考えれば当然だが、俺たちが最後のようだった。

「ともあれ、第一チェックポイントクリアだね」

虎之助が息を弾ませている。同じくささやかな喜びを分かち合い
たい俺だったが、しかしここに来てから、妙な気配を感じてならな
かった。

「？ どうしたの？」

「……いや」

何だこれ。何かに引き付けられるような妙な感覚。おまけに何者
かにジーツと見つめられているような不気味さまで付属している。
傍から見れば、特に目に止まるものもない場所でキョロキョロし
ている俺の方が奇妙に映るだろう。しかし、この生暖かく背筋を撫
でられるような感覚の正体を確かめることが俺にとっては現在の最
優先事項だった。

ふと。

グラウンド横の雑木林の中に、何か異質の色がチラッと見えた気が
した。

「あ、ちよつと佐田君？」

高木さんの戸惑うような声を置いて、そちらへと歩みを進める。
下草をザクザクと踏みしめ。彦生えの枝を払い除け。

「あ……」

見つけた。

「ねえちよつと、どうしたの……って」

俺が発見したものを高木さんも見、そして同様に息を詰めた。
そこには、小さな祠があった。

本当に小さい、成人男性なら腕の中に収められてしまえそうなサ
イズの祠。

なのに、その存在感は確かなものだった。

初詣などで大きな神社に行った際に感じる、空気が冷たくなった
ような、もしくは張り詰めたような感覚。

喉がひりひりする。

神仏など信じていない人間でも感じ取ってしまう、畏敬の圧迫感。
それと同様のものが祠から発せられており、気付くと俺は、その
祠に向かって深く一礼していた。

葉群を踏む音に頭を上げれば、高木さんが祠に近づき、中を覗き
込んでいた。

「えーっと、『奉納・稲荷大明神』……？ これって……」

と言ったかと思いきやバツと振り返り、胡乱な目で俺をじーっと
見つめてくる。

「な、何だ？」

「佐田君」

「はい！」

「猿って好き？」

「はい？」

「猿にシンパシーとか感じちゃう？」

「いや特には」

感じる人間がいたら見てみたい。きっと猿顔だ。

高木さんの理解に窮する言葉の羅列はここで終わらなかった。

一息で俺に肉薄すると、まじまじと俺の全身を上から下まで隈なく
眺めながら、

「佐田君って、そんなに鼻大きくないよね」

「いきなり何だ」

「大柄って訳でもないし」

「お前の好みの話か」

鼻がデカくて、かつ大柄。そんなもって猿。

テングザルしか思いつかん。

「ち、違うよ！ ただちよつと確認を」

「だから何のだ」

「あ、あんまり女の子の秘密を追求しちゃいけないだよ！」

明らかに俺が関わってる雰囲気でもか。それはあんまりだと思うが。

プライバシーだなんだと、自分のことをひた隠しにするのが最近の風潮なのは理解しているが、自分に関わることとなると何とも納得しがたい。

「ともかく！ 時間も無いんだから、次のところ行こ！」

高木さんは無理矢理話を終わらせると、自ら先頭に立ってスツタカ歩き始めた。

結局、今のは何だったのだろうか。

と考えているうちに高木さんはどんどん先に進んで行ってしまふ。見る間に離れていく背中。俺は焦って、咄嗟に祠にあった御札のよなものを掴んで出て来てしまったが、やはりマズかっただろうか。ややもすれば、祟られたりするのだろうか。

とか不安がるものの、どうしてか心の奥ではそんな事はないと樂觀していた。

そもそも何で御札を手にとってしまったのかは、そうしなければならなかった、としか説明のしようがない。

第二チェックポイント。構内南東にある四号棟の屋上。

到着したそこは思ったほど広いスペースではなく、先生の置いてあったアイテムもすぐに見つけることができた。

……できたのだが、今回は少々あからさまに過ぎた。

「……また祠があるんだけど」

虎之助が気味悪そうに、誰でも見れば分かる事実確認を行う。

俺はというと、第一チェックポイントにあった祠を見つけたときと同様の圧迫感を得ていた。この祠は間違いなく、先ほどの祠と性質を同じくするものだ。

再び、反射的に一礼。

高木さんの足音で顔を上げるところまで一緒だった。

「やっぱり、ここも稲荷大明神」

「……なあ、稲荷って何なんだ？」

稲荷っていうデカイ神社が京都の方にあることは知っているが、そのワードの詳細についてはこれっぽっちも知識が無い。

唯一知っていることといえば、狐が関係あるってことだな。だがこの場面で、それを知っているから何がどうなるという訳でもないことは俺にも分かる。

「佐田君って、あんまり神社とか行かないの？」

「そうだな……神社って名詞を口に出すのも正月か祭り時くらいで、その他にはこれといって思い出がないな」

「そうなんだ……」

どうしてそこでショックを受けたような声を出すのか。ついでに『私、気にしてないから！』みたいな感じで気丈に笑いかけるのも止める。

何だか変な勘違いをしそうになるだろうが。

「ねえ、とりあえず次行こうよ。結構時間ピンチだよ？」

「ん？ ああ、そうだな」

虎之助の言葉に頷いた俺たちは、足早に屋上から抜け出した。

ともあれ、第一チェックポイントに続いて第二チェックポイントにも祠があった。これは某かの意図を感じる。

やはり今度も義務感に駆られ御札を頂戴したのだが、今回は拍手などを二回してみた。

何もしないよりかはマシだろうという俺の賢明な判断だ。さて、次は何をしようか。

「……何だか今日の夜とかおしっこちびって寝れなくなりそう」

第三チェックポイントに到着して早々、うんざりした様子で虎之助がぼやいた。

「一体何だ藪から棒に。おねしょ予告ならママンの膝上でやってくれ」

「僕一人暮らしたから!」

そうだったか。

「んで? なんで小便ちびりそうなんだよ?」

「だってだって! ここにもけつたいな祠があるよ!? まるで学長に『さつさと昇天してしまえ』って言われてるみたいで怖いよ!」

「被害妄想だな」

「……そうかなあ」

どんな権謀術数が絡んでいたのだとしても、目先にぶら下がる単位という餌を逃すわけにはいかない。虎之助が言っていたように、一年目から留年とか勘弁願いたい。

学食のカウンター下に置いてあったアイテムを無事ゲットした俺たちが三度奇妙な感覚に襲われ、少し奥まったところに向かうと、人目を忍ぶといった具合に第一第二チェックポイントと同様の祠を見つけた。

まあ虎之助が怖がる気持ちも分かる。学長のことがなくても、行く先々に古ぼけた祠があつては、何かオカルトめいた来歴を感じずにはいられないだろう。

今回は半ば意識的に礼をし、それから二礼二拍手一礼をした。神社に関することで俺が知っている唯一と言つていい作法だ。

ここでも御札を頂戴する。これで都合三枚揃った訳だが、揃って何があるのか、そもそも三枚でコンプリートなのか、俺は知らん。

ともかく、だ。三つのチェックポイントも通過し、学長の用意したアイテムも事変無くゲットすることができた。

どうやら単位は確保できそうだな。

「そろそろ行こうよ。少し早めに歩いてギリギリかも」

「そうだな。ここまで来てタイムアップとか洒落にならん」

「う、うん。早くここ離れよう」

何に起因するか分からない虎之助のビビリようを、笑うことはできなかった。

チャイムが鳴る数秒前に教室に滑り込んだ俺たちは、学長のニマニマとした笑みに迎えられた。その裏に何を思っていたのかは、俺の思考の及ぶところではない。

『植物論』の授業以降は、特にイレギュラーなファクターで教員が代わることもなく、これが大学の授業だということを納得させられる多少高度な授業が展開された。

昼休みを挟んで三時間目も終了。本日のカリキュラムはこれにてお開きだ。後は各々帰宅したり部活に勤しんだり繁華街へ繰り出したりと、自由な時間となる。

そして俺はというと。

「……………」

性懲りも無く『LDK同好会』という札の下げられたドアの前に立っていたのだった。

中からは時折談笑の声が漏れ聞こえてくる。複数人が既に来ているようだ。

一旦そこで深呼吸を行う。どうしてか、ドアを開くには多少の憂鬱が伴った。昨日は確かに居心地がいいと思ったんだがな。

それもこれも、あのへべれけ顧問が原因に違いない。

未成年に散々酒を飲ませた挙句、自分は記憶を無くしてあっけらかんと翌日現れる。性質が悪いにもほどがあるだろう。

初めて飲んだ酒の味がCMで見るような爽やかな笑顔を浮かべられるものでなかったのは、一緒に飲んだ人間が関係していたに違い

ない。

飲みの席では連れがどんな酔い方をするかが重要であるという教訓を心に刻み付けた昨日の夜だったわけだが、思い返すと文句の一つも言つてやりたくなってきた。

ならば、目の前の扉を開けないと始まらない。

「うっし」

気合を一つ声に込めて、両頬を叩く。

そしてドアノブに手を掛け——ようとしたら、そのドアノブが勝手に動いた。

それが示す意味は単純明快。中から誰かが開けようとしているのだ。

しかし、そのスピードが予想外だった。

焦点を合わせていたドアノブが一瞬で俺の視界から消え失せる、とか現実を認識する間もなく左頬に重い衝撃が走った。

「ばぶぶおー!!」

目にも止まらぬ高速で内側から開かれたドアが、俺の頬を打ったのだ。明らかに年期の入った扉には過剰労働に違いない高駆動で、その勢いに押された俺は更に倒れて強か側頭部を強打。目の前に火花が散る、なんて表現を初めて実感を持って使った瞬間だった。

揺れているように感じる頭を抱えつつ状況を確認しようとしたのだが、そこで追い討ちが仕掛けられた。

「うおおおおおおおおお………」

会室内から飛び出してきた巨大な物体に轢かれたのだ。

表現としては『轢かれた』で間違いない。それほどの重質量高速移動物体だった。

その正体を目視で確認はできなかったが、僅かな水滴の跡がここから延々と続いていて明確にその存在を顕示しているし、さらに言うなら尾を引くように残っていた嗚咽の声には聞き覚えがあった。というか忘れようがない。

それが一種のトラウマとして俺に刷り込まれたのは、つい昨日の

ことなのだから。

昨日のガイダンス時。妹にこっぴどく拒絶された哀れな男が、今と同様の嗚咽を漏らして教室から逃げ去っていったことは、まだ記憶に新しい。

そう。高木兄こと高木風馬だ。

しかし、昨日を俺の命日にしようとしたあの賤丈夫が、どうしてLDK同好会の会室から飛び出してくるのか。皆目見当がつかない。LDK同好会には妹の高木さんも関わっていないし、アイツがちょっかいを出す謂れは無いはずだが。

まさかとは思うが、妹からの言いつけで俺に手を出せないからって、俺が入会したLDKの人たちに憂さ晴らしを……みたいなことじゃないだろうな。

至るところがズキズキと痛む身体をおして立ち上がると、無意識に焦る内心を隠しつつ急いで内部へと滑り込む。

するとそこでは――

「び、びっくりしまし……っ、げほっ」

「はいお茶」

「ありがとうございます、ちづるちゃん
ずずー。」

「はー、落ち着きました」

「良かったわね。って、あら佐田君？ 来てたのなら声掛けてくれればいいのに」

「あ、ほんとだ佐田君です。こんにちは」

心配とは無縁の、和やかな会話を繰り広げていた。

しかし、保宜の頬が赤く上気しているのは確かだ。

ただ立派なニンジン的一本その手に持っているのは、一体どういった趣旨のプロパガンダなのか。

「……何か、あった？」

「はい。ありました」

「……………」

「……………」

俺を見て不思議そうに小首を傾げるのはどういうことだ。

「……聞いてもいいのか？」

「はい？ 構いませんけど」

いいんだ。一向に答えてくれなかったから言いにくいことなのか
と思ったのだが、それでもなかったらしい。

いちいち会話を止めるのは、彼女の身体が弱いことに一因がある
のかもしれない。

「ごめんなさいね。こういう子なのよ」

ちづるさんは俺の意図に気付いてくれたらしい。艶かしい目尻を
下げて苦笑する。

申し訳ないが、大学生にはとても見えなかった。

「今、不愉快な思考をされた気がするのだけど、気のせいかしら？」

「きつと気のせいだ。心労が溜まつてるんじゃないか？」

笑顔のままのちづるさんから与えられるプレッシャーもあって、
どつと疲れた俺は手近なところにあつた椅子を引き寄せると、どっ
かと腰を下ろした。

「そんで、何があつたのさ？ さつきそこで号泣しながら走り去る
高木風馬と……その、なんだ。すれ違ったけども」

「ああえーっと、そうですそうなんです。その、高木……風馬さん

？ から先ほど……」

「……先ほど？」

随分と溜めるじゃないか。これは、それなりの内容を期待しても
いいということか。

保宜の可愛らしい小さな唇から紡がれるのは果たして、どのよう
な言葉なのかね。ハラスメントの種となりそうな告白か、はたまた
イツマスビージョーキング！ と笑い飛ばしたくなる笑い種か。

「先ほど、その高木さんから」

「高木さんから？」

「プロポーズされました」

「……………」

どうやら後者だったようだ。

告白すら通り越してプロポーズな辺りが、頭のネジを一個といわず何個か母親の腹に忘れてきたと思しき高木兄らしいといえらしい。

「それで……どう、答えたんだ？」

答えは分かりきっているがな。

「もちろん断りましたよ」

まあ当然か。

「何と言いましようか……そう、そうです。あの人は『生理的に無理』、です」

ただっ広い草原でむしゃむしゃ草を食んでる羊のような人畜無害な見てくれのくせに、この子は切れ味鋭い牙と爪を持っていた。

確かにメンタル面に……多少の問題を抱えているのは否めないと思うが、それ以外の男子としての優良点はほぼ余すところなく持ち合わせているように俺には見える。

ただ、メンタル面の問題が『多少』と言う表現で包括できる範囲のものかどうか聞かれると、俺としても返答に窮するがな。

彼氏がシスコンとか、女子はどう思うのだろう。

一、 家族を大切にして素敵。

二、 私と妹のどっちが大事なの？

三、 キモい。

保宜にとつては、この三つの中で選ぶのなら選択肢三だったのだろう。生理的に無理とか言うくらいだからな。

「にしても、何でそこまで」

「ミオはあの人苦手です。だって、何だか……そのう……、……き、斬り殺されそうなんですもん」

極端だが、俺も正直頷きそうになった。

奴に殺人衝動が眠っていることに関しては、否定する気は毛頭ない。俺だって昨日殺されかけたんだから。刀くらい簡単に持ち出し

てきそうだ。

つまり保宜はそのあたりを咄嗟に見抜いたのか。だとしたらかなりの慧眼だ。

しかし、分らないことが一つある。

「そもそも、どうしてそんな唐突に惚れた張ったの大騒動が発生したんだ？ 高木兄に何か思わせぶりなことでもしたのか？」

「し、してませんよ！ さっき会ったのが初対面ですっ
なぬ？」

と疑問を浮かべたところで、ちづるさんが話しに入ってきた。

「何か意味のわからないことを叫んでいたわね。確か……『海石榴市の八十の岐に立ち平し、と頓に聞こえし猿はここにおるかあ！おれば疾く馳せ参じ、大蛇をすら一太刀の下に切り伏せる我が鋭なる剣の染みとな』まで言ってから、たつぷり五分くらいフリーズしてたわ。ミオを見つめながら顔を真っ赤にしてね」

剣とか自分で言ってたんだ。そりゃ斬り殺されるとか思うわ。

それにしても、また『猿』か。今日の一時間目に高木さんからやたら俺と猿の関係性について言及されたが、高木家の人からは俺が猿顔に見えるのだろうか。

ちよつとシヨック。

と、そこでちづるさんが、遠い目をしながら外を見た。

「いわゆる一目惚れってものかしらね」

その憂いを帯びた表情は、尚のことちづるさんを妙齡の貴婦人の如く映し出した。

「私、その手の状態に陥ったことがないから、いまいち共感できないのよね。ねえ、どう佐田君？ 同じ男として、一目惚れに共感できる？」

「まあ、そうだな」

「あらそうなの。なら佐田君。私に一目惚れした？」

「いえ、滅相も御座いません」

敬語になるのは条件反射だ。致し方ない。

「それはどういった意味の返答かしら？」

「お答え致しかねます」

「そう。もったいない事をしたわね、あなた。私に一目惚れしていたなら、刺激的な蜜月が待っていたわよ」

「刺激的ではなく刺激しか待っていない気がします。しかも受容体は痛覚神経のみ」

「ふふ、面白いわね。あなたと話していると飽きないわ。私たち、案外気が合っているんじゃないかしら」

「勘弁してください」

土下座した。

のにも関わらず、ちづるさんは攻勢を緩めてはくれなかった。

「ふふ、やっぱり私たち気が合うのよ。今のあなた見て私、ゾクッて来たもの」

暗いブラウンの長い髪が何かのオーラに揺れるように広がる。どうやら完全に『クラブ稲倉ちづる』に支配下登録されてしまったようだ。

そのこと自体も十分な恐怖だが、それより何より……嫌がっていない自分があることがもつと怖かった。

今の危険な衝動はそつと心の奥に隠しておこう。そうしよう。

「それじゃあ早速、親睦を深めましょうか」

「は？」

土下座の姿勢のまま、ちづるさんを見上げる。するとそこには、妖しげな笑みを浮かべた艶っぽいお姉さんがいて。

ちょっと色々危機だった。

「私、見ての通り貞淑な女として生きてきたから、あまりそういったことが造詣が深くないのよ」

「……嘘つけ」

「何か言った？」

「いえ何も」

土下座の姿勢のまましばらくいたせいで、足が痺れてしまってい

る。これでは立って逃げることもままならない。

この場で唯一フリーなはずの保宜は、ニンジン振り回しながら頬染めてアワアワしているし、藁ほどの役にも立ちそうにない。

見れば、どうしたって同い年には見えないお姉さんが、指をわきわきさせながら、じりじりと迫ってきている。

もう、身を任せるしかないか。

……ヤバイ。嫌じゃない。

期待か不安か、それとも別の何かなのか。自分でも判別できない感情を持て余した微妙な表情のまま、俺は目を瞑る。

数分後の俺はきつと、彼女に忠誠を誓う従順な騎士になっていることだろう。

——それも悪くない。

とか考えた、その時。

「ダメダメダメエ——！！」

「ぐあう！」

何者かに突き飛ばされた。

錐揉み状態で安普請の壁に激突する。ずんという重い振動音に続いて、ぱらぱらと天上から建材の粉が落ちてくる。

逆さの状態ですると壁を伝い落ちていく俺が、混乱した頭をフル回転させて認識した犯人は——

「何やってるのよ！」

シスコン兄にはめっぼう敵しい、一見天女に紛う怒れる少女。

逆さまになった高木朔耶だった。

「あら、どなた？」

「だ、誰でもいいでしょう！ アンタが何やってたのかって訊いてるの——」

「あまり大きい声出さないでくれる？ うちのミオが怖がってるわ」
見ると、確かに部屋の隅っこで膝を抱えてぶるぶる震えていた。
しかも涙目。

保宜の慧眼では、それほどの恐怖対象に映るのか、高木さんは。

しかし高木さんも、異様に怖がっている保宜の様子を見て冷静さを取り戻したようだ。荒れる呼吸を二、三度深呼吸して落ち着かせる。

それからどうするのかと鈍い痛みの残る頭で眺めていると、当の彼女は口を開くことはなく俺の元までスタスタ歩いてきて、徐に俺の襟首を掴み上げた。

そのまま、巨人の如く屈強な兄をすら締め上げた膂力でもって引き摺っていく。

の、喉が絞まる。

「佐田君をどこに連れて行くのかしら？」

「ここではないどこかよ！」

「あら、ロマンチックなセリフ。私もいつか言ってみたいわ。いえ、言われてみたいの間違いかしら」

「どちらでも勝手にどうぞ！ でも相手はこの人じゃないでしょ！」
と高木さんが叫んだ途端、部屋の隅っこから、ふええ、というすすり泣きが聞こえた。

「だから大きい声出さないでって何度言えば分かるのかしら。ほら、うちのミオが泣き出しちゃったじゃない」

「……っ、ふんっ。行こう佐田君。やっぱり、ここにいちやダメ。

私と一緒にどこか別のサークルに——」

「それは困る」

と、やたら偉ぶって仰々しい声が聞こえた。そして女性の声質となったら、思い当たるのは一人だけだ。

会室の入口で、通せん坊するように仁王立ちする一人の女性。少し日に焼けた小麦色の肌色に、日射で若干色の抜けた黒髪ポニーテールが踊っている。

「なっ、御厨斎都姫……！？ 今日とは四時間目まで授業のはずじゃ」「どうして君がそんな事を知っているのかは置いておくとして、四限目の講義を担当していた三輪先生が『ちよっと酒飲みたくなったわ』とか言い出して早めに授業を切り上げてくれたのだよ。さすが

「は三輪先生だ」

「クビよクビ——！」

「君にそんな権限があるのか？」

「か、簡単よそのくらい！ 三輪先生が授業放棄したってお姉ちゃんに報告すれば、すぐに辞令が出て、三輪先生はこの大学にいらなくなるわ。ふん、私って完璧ね！」

「君の『カンペキ』は字が違うだろう」

「な、何ですって？」

きつと癩癩の『癩』に、悪癖の『癖』だろう。

「それは癩癩の『癩』に、書癖の『癖』と書く」

「……はあ？」

何とも言えない微妙な言葉のチョイスだった。口頭で言われてもパツと想像しにくいワードなため、高木さんには伝わっていない。

そのお陰か、この場はすぐに収まった。

「ともかくだが、彼を連れて行くことは許可できない」

「どうして貴女の許可がいるのよ？」

「彼がLDK同好会の一員だからだ」

「そんなの会長って立場を利用した、ただの横暴じゃない！」

「君ほどじゃないさ」

先輩の返答はいちいち高木さんの癩に障るよう練り直されている。このままでは本当に高木さんが癩癖持ちになってしまいそうだ。

結局のところ、俺が意志をはっきりさせれば止まる騒動な訳だし、そろそろ口を挟まないと。

とか思っていたところにタイミング悪く、別の人間の声が調停に割って入った。

「やあ。そんなに盛ってどうしたんだい？ 恠気争いならボクも大好物だよ？」

いつの間にか会室に来ていた、厚顔無恥のへべれけ教師、フレイ氏だった。

「ブヒ」

傍らに豚のシユールがいるのも既に見慣れた光景だ。

それはともかくとして、高木晴香といいフレイ氏といい、大学の教師というのはどうしてこうも面倒くさい人間ばかりなのか。

話がややこしくなってしまうがよい。

「そうです先生。恪気諍いなのです、これは」

アンタも乗るな、先輩。

「な、何よ『リンキー酒井』って。最近出てきたピン芸人の名前？知らないわよ、そんな人」

高木さんの語彙力に万歳。貴女のお陰で場が和む。

大和撫子みたいな雰囲気出しといて、さてはこの人、国語とか苦手だぞ。

「まあまあボクの身体でも見て和もうよ」

「和める人間がいたら見てみたいですね」

「ブヒ」

先輩も切れ味鋭い切り返しを会得している様子。ちゃっかりシユールも賛同したように鼻を鳴らしていた。

しかしながら、そんなものには慣れっこなのか、フレイ氏は一層深く破顔すると、視線の行き先を変更した。

「ところで保宜さん。その立派なニンジンはどうしたんだい？」

その一言で、会室にいた全員の視線が保宜の持つ赤橙色の野菜に向かう。

「は、え？ こ、これですか？ 先ほど、貰いました」

保宜はハツとしたように涙の溜まっていた目元を拭くと、答えた。

「へえ、誰から？」

「高木の、えーっと……そう、風馬さんです」

ビクッ、と高木さんが肩を震わせる。

「なるほど。そういうえば彼、畜産学科だったね」

馬の餌ってことか？

「えと、『我が燃え盛る至愛の証、何卒お受け取り下さい！』って言われました。会って数分後に」

保宜の証言に無言のまま顔を俯け、高木さんが回れ右する。

前髪の隙間から一瞬だけ覗いた口角が異様に吊り上がって見えたのは、気のせいだろうか。

「何だか凄く怖くって、ミオがゴメンなさいって断ったら、ぶわつと泣き出して会室から出て行っちゃいました。凄い勢いで叫んでましたよ。うおおおん、って。狼みたいに」

高木さんがゆったりと歩き出す。

それはきつと、己の一族の恥を晒した男に制裁を加えるために。すれ違いざまにはつきりと見えた口元は、男でも震え上がるほどの恐懼を秘めたピエロのような上弦の三日月形で、かすかに動いているのは何かを呟いているからか。

俺に読唇できた範囲では、

――あのばかあに、と。

その邪悪な雰囲気にも慄いたシユールが俺の足に鼻先を押し付けてくる。それを抱え上げながら俺もその温かい体温を少しきつめに抱き締めた。

やがて高木さんは会室から退出し、皆で廊下に顔を出しながらその背中が見えなくなるまで見送る。そうしてから俺は、ようやくと胸を撫で下ろした。

やはりあの人を敵に回してはいけない。きつと目を覆うような未来しか待っていないだろうから。

高木晴香に目を付けられないよう？　ノウ、それだけではダメだ。虎之助は確かにこう言っていたはずだ。高木家に目を付けられるな、と。

本当にその通りだ。あの三人は誰一人として敵に回していいはずがない。高木家には安全牌など一人もいないのだ。それぞれが役満リーチ状態で、破滅の危険を孕んでいる。

そう心から得心していると、先輩の声が聞こえた。

「高木家の面々は本当にみな愉快だな」

あの三人を愉快という表現で片付けますか。

「まあこれで、ようやく落ち着いて話ができる。今の騒ぎの内に全員が揃っているし、さすがはあたしのLDK同好会だ」

そもそも、ここでする話なんてあるんだろうか。ただの世間話じゃないのか？

「さて、LDK同好会の正式発足から二日目の今日」

「ちよつと待つて下さい」

「何かね」

「どういうことですか、正式発足二日目って」

「言葉通りだ。LDK同好会が正式に大学から承認されたのは昨日のこと。サークル立ち上げに規定されている人数が集まっていなかったのだから当然だろう」

つまるところ、俺はサークル立ち上げの人数合わせに使われたということで、悪い匂いのする棒のどこかしらを掴まされていたのか
「表向きは『近隣の賃貸情報を収集・検分し、これから一人暮らしを考えている学生へ優良物件の情報を提供する』ことを活動内容としている」

自ら『表向きは』と言っちゃうんですね。

「なら裏は？」

「それを今から話そうと思っていたのだ」

すると先輩は腕組みして目を瞑る。鼻の穴を大きくしながら鼻息を噴き出して、間もなく、カツと目を見開いた。

「我々が真に目指すものとは！」

「随分と煽りますね」

「しつ。斎都姫姐さんは自分がフィーバーしてる時に茶々入れられると怒るわよ」

「……了解」

ぶつちやけ面倒くさい。

「目指すものとは！」

何も言いませんから続きをどうぞ。

先輩はどこかの国で市民を扇動する革命家のように大きく両手を

広げ、語る言葉にも暑苦しいほどの熱が籠っている。

そんな先輩の姿を、俺は冷めた目で見つめていた。

どうせその『真に目指すもの』とやらも、おふざけまたは冗談で終わる程度のものだろう。これまでこの人を見てきた上での判断として、そう思ってしまう。

そう言えば昨日も結局活動内容は聞けないままだった。

まさか本当に、大学のサークルの活動内容なんてあつて無いようなもの、なんてことはあるまいな。

なんてつまらない予想をしていた俺は当然、次に先輩の口から放たれる言葉になど一片の期待もしていなかった。

と、そこでふと気付く。

わざわざ『期待していない』とか考えるということは、

——俺は、ここに何かを期待していたのか？

……………。

正直に言おう。俺は特に大学生というものに、これといった希望や気概といったものを持っていない。

園芸学科に、ひいてはこの農業大学に進路を決めたのだって、ただ単に植物が好きだからという漠然とした理由からだ。その植物に関した講義でさえ、結局俺には単なる眠気を催す時間ではなかった。

はつきりとした夢や目標、熱意を持つて入ってきた人には申し訳ないが、そもそも俺にとって大学なんて、親に『行っておけ』と言われたから来たような場所。

その程度のものなのだ。

そんな淡泊な俺が、この大学に来て何かを期待していた？ しかも高い授業料を払っている学業の方ではなく、こんなけつたいなメンバーの揃ったサークル活動に？

思考が表情に出ていたかどうかは分からない。だが先輩はどうしてか俺の顔を見て、確かに笑みを濃くしたのだ。

それから不敵な、しかし自信に裏打ちされた笑みを浮かべつつ先

輩が口にしたのは、こんな言葉だった。

「日本国の救済だ」

……意味が分からない。

これまで通りの俺で、相手がこれまで通りの先輩であつたなら、即行で冗談は止めるとツツコミを入れるところだろう。

ところがどうだ。今の俺は変に真面目なことを考えてしまつていて、今の先輩はまるで嘘は無いと豪語するような、自信に溢れた表情をしている。

ツツコミを入れようにも、俺の脳内検索機能は適切な言葉を見つけれなかった。

周りを見てみると、ちづるさんと保宜は、明らかに俺と同じような状態だと分かる表情をしていた。

変わらぬ微笑を浮かべているのは先輩と、そしてフレイ氏の二人だ。

「その鍵となるのが他にもない。君だ、佐田彦名君」

ビシッと指差されても、言われている意味を全く理解できない。

「君は、ようやく見つけた『導き手』なのだ」

「……導き手？」

「そうだ」

なんですかその畏まった呼称は。

それ以前に、いきなり『日本を救うための鍵は君だ！』とか言われても、漫画みたいにおいそれと信じられるはずもあるまい。

『君にはまだ君自身も知らない大きな力が眠っている』とか、『実は君は過去に世界を救った英雄の生まれ変わりなのだ』とか言われて素直に信じられる年齢はだいぶ昔に過ぎ去っている。

『導き手』？ アホか。

きつと誰でも一笑に付すはずだ。

——馬鹿らしい、と。

なのに先輩は大真面目に胸を張っている。加えて俺をじっと見つめる強い眼光も、真剣そのものだ。

しかしふと、先輩が表情を緩めた。

「まあ、すぐに信じなくても構わない」

「え、いいんですか？」

鍵だとか言っていたのに。鍵と証するからには、先輩たちの中で俺は結構重要なポストにいるんじゃないのか？

「構わない。きっとそれは自ずと自覚するものだ」

「……………だったら、その『導き手』とやらのも教える必要は無かったんじゃない？」

「そういう訳にもいかなかったのだ、残念ながら。君にはこれから活動を通した中で、自分自身を見つめてもらいたい」

「？」

「……………あまり、時間的猶予がないのだ」

この口調は、あまりに切実だった。

「もうすぐ『神節』が訪れる」

「『神節』？」

聞き返すと、先輩が無言のまま首肯した。おまけに表情を再び真剣に改める。

「暦が一回りする六十年毎に訪れる節目の年。それを我々は『神節』と呼んでいる」

六十年。いわゆる還暦。それはまた随分と長い期間だな。オリンピックとかワールドカップの四年毎でも俺としては長く感じるのに、てか『我々』って、先輩とフレイ氏の他にも誰かいるような表現に聞こえるのだが。

「日本は太古より、様々な宗教が入り乱れてきた。土着の神道以外にも、仏教、儒教、道教、キリスト教などが日本に輸入され、多くの信者を生んだ。また、そこから独自の発展をさせた陰陽道や神仏混淆という考え方も大元から分枝する形で自然と創出された」

いきなりオカルティックな方向に飛んだな。

「他にも日本に流入してきていないものも合わせたら星の数の宗教的思想が、この世界には存在する。しかしだ。その膨大な数の思想

全てに共通することがある。分かるか？」

「分かりません」

即答したが、嘘をつくよりマシだろう。

「素直でよろしい」

一瞬だけ先輩も固い表情をふつと解いたが、すぐ元に戻った。

「宗教的思想。それらはほぼ例外なく全て、神話や、それに類する説話を下敷きにしている、ということだ」

「はあ。……神話、ですか」

「しかも、それらに共通して重要視されていたのが『十二』という数字なんだ」

フレイ氏が先輩の言葉を継いだ。こちらの表情は相変わらず気の抜けた微笑のままだ。

「栄華を極めた古の文明では数字が開発され、次第に暦というものを考え出す人間も出てきた。太陽暦・太陰暦共に一年を十二ヶ月と定めているし、やがて生まれた時間の概念も同じく十二という数字を取り上げているのは、ボクたちも知るところだよな」

その『十二』が五回巡ると、六十という先に言った期間になるってことか。

六十年という期間に関しての疑問は——根本的に信じられる話かどうかという懷疑を無視するならば——解けたと言っている。しかしまだ、もつとも大事な部分の説明を受けていない。

「……まあ、千歩譲ってそれは分かりました。けど、六十年毎に来る、その『神節』とかいう年に、一体何があるって言うんです？」

「会議だ」

一言だった。

人の常識や理性を丸ごと無視して、ここまで壮大なスケールで話してきたのだから、日本沈没とか地球滅亡とか、それくらいのものが出てくるものと思っていたのに。

少し拍子抜けだった。

「会議……ですか？」

これまで沈黙を保っていた保宜がおずおずといった感じで訊く。
ようやく先輩たちの電波トークに耐性が付きはじめたらしい。

「ああ、会議だ」

その問いに答える形で、もう一度先輩が口にした。

確かに拍子抜け。ともすればギャグとして笑ってしまいそうな話
ところがその重々しい口ぶりと一点の曇りもない眼差しからは、
これまでの疑問云々全部抜きにして信じてしまってもいいかもしれ
ない、なんて思わせるくらいの意志の強さが伝わってきた。

先輩は腕組みし、鼻息を一つ。

「世界趨勢決定会議。通称WTC」

胸を張ってふんぞり返り、自信満々にのたまった、その会議とや
らの名称。

——世界趨勢決定会議。通称WTC。

何だよ、通称って。

「……………」

「何だその目は」

「……いえ別に」

と、その時。

「別に今は信じなくてもいい。でも、とりあえずは真面目に聞いて
ほしいな」

険のある声に驚いてそちらを向くと、いつも緩みきった微笑を絶
やさないフレイ氏が、苛立たし気に顔を歪ませていた。表情などは
そのままなのに、語調からそれが伝わってくる。

もしこれが演技だったとしたら、俺は無断でフレイ氏の履歴書を
芸能プロダクションに送りつけてしまいそうだ。

それほどの本気が伝わってきた。

「確かに信じられない話かもしれない。生まれてこの方、当然の常
識の中で暮らしてきた君たちにとっては可笑しな御伽噺でしかない
かもしれない。だったら、それはそれで一向に構わないから、その
笑い話として、どうか記憶に止めてくれないかな」

次の言葉を喋るとき、既に刺々しさは抜けていた。元の柔和な色を取り戻し、大人気なかったと詫びるように目尻を下げている。俺は初めて、この人が年長者であるということを思い知った。いとも簡単に、聞く体勢と心構えを整えられてしまったから。先輩が小さく目礼し、フレイ氏はいつもの微笑でそれに応える。やはり、年功というものは偉大だった。おほん、と先輩が気を取り直すように咳払いをした。元の話に戻る合図だろう。

「確かに、こちらの話し方にも問題があった。その点は詫びよう」それから先輩が一気に挙げ連ねた要点を箇条書きにしていると、このような感じた。

一、 六十年ごとに訪れる『神節』に世界趨勢決定会議が開催されること。

二、 それが今年なこと。

三、 その会議によって、以降六十年間の国の運命が決定すること。

四、 前回のその会議において、日本が極端に工業的な発展を望んだこと。

五、 それ故に現在、様々な問題が生じて来ていること。

更にフレイ氏が追加事項として、

「世界趨勢決定会議とは、全世界から、各国の神々が集まって行われる大集会なんだ。それぞれの国の来し方を省み、また向かうべき行く末を決める、それはもう大事な大事な場だよ。それでこのWTCは、いわゆるこの世界とは違う次元『第十三層』に存在する並行世界『神界』で行われるんだ。この会議は分野ごとに分かれていて、まず大きな括りとして産業・環境・平和の三つがある。ここから更に細かく分類されていく。環境の中の都市環境、またその中の公害問題関連、といった具合にね」

「あたしたちはこの会議に参加しなければならない。それは、この農業大学の学生に課せられた使命だ」

そうして、二人は黙った。

会室を包むのは、形容しがたい沈黙。

もちろんツツコミどころはたくさんあった。

それこそ御伽噺。

神々だの、違う次元だの、並行世界だの。もし本当に存在したなら、そもそも今の地球上に起きている問題で思い悩むこともないだろう、というような夢物語だ。

だってそうだろう？ もし神様なんてのがいるならパパッと問題を解決してくれるだろうし、もし異世界なんてものがあるなら早いトコこの問題ばかりの世界に見切りをつけてそっちに移住してしまえばいいんだから。

否を呈すべき項目は確かに多くあったのに、それを口にすることの方が間違っていると思わせてしまう空気、雰囲気。

——だったら。

今の話の明瞭化に時間を費やした方が、まだ有意義だろう？

含むところは何も無い、と言えば嘘になるが。

「質問があります」

「何だ？」

「この農大がWTCとやらの中で参加するのは、どの分野なんです？ まさかとは思いますが、全てのフィールドを網羅しないといけない、なんてことはありませんよね」

「あ、ああ。それはもちろんだ」

油断したのか、先輩は一瞬ほっ、と安堵したような顔を見せたが、すぐに無表情を取り繕ったので、俺も気付かなかったふりをしておく。

「農大の学生が参加するのは大学の名称が示す通り、産業の内の農業分野だ」

「では、それが農大の学生の使命とされているのはなぜですか？」

「日本の何箇所かに存在する第十三層へと繋がる扉が、この大学構内にもあるからだ」

「それと時間的猶予がない、って話でしたけど、それは開催期日が迫っているっていうことですか？」

「その通りだ」

「具体的な日にちは？」

「悠久の時を生きる神々の世界に、そのような細かな時間概念は存在しない。だいたいはこちらの世界の一ヶ月単位で指定される」

「……なら、時間的猶予がないってのは？」

「細かな時間概念が無いくせに猶予がないってのもおかしい話だ。」

「別に一ヶ月単位で指定されたところで、迫る期日はあるだろう？その月の晦日というものが」

別に得意げに話すことでもないでしょう。

「少なくともその日までに神界に赴いて今後の方向性だけでも伝えなければ、今後六十年間の日本は……それはもう大変なことになる」
ごくつ、と一応喉を鳴らすフリだけをしておいた。

「……どうなるんです？」

「口に出すのも憚られる」

雰囲気を作って言うが、ただ知らないだけなんじゃないかと思う。
「が、少なくとも六十年間コントが続くことになるな」

まさかとは思うが『混沌』と言いたいのだろうか。まったく、六十年間もコントが続いてたまるか。一体どれだけ笑いの絶えない六十年間になるんだ。

まあ普通に考えて混沌の方が願い下げだが。

「……じゃあ、その指定された月ってのは何月なんです？」

「四月だ」

「……………。俺の聞き間違いかもしれませんが。もう一度お願いします」

「四月だ」

「……………。何年のです?」

「だから今年と言っただろう」

「ハハ、ホントだ。全然猶予ないですね」

「だろう? ははは」

「ハハハ」

「ははは」

「ハハハハハハハ……ハアア!? 本当に全然時間無いじゃないですか!」

「それはたった今、君も自分で認めたではないか。それとも、事実確認のための反復か? だとしたらその用心深さ、あたしが惚れるに値する慎ましさだ」

「冗談は死んでから言って下さい。それよりも、だったら早くその神界とやらに行かないといけないじゃないですか」

もし本当に行けるんだとしたら、だが。

「そうしたいのは山々なのだが、そこにも一つ問題がある」

「なんです?」

「扉の場所が分からないのだ」

「……………」

どうも先輩たちの眼前に聳立している関門は、えらく初歩的な問題のようだった。

「……どうするんですか、そんなんで」

「その解決のために君がいる」

「は?」

どうしてそこで俺の名前が?

「それを探すことこそが、『導き手』たる君の責務だ」
「……は?」

同じ疑問符をもう一度繰り返す。

何だそれ。つまり今回その会議に扉が見つけれなかったなんて根本的な理由で参加できなかった場合、その責任は全て俺に掛かってくるってこと? 今後六十年間が大変になるっていうこ

との責任が？

勘弁してくれ。

別に本当にそうなると信じたわけではないが、被る可能性のある責任は極力回避しておきたい。

「ブヒ……？」

抱いたままのシユールが心配そうに俺を見上げてきていた。

心を落ち着かせるようにその温もりを撫でながら、

「ちよつと待つて下さいよ。そもそも俺は何が何だか分かつてもないのに、いきなり初手を任されても困ります」

「心配するな、ヒントはある。君はそこから扉の在処を推測するんだ」

「推測するだけなら先輩もできるのでは？」

「あたしは少しコチラが足りないからな」

そう言つて先輩は自分のこめかみ辺りをつつく。

「だから、君の出番だ」

体のいい責任逃れだ。

俺がジトツとした目を先輩に向けていると、横から肩をぽんぽんと叩かれた。

「まあ佐田君。よく分からないけれど、私たちも手伝うから」

「そ、そうです。お役に立てるか分かりませんが、ミオもお手伝いしますっ」

ちづるさんと保宜だった。

その心遣い、感涙に噎びそうだ。

温かい言葉に勇気を貰い、こちらの反応を窺っているような先輩に眇めた目を向けた。

「それで、そのヒントとは何です？」

「やる気になってくれて何よりだ。扉の在処のヒントだが、まず『

三』という数字」

「……三、ですか？」

「そうだ。『三』だ」

随分と抽象的なヒントだな。これだけでは場所を示すヒントとしての意味を成すとは思えない。

「そしてもう一つ」

となると、こちらが本命か。

「『社』というのが鍵になるらしい。またその扉自体も、大きな『社』の中に安置されているという」

「社？ 社というと、あの神社とかの建物のことですか」

「まあ……恐らく」

この期に及んで、そういう曖昧な返答は止めてほしい。

その指弾する意志が目付きにも現れていたらしい。先輩が珍しく慌てた様子で諸手をぶんぶん振っていた。

「あ、あたしも詳しくはよく分からないのだ。ただ、今言った通りのことが伝えられているだけで」

「誰から？」

「秘密だ」

「で、誰から？」

「女性の秘密を追求するものじゃない。秘密は秘密であってこそ甘い香りを放つのだ。それに、その方が君も好みだろう？」

人の嗜好を勝手に決めるな。

「ともかく！ 君には今の二つのヒントから神界への扉を探してもらう。違約の場合は厳罰に処す。分かったな？」

「俺、そもそも契約とかしてましたっけ？」

と、先輩は口の端を吊り上げた小憎たらしい笑みを浮かべた。

「なるほど、君がそう言うのは構わない。が、もし見つけられなかった場合、君は日本の全国民から嘲弄の視線を浴びながら半生を過ごすことになるぞ」

やっぱりコント！？ コントなのか！？

「冗談だ」

「この流れで今のは洒落になりません！」

「そうか。あたしにコメディアンの才は無かったようだ。済まない、

夫婦漫才の未来は途絶えてしまったな」

「夫婦漫才どころか、夫婦になる未来すらありません」

「ははは、君は本当にシャイだな」

「……………はあ」

陰気な溜息について申し訳ないが、溜息が漏れるのも仕方のないことだったと理解してもらいたい。

別に先輩との会話だけが俺を憂鬱にしていたのではない。ふと思いついた会話全てが、俺を鬱屈のどん底に叩き落していたのだ。

「……………はあ」

暗澹たる気分の原因を考え、再び不意の溜息をつき、思う。

えらい大役を任されてしまった、と。

……………別に、先輩の話を信じた訳じゃないがな。

世界趨勢決定會議やら第十三層やら、拳句の果てに神様やら神界やら、妄想の産物としか思えないワードが先輩の口から飛び出したのは、今から十八時間ほど前のこと。

ただ今の時刻、午前八時。

昨日はあの後すぐに解散となり、それから構内を歩き回る気力も無かった俺も、すぐさま家路についた。

『明日の朝、授業前に探そう』という約束を、ちづるさん、保宜の二人と交わして。

その結果として、俺はここにいる。

目に心地いい細かな木漏れ日を落とすメタセコイヤの梢の下。直径七十センチ程はあるその太い幹を囲むようにあつた丸い木製のベンチに腰掛けて、俺たちは昨日のヒントを吟味していた。

とは言いつつ、吟味するほどの深みも無いのだから。

「とりあえず『社』の話は置いておきましょう。そんなものが構内にあつたら目立つはずなのに、一向に見つかる気配もなかったし。失礼だけれど、これは斎都姫姐さんのヒントの方を疑うべきな気がするわ」

話を切り出したのはちづるさんだ。

「同感」

「同じくです」

この三人だと話が早い。

「だとすると、目下考えるべきは『三』の方、なのだけど……。…
………ねえ」

「『三』だな」

「はい。『三』です」

「『三』なのよね」

話が早いのはいいのだが、どちらにしる進展は無いに等しかった。

このまま早朝の語らいで終わらせるのも健全な大学生一年生としてはいいのかもしれないが、それでは早起きした割にあまりにも収穫が無さ過ぎる。

美少女二人との談笑、という構図で見ると、男として相応のリターンは頂いているのだろうが、女子二人に同様のメリットを返せているかというと、俺としては及び腰にならざるを得ない。

そうなれば、本来の部分で収穫を得なければならぬ訳だが、

「とりあえず……そうね。『三』から連想するものをどんどん挙げていくというのはどうかしら？ ブレインストーミングって、あれ」「お、いいんじゃないか？」

ちづるさんが提案してくれた時は即乗りだった。

「ミオも賛成です」
やはり話が早い。

「それじゃ始めましょうか。私から時計回りで行きましょう。『三角』」

「次は俺か。そうだな……あれ、なんか意外と少なくて、『三』から連想するものって。三角以外に何か……」『三々五々』？」

「そ、それはありますか？ それじゃあミオも『三拝九拝』ですっ」

「貴女らしいわね、ミオ。それにしても何よ二人とも、四字熟語なんて固い言葉並べちゃって。私は『三』から連想することって言ったの。『サイン』」

「はい先生！」

「何かしら佐田君」

「それは『三角』から連想したものであると思われます！」

「あら、文句ある？」

「ごさいません！」

「ふふ、そう。なら続けてちょうだい」

「かしこまりました！『コサイン』！」

「そ、その流れならこれを言ってもいいんですよね……？『タンジ

エント』」

「やるわねミオ。なら私はコレよ。『三角巾』」

「……早速で悪いが、意味、あるんだろうか？『三角州』」

「そうですね。ミオも不毛な感じがしてきました。『三角江』」

客観的に俺たちを表現した保宜の一言により、三人は同時に溜息をついた。

「そもそも『三』だとか『社』だとか、ヒントとして成立していないのよね。これじゃあ答えが限定されるところか、私たちを混乱させる効果しかないわ」

「全く——」

……ん？

今、ふと何かが頭の片隅に引つ掛かった。

靄に包まれたように臍で、掴もうとしてもスルリと指の隙間から逃れてしまう。

そんな、記憶。

『三』という数字と『社』という場所。この二つを繋げることができるものを、俺は何か知っている気がする。

何だ？それほど色褪せた感覚じゃない、むしろごく最近の記憶。この大学に入学してからの日々の間にあったことで間違いない。

思い出せ。予感なんて言って期待を持たせるつもりは無いが、それは俺たちが捜し求めているものにかかなりの確度を持って近い気がする。

思い出せ。

入学式の日。先輩に藁束を渡され、高木さんや高木兄、虎之助、更にはちづるさんや保宜、フレイ氏に会い、最終的に酒を飲まされた拳句、千鳥足というものを初めて経験して家に帰った。

……外れだ、この日は。

だったら昨日。入学二日目だ。この日は園芸学科の授業開始初日であり、また高木晴香の恐怖に慄いた日。

——授業。

——高木晴香。

「……そうだ」

「？　どうしたの？」

「えっと……聞こえてないみたいです、佐田君」

その高木晴香が一時間目の教室にやって来て、俺たちに何をやらせたか。

探検と称した構内散策だ。

幾つかチェックポイントを設けられ、そこを回りながら構内を見学するといった趣旨のものだったが、その時のチェックポイントの数——三。

そして、その三ヶ所それぞれで見つけたもの——祠。

「それに——」

俺は鞆からアレを取り出した。

「それ、何？」

「……御札」

「随分オカルティックなもの持ってるのね。そういう人だったかしら、あなた？」

「しかも三枚。構内に三つあった祠から貰ってきた」

「……………何ですって？」

「それって、ビンゴじゃないですかっ！　……………う、けほっ」

そう。あの病弱で大人しい保宜が興奮して大声を出してしまいうくらいに、ヒントと真ん中のアイテムを俺は所持していたのだ。

どうして今まで気付かなかったのか。

『三』と、そして『社』。

ヒントを思い返し、皆で話し合う。

手始めにこの三枚の御札から調査を始めることを、二人も了承してくれたようだった。

「ちよつと見せてもらえる？」

ちづるさんに三枚の御札を手渡すと、それから彼女は口を真一文字に引き結んで観察し始めた。そのようにじっくり見たことは俺に

もまだない。

「奉納・稲荷大明神……。やっぱり『社』とも関係ありそうね」

古びた御札の表面に鮮やかな朱で書かれた文字を、指でなぞりながら読み上げるちづるさん。その通りの文字列が、三枚とも同様に記されていた。

「でも、どれも同じに見えるわね……」

不満そうに三枚を正面に並べて見比べる。でも、そうしたところで明確な違いは見て取れなかったようだ。落胆したように溜息を落とした――その時。

保宜が「あつ」と声を上げた。

「裏にも何か書いてありますよっ」

「何ですって？」

逸る心を抑えたようにちづるさんが慎重な手つきで御札を裏返すと、横から俺と保宜もちづるさんの手元を覗き込む。

するとそこには、

「『豊受大神』……？」

「こつちには『倉稻魂神』と書かれているわ」

「これは『保食神』です」

三枚ともに別の何かの名前が三種類、明記されていた。

「何かしら、これ。最後に『神』って文字があるのだからまず間違はなく神様の名前だとは思っただけだ」

「そうですね……。でもミオ、その辺りには明るなくて……」

そんな申し訳なさそうにしないでいい。同年代でその辺りに明るい人間なんて、きつと一握りだ。ここに集まっている三人の中に一人もいないのだから、少なくとも『日本人の三人に一人』という確率ではなくなった。

なんて言い訳を試してみても、知識のない俺たちでは手詰まりなのは変わらない。

ぎーん……ごーん……。

一時間目開始の予鈴も鳴り、これ以上続けるわけにもいかなくな

った。

今のモヤツとした状態のまま終わってしまったては、消化不良で授業に集中できなくなりそうだな。

答えの出ない問いに唸っていると、唐突にちづるさんが訊いてきた。

「二人の今日の講義予定は？」

「？ 四時間目までびっちりだけど」

「ミオもです」

「そう。私は二限目が空くのよね。それからまた三、四限に授業があるの。全く、ふざけた時間割。責任者に抗議したくなるわ」

愚痴を言いたかっただけなのだろうか。

「まあそれは後にして」

違ったらしい。でも『後にして』ってフレーズが気になるぞ。

「私とその空いた時間に、今の神様の名前を調べてみるわ」

「調べるって、どうやって？」

「大学なんだから、自由にネット使えるパソコンくらいあるでしょう」

「なるほどです」

そうだ、自分たちの知識で足りないなら、インターネットという膨大な情報量を蓄えているデータベースから必要な知識を頂ければいいのだ。

全く、便利な世の中になったものだ。

「でも、二人も携帯とかで休み時間に調べてもらえると助かるわ」

こんな建設的な意見に、異論などあるはずもない。

「ああ。了解」

「分かりました」

「それじゃあ今は解散にしましょう。また放課後、LDKの会室でそうして俺たちは各々、講義のある教室へと向かっていった。

目の下に隈など作ってゲンナリしている高木さんに絡まれそうになったり、なぜか嬉しそうに弛緩した笑顔を浮かべる虎之助が何かを訊きたがって欲しそうにしているのを、どうにかこうにかかわし切り抜けると、いつの間にか四時間目までが終了した。

どういう理由か、今日聞いた講義内容が全く頭に残っていないが、きっと今は知識の潜伏期なのだ。俺ほどになれば必要な時に思い出せるのだろう。

ノートに何も文字が書かれていないのも、無意識の内に洒落を利かせた俺が炙り出しにする細工でも施したに違いない。

そんな俺の手元には『豊受大神』『倉稻魂神』『保食神』についての情報が書き込まれたルーズリーフがある。もちろん自分で調べたものだが、休み時間はしっかりきっちり休んでいたはずなのに、一体いつ調べたんだろうな。

なんて小粋なジョークで結局集中できなかった講義担当の先生への懺悔していると、LDK同好会の会室に到着した。

「うーっす」

「やっと来たわね、佐田君」

「一番最後ですよ」

「スマン。どうも無意識の内に抱いた罪悪感が俺の足を鈍らせたらしくて」

「？ 意味分らないわよ」

「何か悪いことでもしたんですか？ ミオ、ちょっと幻滅です……」
それはいけない。

「ただ、ちよつと為すべき事項の優先順位に迷っただけだよ。学生の本分とは一体何なのか、ってな」

「はあ、そういうこと。私としてはありがたいけど」

「え？ ちづるちゃん、分かったんですか？」

「『学生の本分』の辺りで分からない方が微妙だと思っわ、ミオ」

「『学生の本文』……現代文の授業で失敗でもしましたか？」

「ごめんなさいね。この子、こういう子なのよ」

「な、何ですかちづるちゃ……っこほげほ」

「あーはいはい。興奮しないのよーミオちゃん。一緒にお歌でも歌いましょうかー。そうねえ……………デスメタとか、どう？」

「う、歌わないです………というかそのチョイスは無いと思います」

「そう、残念ね」

「満足したか、漫才には？」

「し、失礼ですよ佐田君っ。ミオたちそんなつもりありません」

「ええ満足よ」

「そうか。それじゃ始めるか」

「……………」

こちらに背を向けた保宜が翳を背負ってうな垂れているが、しばらく放っておけば復活するだろう。

てな訳で早速、成果報告会を執り行うことにした。

「まず私からいきましよう。それで後から足りないこととか、気付いたことがあつたら付け足してちょうだい」

「分かった」

「……………」

僅かの間を空けて後姿の保宜も頷いた。

ここから、ちづるさんが調べてきた内容である。

「私はまず稲荷大明神から調べていったの。それで、これには私も驚いたのだけど、稲荷神っていう神様って厳密にはないらしいのよね。そこで出てきたのが、あの御札の裏に書かれていた神様の名前だったのよ。穀物の神様である倉稲魂神や食物の神様である豊受大神とか保食神を総称して『稲荷神』って、そう呼ぶらしいわ。で、そこから調べを進めていったら、気になることが結構挙がってきたのよね。倉稲魂神が祭神として祀られている伏見稲荷神社に配祀されているのが日本神話で道案内をした猿田彦って神様だったり、保食神が古事記では素戔鳴尊に、日本書紀では月読尊に殺されていたり、豊受大神が日本神話の最高神である天照大神を祀っている伊勢

神宮の外宮に祀られていたり、あとは……………そう。この農大が、その豊受大神を信奉している、ってこと」

そして、ちづるさんは満足そうに一息ついた。

「どうかしら？」

「……………文句無し」

「右に同じです」

本当に文句の付けようもない。というかむしろ、俺が調べてきた内容プラス α どころか β に γ まで加えられてる感じた。

俺が調べてなかったこと。

そう。例えば——猿田彦のところとか。

ここにきて、また『猿』というワードが出てきた。昨日高木兄のセリフ回想で聞いて以来だが、そのセリフの中ではまるで、俺がその『猿』だとも言うような口ぶりだった。

しかもその猿田彦とやらが神話の中でやったのは道案内だと？

この符合は、一体どういうことだ。これじゃあまるで——

「ご期待に沿えて良かったわ、佐田君」

——俺がその猿田彦だとも言わんばかりじゃないか。

「あと、これは余談だけど」

と、ちづるさんが付け足した。その際、どうも俺を見ていた気がする。

「猿田彦って、佐田彦神とも呼ぶらしいのよ。……………どう思う？」

「……………偶然だろう」

「それに私の苗字、稲倉っていうのよね」

「……………」

「ミオの苗字にも『保』の字が入ってるし」

「……………」

「豊受大神って天照大神に献上する神饌の料理を作ってたらしいのよ。で、それを作るための台所みたいな場所のことを『御厨』って呼ぶんですって」

「……………」

「そして私たちが揃って入学したのが、この農業大学」

「……………」。「……つまり何か？ お前は、俺たちが神様の生まれ変わりだ、とでも言いたいのか？」

そう返した時のちづるさんの反応を見たときは、手を上げようと本気で悩んだ。

心底バカにするように口をひん曲げて愚弄してきやがったのだ。

「はあ、何言ってるの？ ある訳ないじゃない、こんなに科学の発展した世の中でそんな非科学的なこと。馬鹿なの、佐田君？」

「……………」

我慢、我慢だ。それは男として絶対やってはいけないことの一つに数えられている。

そう自分に言い聞かせ、知らず知らず持ち上がりそうになる右手を左手で必死に抑えつけた。

「……………」。「……だつたら何が言いたかつたんだよ？」

「だから初めに言つたじゃない、余談だつて。ただ単に面白いって、そう思っただけよ」

「……………」。「……そうかい」

これはさつさと切り上げて、本筋に戻った方が賢明だな。

「それで、この調べた内容から扉の場所は分かったのか？」

それこそが俺たちに与えられた課題だし、これが果せなければ結局、調べてきた意味がないのだ。

しかしながら、ちづるさんから返ってきた言葉は、俺を無情に突き放すものだった。

「何を言っているの？ 最終的にそれを見つけるのはあなたの仕事じゃない」

手伝うと言っていたのはここまでで、どうしたって最後は俺なのね。

まあ確かに元々そう言われていたからいいけどもさ。それでも何だか腑に落ちないものがあるな、この扱い。

「ふふ、怒った？」

「怒ってない」

「怒ってるじゃない。でも許して。女って、好きな男を振り回したがる難儀な生き物なのよ。それでも最後の手柄は背の君に譲るっていう、この貞淑さに惚れ直して欲しいわ」

「そもそも惚れてないから安心してくれ。俺が君に抱いているのはラブの方の愛情なんかではなくピティの方の哀情だ」

「あら酷い。私、悲しいわ。こんなにお慕い申し上げているのに」

「とてもそうは見えないな。そもそも会って三日しか経ってない男を慕う女なんてのは、遙か昔からこう呼ばれるんだ。尻軽、ってな」
「まあどうしたことから。このポリューム満点のヒップが見えないの？」

「あーはいはい。分かったから尻を振るな、尻軽」

「佐田君佐田君」

と、ここで保宜が服の袖を引っ張ってきた。

「ん？ どうした、保宜？」

「その辺りにしておいた方がいいと思いますよ」

「何が……って、ちづるさんとのコント？」

「コントかどうかはともかくとして、あんまり女の子に尻軽なんて言ったらダメです。例え冗談だったとしても」

思いの外、本気のトーンだった。

「そ、そうか。分かった」

俺も素直に頷いておく。

「それと」

「まだ何かあるのか？」

「ちづるちゃん」

横目にちづるさんを見るので、俺もそれに倣った。するとそこにはニコニコと満開の笑顔のままのちづるさんが立っている。

それを横目に、ひそひそ声で保宜が言ったのは、

「今のちづるちゃん、相当怒ってますよ」

「……完全に笑顔だが。それに、あれは初め向こうから仕掛けてきたんだぞ？」

「それでも尻軽はNGです。あと、こういう時は男性が先に折れないとダメですよ」

「……釈然としないな」

「世の中はそういう風にできてるんです。いつだって長生きするのは恐妻家の男性なんですから」

「どこの統計だ。」

「しかしまあ、このまま空気をギクシャクさせておくのも忍びない。すいませんでした」

「不承不承ながら、しかしそんな態度はおくびにも出さず、慇懃に腰を折る。すると確かにどうだ。表情の陰が抜けた……気がしなくもない。」

「あら、それは何に對しての謝罪かしら？」

「これまでの俺の不適切な発言全てに對して」

「ふふ、そう。別に私は怒ってなどいないのだけど、許してあげようかしら」

これからが楽しみね、なんて呟きながら、今度は本気で陽気そうに顔を綻ばせている。いつもそうしてくれれば、こちらももっと取っ付きやすいというのに。

「それじゃあ話を戻しましょうよ。扉の場所の話だったわね」

「はい。……とは言っても、ミオには見当もつきません」

「そうね。それは私も同感よ。佐田君はどうなの？」

「正直、俺にもサッパリだ。さて、どうしたものか……」

言いつつ、鞆の中から例の御札三枚を取り出す。

それをテーブルに並べてみたりしたのだが、まあ都合良くホログラム地図などが浮かび上がるなんてSF漫画的展開があるはずも無く、御札自体は神聖なものに違いないのだろうが、どうしたって素材は紙だった。その時。

「やあ皆、元気？　元気ないなら豚肉食べる？」

「ブ、ブヒ……！」

何やら多くの荷物を抱えたフレイ氏がシニールを引き連れて会室へとやって来た。

フレイ氏が両手に抱えているのは分厚い本数冊に大判の紙を丸めたやつ一本。一步を踏み出すたびに何やらジャラジャラと音の鳴るメッセンジャーバッグも袈裟に掛けた重装備だった。

まさかのフレイ氏の豚肉発言により縮み上がったシニールが俺の足に擦り寄ってきたので抱え上げると、よっこいしょと掛け声を掛けながら荷物を抱え直しているフレイ氏に尋ねた。

「何ですか、その荷物」

「あーいや、ちよつとね。これから僕が受け持っている講義の進行予定を立てようかと思って」

そんなもの生徒がいる場でやるな。それにこっちは切羽詰ってるって言うのに。

バッグと本を椅子に置き、丸めていた大判の紙を広げようとしたのかフレイ氏がテーブルの上に目を移す。

そして程なく、三枚の御札に目を留めた。

「ん？　これは何だい？」

「先輩の『三』と『社』っていう、およそヒントとは思えないヒントから俺たちが血反吐を吐いて導き出した、新たなヒントです」

「へえ、そんなものを見つけたんだ。でも、その割に浮かない顔をしているね」

「結局、扉の場所の『場』の字すら掴めないんです」

「そうなんだ。まあ、まだ探し始めて二日目だしね。期日が迫っているとはいえ、焦ってもしようがないよ」

それも最もだが、俺としては早く気持ちを抑えられない。未だ思い悩みながら、テーブル上の御札をどかす。

するとそこに、フレイ氏が大判の紙を広げ始めた。

しかし、それはまた意外なもので。

「これは……？」

「この大学構内の地図だよ」

「どうしてそんなものを？」

「いやー、僕が担当してる講義が『環境影響学』っていうんだけど、ちよつと構内にいいサンプルになりそうな場所がないか探そうと思つて。ほら、日射が遮られてる場所とか、植栽基盤が薄い場所とかね」

「は、はあ」

あのいつも緩みきっているフレイ氏が真面目に授業のことを考えているとか、ちよつと印象が変わりそうだ。

地図に目を落としているちづるさんの様子を窺うと居たたまれないようできて、でも少し興味もあるような微妙な表情をしていた。恐らく『環境影響学』という講義名からして環境学科の授業なのだろう。ちづるさんの反応から考えて一年生の授業に違いない。

あまり見慣れない表情をするちづるさんを、この際にとじくり観察していたのだが、その時ふと何かを思いついたような、次いで呆れたような顔をした。

「ねえ佐田君」

と、俺に視線を向ける。

「ん？ 何か思いついたのか？」

「あなた、馬鹿なの？」

シュールを尻から顔面に押し付けてやろうかと本気で迷った。

「どうしてこんな当たり前のことを考えつかないのよ」

「……何だよ。やっぱり何か思いついたのか？」

「あなたはその三枚の御札を、構内に三ヶ所あつた祠から持ってきたつて言つてたわよね」

「ああ」

「だったら、そこで一番簡単で、かつ有力な『三』角が作れるじゃない」

「あ。そ、そうか……！ 祠のあつた三ヶ所を結べば、大学内でも

範囲が限定される！」

「なるほど。ちづるちゃん、頭いいですっ」

「……。そ、それほどでもないわ」

保宜に素直に賞賛されると、若干頬に朱を散らしてそっぽを向いた。どうやら褒められるのは得意ではないらしいぞ。いいこと発見。しかし、このことでちづるさんをからかうのは後にしよう。

今はともかく、ようやく目の前にチラついた餌に食いつくのみだ。シールを床に下ろすと、俺は自分の鞆から油性ペンを取り出した。

「先生。この地図、ペンで書き込みしても大丈夫ですか？」

「構わないよ」

えらくすんなり許可が出た。

先生が上機嫌にOKサインを出したなら、こちらとしても遠慮する必要はない。

「えーっと……第一チェックポイントが、構内南西にあるグラウンドのベンチだろ。……んで第二が南東部にある四号棟の屋上。……最後の第三が北にある学食のカウンターの下で……それを線で結べば……っと。出来た！」

それを三人が覗き込んできた。

「すごい、ちゃんと三角ですっ」

「……でも、少し大きすぎないかしら」

「構わないだろう。こういう時の宝の在処は図形の重心と相場が決まっている」

「なるほど、そうですね……って先輩！」

振り返ると、先輩が俺の背後にピタリとくっついて、テーブル上の地図を俺の背中から覗き込むようにしていた。

首筋に掛かった先輩の呼気からして、相当な至近距離だったはずだ。

どれだけ無防備な姿を晒していたのかを思い返すと背筋が震えだし、俺はすぐさま先輩から距離を取った。

「いつからいたんですか!？」

「君があたしとの愛を叫んだ時からだ」

「……さてと。なあちづるさんに保宜。この三角形の中でどこだと思っ？」

「無視は数多ある対応の中で最も良くないと思うのだが」

「そうね、やはり何だかんだで重心辺りじゃないかしら。相場がそう決まっているもの」

「さすがちづるちゃん。博識ですっ」

「遂に女子二人まであたしをいないものとして会話を始めたか」

「となると……この辺りか。おっ、ちょうど何も無い空間があるぞ」
「構内演習林って書いてあるわね。こうして見ると結構大規模なのに、今まであることも知らなかったわ」

「ミオもです。あっ、それにこれ見て下さい。まるで演習林を隠すみたいに、学科の棟がいつぱい建ってますよ」

「済まなかった。そろそろあたしも混ぜてくれ」

「それじゃあ早速行ってみるか。先輩も一緒にどうです？」

「あたしはこの中でも最重要メンバーだと自負していたのだが、選択権があるのか」

「行かないんですか？」

「いや、行こう」

「よし。それじゃ、出発しますか」

そうして俺たち四人に付き添い教師フレイ氏を加えた五人は、会室を後にした。

ともあれ、これで少しは先輩も懲りてくれることを願う。

地図を広げながら棟と棟の間を縫うようにして進んでいくと、いきなり鬱蒼とした茂みに行き当たった。

大学構内の、丁度中心あたり。

濃い色の常緑樹の葉や落葉樹の薄い葉、またそれらの樹に区別なく絡みつく蔓植物によってほとんどの陽光は遮られ、地表面にはポ

ツポツと小さな陽だまりが点在するだけだ。

蒸れたような空気が中から流れてくる。

普通の人なら足を踏み入れるのを躊躇うほどの樹海が、そこにはあった。

「……ここ、日本ですよ。アマゾンじゃなくって」

「……ええ。そのはずよ」

保宜とちづるさんが引き攣った顔で頷き合う。すでにして数歩後戻りしている。

しかしその横で、俺は何時ぞやと同じような圧迫感を味わっていた。
「……………」

そう。祠を見つけたとき、いや見つける前から感じていた、誰かにじーっと見つめられているような背筋の粟立つ薄気味悪さ。空気が冷え切って凍り、張り詰め、少しでも身体を動かせばあちこちから氷の割れるパリンパリンという音が聞こえてきそうな清冽さ。

それを今も感じている。

間違いない。ここにある。

「こっちだ」

「え、ちよつと佐田君!？」

「付いて行こう。きつと何かあるんだ」

真剣なフレイ氏の一言で、皆が俺の後を追って歩き出した。下草を踏みしめる音でその存在を確認しつつ、俺は進む。

この奇妙な感覚こそが『導き手』とかいう俺の証明なんだとしたら、昨日の先輩の話も信憑性が高まってくる。それほど俺にとって崇高で、かつ強烈な強制力を発揮してくる。

それにしても、心臓がさつきからうるさくて仕方ない。どうしてこつも忙しく早鐘を打ち鳴らしているのか。

「……ははっ」

自分を誤魔化すような思考に、我ながら馬鹿らしいと笑ってしまふ。

……ああ、そうさ。そんなの自分でも分かっている。分かりきつ

ている。

ワクワクしているのだ。この状況に。ただのドキドキではなく、ワクワクだ。

俺は、この林の中を進むその一歩ごとに胸を高鳴らせていた。

大学なんて一、二年は授業漬けで単位の獲得に躍起になり、それが十分に貯まってきたところで、今度は一生の生活を決める就職競争に参加せざるをえず、しかも大学生活最後に待ち受けるのは卒業論文とか言う、どれだけ枚数書けばいいのかも分からない未知の恐怖対象だ。

そんなことを入学前から気にしていた賢しい俺は、大学入学にあたり希望どころか憂鬱しか持ち合わせていなかったと言っても過言ではない。

入学したその日に強制……いや違うな、自主的に入会したLDK同好会とやらは変人の集まりで、しかもその活動目的は変な会議に参加して日本の行く末を決めることなんて妄言としか思えないものだったり、おまけに俺は猿だ猿だと言われて軽く人格否定された気分になり、最終的には『導き手』なんて仰々しいものを拝命してしまった。

それなのに今の俺はもう、入学当初の憂鬱を毛ほども感じていなかった。

もちろんまだ入学して一週間も経過していない。これから幾度も憂鬱になる要因は訪れるだろう。

でも俺はその時、この農業大学に進学したことを後悔するだろうか。

もちろん、そんなの分からない。未来のことなんて誰にも分からない。例え自分自身の気持ちであっても。

ただ、一つだけ言えるのは。

——もしこの高揚があり続けるなら、俺はそうは思わないはず。ということだ。

予感がするのだ。これはかなりの自信を持って言える予感だが、

このLDK同好会にいればワクワクするイベントが絶えず、俺は退屈することなく日々を過ごすことが出来る。

そんな予感だ。

滅茶苦茶な人ばかりだが、それもいい。いつだって期待に胸躍るのは予定調和に流されている時ではなく、滅茶苦茶だが挑み甲斐のある未知と相対した時なのだ。

その手始めの未知が、今回の扉探し。

本当にあるとも知れない異次元世界への扉を探し出すなんてどう考えても馬鹿馬鹿しく、

——それでいて、これ以上に心躍るイベントも無いだろう。

嘘か誠かなんて関係ない。先輩たちから教えられた壮大なバックボーンに自分が関わっているというその実感で、俺は十分にワクワクしている。

俺は、自分で思っている以上に子供だったようだ。

まあ正直、今では結構信じているんだけどな。

さて、この思考の間にどれだけ歩いただろうか。無意識に足が動くまま歩いてきたので自分では見当が付かない。かなり蛇行した気もするし、一直線に向かってきた気もする。

まあ今となってはどっちでもいいか。

もう目の前にはゴールが見えてるんだから。

仄暗い茂みの先、白い光のヴェールが見える。その光は茂みの中に手を伸ばし、久しぶりの来訪者を歓待しているようにも見えた。背後から聞こえてくる歓声に目を細めつつ、そのヴェールをくぐる。

瞬間、強烈な陽光に視界をさらわれ、やがて視力が戻ってくると同時に吹いた風が緩く頬を撫でるのを合図とし、目を開いた。

「わああ……」

保宜が感嘆の声を漏らすのも頷けた。

そこには、爽やかな風の渡る、開放感に溢れた眩い広場があったのだ。

シユールが元気に駆け出したこの広場は、とても大学の中にあつたとは思えない。

直径二百メートルほどの円形の空間。彩るのは青々とした芝生。澄み渡つた蒼穹。濃緑のスクリーン。

そして——豪華な社。

広場の真ん中にポツンと一つ、朱色の目立つ鳥居を伴つた社が建つており、その存在感たるや凄まじく、周囲の全てを支配下にでも置いてゐるような威圧感を包含していた。

「やったわね」

と、ちづるさんに肩を叩かれた。こちらを労わつてくれているような温かい力で。

「でも、結局最後のヒントはちづるさんに貰つただけだな」

「そんなの瑣末な問題よ。ごく当たり前のことを指摘しただけなんだから私のポジションは誰でも出来るわ。でも貴方は違う。あの林の前に立つた時は皆、分け入っていく意気すら薄かつたのに、あなただけは躊躇うことなく入つていった。きっとそれが、貴方が『導き手』だという証拠なんでしょう」

何だ、急に真面目な話をして。

そんなこと真正面から言われたら、照れるだろうが。

「あら、赤くなつた」

「なつてない。もしなつていたとしてもそれは虫刺されだ。ここまでする途中に顔全体を刺されただらうよ」

「ふふ、嘘が下手ね。それじゃまるで嘘だつて気付いて欲しいみたいよ。……そんないじらしいことされちゃつたら、私……」

ちづるさんの声はそこで途切れた。訝しんでそちらを見れば、はにかんだように笑っている彼女がいる。

彼女の頬が赤いのも、きつと虫刺されだろう。

「いい雰囲気作るのは大いに結構」

と、そこに先輩の声が掛かった。幾らか棘を含んだような声が。

「だが、今は他にすべきことがあるんじゃないのか？」

それに釣られて周囲を見てみれば、腕組みして笑んでいる先輩と、顔を真っ赤にした保宜と、困ったように苦笑するフレイ氏が立っている。

いつの間にこんな空気に。

「……そうですね。行きましょうか」

その居たたまれなさに負けて、俺は歩き出した。いつの間にか、俺の隣に行くのはちづるさんではなくフレイ氏とシユールに代わっていた。どこに行ったのかと、それとなく探してみると、先輩と笑顔で見つめ合っていた。

文字で書くとこれ以上平和的な状況も見当たらないだろうに、現実の世界でこの状況が発生すると、修羅と悪鬼の殺し合いを見ているような途轍もない恐怖があった。

その近く、涙目でガタガタ震えている保宜には申し訳ないが、心の中で合掌して早々にそちらからは目を逸らした。

社の前に到着すると、改めてその偉容に息を呑む。

特に仕切りは無いのでどこからでも入れるのだが、一応の作法として鳥居をくぐってみると、本殿と狛犬以外の建築物は見当たらない。しかしその本殿の大きさだけで、地元の小さな神社とは比べ物にならなかった。

横幅、約二十メートル。奥行き、長すぎて目測では良く分からず。鳥居をくぐる前に横から見たときはこれほど長くは見えなかったはずだが、どういうことだろうか。ともすると、常識に基づいて論じることには最早意味は無いのかもしれない。

本殿の間近に迫ってから、例の圧迫感もべらぼうに増していた。今になって初めて気付いたが『稻荷大明神』と書かれた赤い幟もたくさん立っている。あの祠と御札が示す場所で間違いなさそうだ。あとはこの社が、異世界への扉の安置されている場所かどうかだ
が……。

「さあ、佐田君」

フレイ氏が腕を伸ばし本殿の方を示す。俺に引き戸を開けろって

ことか。

階段を上り、格子状に木材の組まれた引き戸に手を掛ける。
それから力を込めて一気に――

「……ん？」

「？ どうしたんだい？」

開かない。

もう一度手に力を入れてみるが、

「……やっぱり開かない」

「どうした健康男児。まさかの力不足か？」

「いや、これはそんな問題じゃない気が…… ってうおお！」

唐突に、正面からぶつかって来るような猛烈な暴風が吹き荒れた。
とは言っても、まるで全身を巨大なマシユマロか何かで押し込まれたような優しい感触だった。

しかしその偉力は強烈で、俺は容赦なく十数メートル飛ばされると若々しい芝生を捲り上げながら更に数メートルを転がった。

それを呆気に取りながら見送っていた皆にも風は届いたようで、
踏ん張っていないと足が地面から離れてしまうくらいの風速を未だその風は保っていた。

ただし、踏ん張れるのは成人した人間の体重ならの話。

豚であるシュールはあつという間に風にその身を攫われ、大空に舞い上がった。

空飛ぶ豚。やはりシュールな光景だ。

「つておい！ そんなこと言ってる場合じゃねー！」

シュールの推定落下地点に一番近かったのは同じく吹っ飛ばされた俺で、上空から落下してくる十キロ超の物体を受け止めることに些かの躊躇も無かったといえは嘘になるが、ここでシュールを見捨てて無残に死なせるのも忍びない。

なんて照れ臭さの言い訳を考える前から、俺の身体は動いていた。
「シュール！」

野球をやっている際の、フライを追いかけるのと似ている。落ち

てくるのは野球ボールの何倍も重い重量物だな。

「……っ」

先ほど地面に接触した際に足首を挫いたらしく、思ったように走れない。

間に合うかどうか、このままではギリギリだ。

それでも走る。とにかく走る。どんなに不恰好でも、走る。

シュールはどんどん高度を下げる。俺の瞬きの間にすら驚くほど地面に近づいていた。

シュールの身体が地面に激突するまで、約五秒。

俺の身体が落下地点に到達するまで、約五秒。

となれば、放物線と直線が交差する瞬間に全てが決まる。

それにしても、どうして俺はこんなにも必死になっているんだ？
今、死の危険に瀕しているのは豚だ。あのピンクで丸々とした身体に鼻が特徴的な中型哺乳類であるところの豚だ。よく食肉用に飼育されている、あの豚だ。

それをなぜ俺は、ここまで必死こいて救おうとしているのか？

答えは簡単。

この三日の間に、愛着なんてものを覚えてしまったからだ。あの豚に。

あと三秒……二……一、ここだ！

俺は思い切り地面を蹴って落下地点に飛び込んだ。野球で言うところのダイビングキャッチを試みたのだ。

結果的に、それは功を奏した。ただ、俺の方の被害は余計に甚大なものとなったが。

高速で飛来してくる数十キロの物体つてのは、思いの外絶大な破壊力を秘めていた。この世で最も単純でかつ龐大なエネルギーのあり方は質量だということが、まさに痛いほど理解できた瞬間だった。また、それを胸で受け止めたために再び数メートルほど地面との摩擦を経験することになり、服や身体の惨状が手に取るように想像できてしまい、あまり自分の身体を見下ろしたくなかった。

ともあれ、

「大丈夫か、シュール？」

「……ブ、ブヒィ……ッ！」

よほど怖かったのか一瞬硬直した後、すぐに鼻や目から体液を溢れさせながら俺の胸に顔面を擦りつけてきた。こんな場面で文句を言うなんて無粋なことはいないが、それでもこの服はもうゴミ箱行き決定だな。

「佐田君、大丈夫ですか！？ ……っはあああ、げほッ、ごほごほッ、うえ」

なあ保宜。心配して駆け寄ってきてくれるのは嬉しいのだが、こっちとしてはお前の方が心配だ。

「俺は大丈夫だから、とりあえず落ち着け」

「は、はい……。すうー、はあー、すうー、はあー」

「ごめんなさいね。この子、こういう子なのよ」

保宜の深呼吸の間に追いついてきたちづるさんが、お決まりの台詞を言う。

「いや……こういう子もいいもんだ」

「あら、そうなの。……ふーん。結局、男子って病弱な女子が好きなのね」

「病弱なだけじゃ足りないな。そこに健気という要素が追加されないと」

「もしかして私、喧嘩売られてるのかしら」

「そう思いつてところからして自覚有り、ってことだぞ」

などと言いついてるうちに、他のメンバーも寄って来た。先輩に手を貸してもらい立ち上がる。

「怪我は、………無いな」

あります。目を逸らさないで下さい。

「とりあえず皆無事で良かった。では戻ろう」

この俺の姿を見て、いとも簡単に無事と言いつけた貴女には呆れとともに感服するが、まあこの際どうでもいい。ともかく今の俺は

早く今日の活動を終わらせて着替えたい。

しかし、そもその問題は本殿の扉が開かなかったということだ。異世界への扉は恐らくあの中で間違いないのに。

本殿に戻ってみると、やはり扉は閉じたままだった。

「さっきの風は、俺が開けようとしたから起きたって可能性もありますよね。なら、別の人が開ければ大丈夫かも……」

しーん……。

誰も挑戦する気は皆無だった。皆がバツの悪そうに目を逸らし、さながらお通夜みたいな沈鬱な空気が場を支配する。

これでは、どうにもならない。

どうしたものかと一人思索していたところ、フレイ氏の「おい」という声が耳に届いた。

「ちよつとこつちに来てくれないかい」

フレイ氏は、本殿のすぐ右、そこにあつた掲示板のようなものを眺めていた。

…… あんなものの、さっき有ったけか？

そちらに寄って行くと、掲示板には一枚の和紙が張られていた。

黄色い染みのようなものが付いている、いかにも年季の入った和紙だ。

そこに書かれた文字は異様に達筆で、如何せん達筆すぎて俺には読めないほど。

しかしそこに、流麗に読み上げる声が響いた。

「『天降りまさむとする時に……』」

先輩だった。

「読めるんですか？」

「古事記の一節だ。曰く、天鈿女尊が猿田彦を宥めて道案内させたという」

「『天鈿女尊』？」

ここに来て、また新しい神様の名前か。しかも猿田彦と関係があるって、また俺に災難が降り掛かりそうな予感がする。

「日本神話における芸能の女神だ。ほら、君たちもよく聞くだらう。天照大神が素戔鳴尊の暴状に怒って天の岩屋戸に籠ってしまい、大地が暗くなってしまった話」

「よく、ではないですが、まあ聞いたことがあります」

「神々は天照大神を外におびき出すために岩屋戸の前で宴会を開いたのだが、その際に舞を舞ったのが天鈿女尊だ」

「はあ、そうなんですか」

「ちなみに、天鈿女尊は猿田彦の奥さんでもあるぞ」

「……………つまり、どういうことですか」

「おそらく、ここでこの紙が出てきた意味は……………」

「……………意味は？」

「推察するに『天鈿女尊に宥められてからでない』と例え猿田彦でもこの扉は開けないぞ、ぶんぶんっ。だって神話ではそうなってるんだもん、ぶんぶんっ。天鈿女尊とイチヤイチャしてから出直して来い、ぶんぶんっ』といったところだろう」

「いちいち挟まれる怒った時の効果音は、若干古いぞ。」

「って、突っ込むところが違う！」

「何すか、その『天鈿女尊とイチヤイチャ』って！」

「言葉の通りだ。まあ言われてみれば確かにそうだな。猿田彦が天孫降臨に際して道案内をしたのは天鈿女尊に乞われたからだ。それを省いて猿田彦に道案内させるとするのは、古事記の編纂者にとっても承服しがたいことなのだろう」

「遙か昔に往生なさっている編纂者のご機嫌など伺わないといけないのか、このミッションでは。」

「てか、天孫降臨ってなんです？ 俺、始めて聞くんですけど」
「ちづるさんと保宜も同じく頷いている。」

「それを特に咎めるでもなく見やった先輩は、説明をしてくれる。」

「天孫降臨とは、瓊瓊杵尊が大和を平定するために高天原から降りてきたことを言う。この時、瓊瓊杵尊を道案内したのが猿田彦だ」

「……………あの、先輩」

「何だ？」

「この話に、その瓊瓊杵尊とやらは関わってましたっけ？　そもそも聞いたことないんですけど……………」

「それは当然だ。全く絡んでないからな」

いいのか、それは。猿田彦が案内したのはその瓊瓊杵尊なのに。

「別に瓊瓊杵尊は重要ではないのだ。ただ猿田彦が道案内の役を担うためのきっかけがここでは必要なだけだな。今の天孫降臨の話も君に問われたから答えただけで、特に関係はない」

言うや、先輩は踵を返した。そのまま鳥居をくぐり、ずんずんと歩いていってしまう。

「ちょ、先輩！　どこ行くんです！？」

「帰る」

鳥居をくぐってすぐのところまで立ち止まり、ポニーテールを揺らしながら顔だけをこちらに向けてくる。

「今の状態でここにいても、埒が明かない」

俺はさっさと服を着替えたので、帰るという判断には全力で賛同しますが、なんだか少し引つ掛かるものがあるような。

「ただ、君は覚悟をしておいた方がいい」

「……………はい？」

「明日から、君の嫁探しが始まるのだからな」

息子の婚活を一手に引き受ける母親みたいなニヤツとした笑みを一瞬だけこちらに見せ付けると、再び前を向いて歩き出す。その背中では颯爽として、まるで決闘の勝者がうな垂れる敗者に背を向ける場面を想起させた。

そんな人は、ここでカッコいい決め台詞を吐くのだ。少しだけこちらを振り返り、健康的な白い歯をキラリと光らせながら。

「精力をつけておけ」

……………それは決め台詞になり得ません。

着替えたいと言ってはみても着替えの持ち合わせなどあるはずもなく、結局昨日はそのまま帰宅する羽目になったのだが、電車の中で他の乗客から浴びせられる白い目が痛かった。よほど獣臭かったのだろう。あれだけ体液擦り付けられたからな、マーキングかって具合に。

ともあれ無事に帰宅し、即行で風呂と飯を済ませて床に就いたのが夜の九時。それで起きたのが朝七時というのだから我ながらガッツリ寝たもんだ。

それというのも昨日は相当、心身ともに疲労が蓄積した日だった。おまけに全身至るところに打撲傷や擦過傷を作ってきて、身体も治癒のための睡眠を欲していたに違いない。

そうして今の俺は、いつかのように学校の机に突っ伏している。

「だ、大丈夫？　一昨日以上に酷そうだけど。やっぱりあの人たちに何かされたの？」

「……いや、そうじゃない、んだが……」

傷の痛みは落ち着いてきたものの、十分以上の睡眠を経た現在でも全身を襲う倦怠感は拭えぬものがあつた。いや、むしろこの倦怠感是一日たったからこそ訪れるものか。

なんて言っておきながら、そんなものは割かしどうでもいい。

この倦怠感は身体的に原因を持つものではなく、むしろ精神の方に由来したものだ。

今朝もLDKの会室に寄つた際、先輩に言いつけられた。

曰く、『とにかく片端から女子と目を合わせるんだ。そうすればきっと、己が使命を悟つた娘ならすぐ名乗りを上げるはずだ』と。

ただすれ違っただけの見ず知らずの男と目を合わそうとする女子なんて、今どきそんなないつつうの。

そうなると、知人女性から攻めていくしかないのだが、

「なあ高木さん」

「？　なあに？」

無言でその目を見つめる。

「……………」

「…………ど、どうしたの、そんなに真剣な目で。やっぱり何かあったの？　悩み事なら聞くよ？」

「……………はあ」

やはり違うらしい。

「なあ高木さん」

「う、うん。なに？」

「高木さんって、神社とか詳しいのか？」

つい先日 of 構内散策の際、俺が見つけた祠を覗くと何かに思い至ったような表情を浮かべていた。俺と猿の關係に言及した第一人者であり、俺に『あまり神社に行かないのか』と尋ねたのも彼女だ。

ここまでの行動や言動を鑑みた結果として間違いないと言えるのが、俺よりも神社や神話周りの知識を持っている、ということだ。

「う、うん。同世代の中では知ってる方だと思うよ」

やはり答えはイエス。

なので俺は直接的に聞いてみることにした。

「天鈿女尊って、どんな神様？」

すると、

「……………！」

ダンッ、とテーブルに掌を叩きつけながら立ち上がった。

しんと静まり返る教室。衆目の集まるその中心にいるのが高木さんと、その隣に座っている俺だ。

さすがに自身が注目的になっていることに羞恥を感じたらしい高木さんは、すぐに席に座り直したが、その異様な反応からして次の台詞が怖い。

「ねえ佐田君」

「……………何でございましょう」

「どうしてそんなこと聞くの？」

「ど、どうしてでしょう」

「まさかとは思うけど……どこかに道案内してる途中で何者かに阻まれてその解決策として猿田彦が瓊瓊杵尊を案内するきっかけともなる天鈿女尊っぽい人を探し出してイチヤイチャする……なんて目的じゃないよね？」

まるで見てきたような的確さだな。

「な、何よその目は。私は別に、覗き見とかしてないからね！ 馬鹿兄がどうしてもって言うから付いてってあげただけなんだから！」

「今、白状したことに自分で気付いてるか？」

「え？ ……はっ！」

この人は、若干抜けたところがあるらしい。

「……ゴメンなさい。今朝こつそりLDK同好会の扉の前で、中の様子を覗いてました」

「別にいいさ。高木さんは先輩のことも知ってたし、多分こつちの事情も大体把握してるんだろ？」

「……うん、まあ」

「だったらそれはそれでいい。むしろ話が早くて助かる。何の関わりもない人にこんな話をしたら、嫌悪の目もしくは憐憫の目を向けられるのが目に見えてるからな」

俯き、多少落ち込み加減な高木さんを宥めつつ話を戻す。

「それで、天鈿女尊ってどんな神様なんだ？」

「………そうだね、強いて言うなら………私、とか？」

「………は？」

俯きがちのまま、さらにそっぽを向く高木さん。

その耳が赤くなっているのは、こちらからでも丸見えなのだが。

「ほ、ほら。天鈿女尊って芸能の神様だから、綺麗な女神様だったんだろうし。私って、その……言ったら何だけど、繁華街の方で買い物してたら……スカウト、とか……されちゃうこともあるし」

「そ、そうなのか」

女子を敵に回しそうだな。

「そ、そうなの。だからね、その……猿田彦の相手はきつとわた」
「それは違うんじゃないかな」

と、ここで話に入ってきたのは、毎度毎度気付かないうちに背後の席に座っている加藤清俣こと虎之助だった。今日の天パはまた一段と軽快に渦を巻いている。

「どういうことだ？」

「天鈿女尊って天照大神が天岩戸に閉じこもった時に、胸をはだけて桶の上で踊ったような、良く言えば開放的な性格の、悪く言えばストリップパーな女神だよ？　とてもじゃないけど、高木さんとはイメージ重ならないと思うな」

「……………」

高木さんの無言の圧力が虎之助に押し寄せる。明らかな殺意の籠った視線付きだ。

「ひい！」

虎之助は途端に全身を震わせ、何処へと走り去っていった。もうすぐ授業開始だというのに大丈夫なのか。てか、この後の高木さんの応対を俺に押し付けやがって。自分の蒔いた種は自分で摘み取れってんだ。

「……はは。おかしなこと言うね、加藤君」

「違うのか？」

「……さ、さあ。どうだったかなー……」

この人は嘘をつくのが苦手らしい。

「という訳で、高木さんの友達で天鈿女尊っぽい人いない？」

「……！　知らないわよ！」

「お、おい？」

「知らない！」

と、高木さんは腕組みして顔を真っ赤にしながら顔を背けてしまった。ぶん、という効果音がこれほどマッチする背け方を、俺は見ることがない。

しかしだ、そんなことに感嘆している場合ではない。つまり俺は、最も頼れる味方を失ってしまったことになる。こんな話が出る相手自体が少ないっていうのに、その中の最有力のご機嫌を損ねてしまった。

さて、どうしたものか。これからの方針が全くもって見えてこない。

これは難儀しそうだな。

遂に一言も口を聞いてもらえず、かといって隣の席を離れるわけでもなく、俺としてはその日一日の講義の内容が全く耳に入らなかった。

講義の時間中、絶えず隣から不機嫌オーラが漂ってくるのだ。その様子を窺い、肩をすぼめながら、己の立ち位置が貴女様よりも下層であるということを全身で表現しなければならなかったのだから、それは講義どころではない。

その日の全ての講義が終了して、ようやくこの肩身の狭い思いから開放されると喜んだのも束の間、どうしてか会室に向かう俺のすぐ後ろを高木さんがカルガモの雛のようにくっついてきた。

とはいえ、付いてくるなどはとても言い出せず、その据わった目に追いたてられるまま俺は会室へと赴き、扉を開けた。

「こ、こんちわー……」

「いらつしやい。遅かったわね佐田君。遅すぎて私、あなたを想って待つ侘しさを短歌にしたためそうだったわ……って、あら？」

静かに燃える炭火に余計な油を注ぐようなコントのフリをしたところでようやく、俺の背後に立っている備長炭の精霊であるところの高木さんに気付いた。

「あなたは昨日の癪癩持ち。思いの丈を叫びたいなら屋上の方がベストスポットよ」

「残念だけど、そんな挑発には乗らないわよ、環境学科一年稻倉ち

づる」

ちづるさんの視線が俺に向かうが、どうしてちづるさんの名前を高木さんが知っているのか、なんてこと俺にも分からない。

まさか、生徒の個人情報でも学長である姉にリークさせたのだからか。

「ふう、まあ別に構わないわ。貴女に名前を知られたところで痛くも痒くもくすぐったくもないもの。その性根の悪さに少し寒気はするけれどね」

「あらあ素敵な自己評価ね。自分の性根が悪いつてことを自覚なさっているなんて、なんて聡明なお嬢さんなのかしら」

「そういうあなたはシナプスの数がちょっと少ないのかしら。この年から脳細胞の減少を実感するなんてお気の毒にね」

「あはは」

「うふふ」

どうしてだろう、体の震えが止まらない。

その時、ドアが開いて「ひっ！」と慄く保宜の声が聞こえたが、その気持ちは良く分かる。この二人の笑顔での罵言の応酬は精神衛生上、非常に良くない。

しかも俺を間に置いてそのビーンボールキャッチボールが行われている状況だ。いつ俺に飛び火してもおかしくなかった。

「さあ、あなたの若年性アルツハイマー病の告白も終了したことだし、早く愛しいお兄さんの元に帰って失恋の悲哀を慰めてあげるべきでは？」

「残念だけど、兄に対して愛しさなんて感情を一ピコグラムも持ち合わせていないし、昨日のうちに私とお姉ちゃんて追い討ち掛けておいたから、あと一週間くらいは部屋から出てこないんじゃないかしら」

不覚にも高木兄に同情してしまった。苦勞してるんだな、アンタも。

「ふう、このままじゃ時間の無駄を大きくするだけね。しょうがな

いからストレートに聞いてあげるわ。あなたがここに来た理由は何？」

待つてましたとばかりに口端を吊り上げる高木さん。

「今日これから天鈿女尊探しをするんでしょう？ 私も手伝ってあげようかなって思って」

「必要ないわ」

「残念でした。アンタはそうでも、これは佐田君たつてのお願いなのよ。彼と私のよしみだし、断るわけにもいかなかな、って」

「え、俺そんなこと言っもが」

口を塞がれ、最後まで言わせてもらえなかった。

「あんな一生懸命に『俺が頼れるのは君しかいないんだ！』って頭下げられちゃったら、将来的に殿方を支える立場になる女として、とても断れないじゃない」

少し、いやかなり言質が歪められている気がするぞ。

「……随分と軽いよしみね」

「……それはアンタも同じでしょう」

二種類の笑顔が真正面からぶつかり合い、その視線は火花どころかプラズマくらい生み出しそうだ。

「……ならいいわよ別に」

先に折れたのはちづるさんの方だった。

素っ気なく言っ顔を背ける。その間際、限界まで研ぎ澄まされた視線が俺へと突き刺さり、そしてその目こそが雄弁に語っていた。

このたらし——と。

なるほど、尻軽の意趣返しか。あの尻軽事件がまだ尾を引いているらしい。

……これからは、女性に対する言葉使いにはもっと注意しよう。そこかしばらくは耳に痛い嫌な沈黙が続いた。ちづるさんはテーブルを凝視して固まっているし、高木さんは勝ち誇った顔をしているし、保宜なんかは壁に張り付くようにしながら涙を堪えている。とてもじゃないが、男の居るべき環境としては最悪の部類だった。

まあ、この状況を引き起こしたのは元はといえば俺なのだし、自業自得と言ってしまうえばそれまでなのだが。

次に扉が開かれるまでの体感時間一時間。実際には十分程度だったのだろうが、俺の健気な心臓は悪寒に震える身体に少しでも多く血液を届けようとバクバク鳴っていた。

この時の扉の開閉音は、ゴスペルなんて遠く及ばない、俺にとって何よりの福音に違いなかった。

「おはよう。皆い……何故、高木の末っ子までここにいる？」

後ろ手に扉を閉めようとしていた先輩が、半眼で高木さんを見る。それに続くようにしてちづるさんも胡乱な目で俺を見た。

「佐田君が助力を乞うたんですって。『僕チンどうしても貴女様と一緒に行動したいよう。貴女様の下僕になってもいいですからあ』とか何とか」

「言ってますん」

そんな台詞を吐くのは一体どんなキャラだ。俺的には亀甲縛りされた男の絵が浮かんだが、その男は断じて俺ではない。

顎に手を当て何やら思案顔だった先輩は、ハッと気付いたような顔をした。

「まさか、高木の末っ子が天鈿女尊だとも言うのか？」

「……」

それにちづるさんと高木さんが同時に顔を跳ね上げ、

「そ、そうなのよ御厨斎都姫！ アンタも意外と話が分かるじゃないっ」

片や晴れやかな笑顔でぶんぶん頷き、

「それはないです斎都姫姐さん。この女は家庭に入れるだけの知能を持ってません」

片や不機嫌顔からの悪態で断固否定。つつか話が飛び過ぎだろう。

「何ですって、この年増女。アンタなんて家庭に入る頃には皺枯れババアでしょうが」

「『殿方を支える』とか普通に言ってたあなたは、既に貞操観念が

ミイラ化してるわよ」

再び勃発する視線の制圧戦。エレクトロン焼夷弾やらクラスター爆弾やら、この二人の視線を例えるものには事欠かないが、それは主に戦場で飛び交う爆弾の名称だ。たまには曳光弾くらいの優しいものを混ぜたらどうなんだ。」

結局、どれにしたって生身の人間が食らったら死にそうだけだな。「まあまあ、とりあえず落ち着け二人とも。興奮は老いた身体に毒だぞ」

アンタも火に油を注ぐな。

ほれ、あの射殺さんばかりに先輩を見る二人の目を見てみる。今までお互いしか攻撃対象としていなかったのが、とうとう先輩まで敵として認識したぞ。

「け、喧嘩は止めて下さいっ……！」

「うっさい栄養学科一年保宜ミオ」

保宜の仲裁を高木さんは一蹴した。またどうしてか知っている保宜の個人情報付きで。

「なっ！ ど、どうしてミオの名前を……？ ま、まさか！ ミオの個人情報調べ上げて実家の住所を洗い出しそこに押し入ってミオの家族にまで手を出して最終的にミオの精神崩壊を見届けたところでミオ自身も血祭りに上げるつもりですか……！！？ こ、これはまさかミオ、貞操のピンチですか！？ ひ、ひきゃ——

——！！」

「私は一体アンタの中でどんなキャラ設定よ！」

「た、助けて下さい佐田君！ ミオ、あの人に殺されます！」

「ミオだったら、相変わらず妄想逞しいわね」

「それにしてもこの怖がりようは尋常じゃないな。何か高木さんに似た人にトラウマでも植え付けられたのか？」

「ああ、およそそんなところだろう」

ん？ 知ったふうな口振りだな。

「何か知ってるんですか、先輩？」

「聞いて驚くな。保宜が高木の末っ子を恐れるのは、前世からの因縁によるのだ」

驚けという方が難しい、そんな馬鹿げた話。

それ以上に馬鹿げた話の渦中にいる俺たちが言えたものでもないかも知れないが。

「彼女は前世で、それはもう過酷な人生を送ったのだ。神様に飯を作ってくれと言われたのに、ちょっと材料を取り出したのが微妙なところだったもので、その神様に切り殺されてしまう、と。そんなところだ」

「正直、話がさっぱり見えません」

「肛門から出した食材を食べさせられてなお寛大でいられる神様なんていない、というささやかな教訓が現代まで語り継がれている」
「……………」

いきなりの肛門発言に場は凍りつく。皆が顔を引き攣らせ、言葉が見つからず酸素欠乏の水槽の中で口をパクパクさせる金魚のようになっていた。

今の話を聞いたところだと、さすがにそれは保宜の前世が悪いのでは。神様だって、そりゃキレるさ。

「……………ふ、ふええ」

自分の前世を知り、そのあまりの悲惨さに嗚咽を漏らし始める保宜。泣きたい気持ちは痛いほど伝わってくるが、こちらとしても慰め方が分からない。

「——なんて話があつたら面白いな」

と先輩が言った時は、保宜の目が本気の殺意に染まった。

「さて、閑話休題。何はともあれ、天鈿女尊をこれから探し出すという話だったが、時間的にも制限がある中では無理がある、とあたしは判ぜざるを得なかった。あまり歩き回るのも面倒だしな」

最後のが本音だろう。

「という訳で、手近で済ませる許可を貰ってきた」

「ちょい待ち」

俺は反射的に掌を先輩に向けストップのジェスチャー。

「許可、って何です？」

「許可は許可だろう。二十世紀初頭まで行われていた中国の役員登用試験じゃないぞ」

「科挙くらい知ってます。相当な倍率だったらしいですね」

「かつきょう」

「カツコウみたいに言わないで下さい。確かにカツコウも他の鳥の巢に卵産み付けて、そこにあった本来の卵を蹴落とすという意味では科挙と被る部分も無きにしも非ずですが」

「ほう、なかなか付いて来れるではないか、君も。托卵の話題にここまで乗ってこれたのは君が初めてだ。話をしたの自体が初めてだが」

「そいつは光栄ですけど、そんなことより今は許可の話です」

この人との会話は注意していないとどんどん違う方向に持っていられる。

「許可って何の許可です？」

「だから天鈿女尊探しを手近で済ませる許可」

「じゃあ、その許可を出したのは誰ですか？」

天鈿女尊探しは俺たちにとって最重要イベントと言ってもいい。何せこれが成功しなければ、世界趨勢決定会議、通称WTCとかいうのに参加できずに俺たちはゲームオーバーなのだからな。

そんな許可を出せる人間は、俺たちの事情を全て知っていてかつこのイベントを影で牛耳っている未だ姿を見せない超大物か、もしくはよほどの気違いだ。

「それは秘密だ」

「誰ですか？」

「女子の秘密を暴こうとするものじゃない。どうしても聞きたいなら先に自分から秘密を開陳するのが筋だろう」

「……特にあるませんよ。秘密なんて」

「何を言っている。男児たるもの、誰もが持っているだろう」

そう言われても、思い当たる節がない。

思索に没頭しても、秘密なんて中途半端なレベルのものしか出てこない。エロ本の冊数とか、エロビデオの本数とか。

……なんだか、人格を疑われそうだな。

俺が答えられずに唸っていると、先輩は解答を披露してくれた。それはもう最低の解答を。

申し開きをしておくなら、俺は先のエロ本エロビデオ話を口には出していない。

ところがこの先輩は、

「秘密を開『チン』するのが『筋』……………くくくつ」

保宜以上に貞操のピンチなのは俺かも知れなかった。

先ほどの肛門発言といい、この先輩は意外と男子のするような下ネタに耐性をお持ちらしい。そういった女性は男からは重宝されるというが、果たしてそれは真実か。

男であるところの俺としては、この人から感じるのが恐怖以外の何ものでもなくなってきたている気がする。

「まあ君にそれが出来るとも思っていない」

「出来たら逆に顰蹙以上の反感を買います」

「全く、君はいつまでもおぼこだな」

「それを男に使うのは間違ってますし、本来的に俺は色恋が得意ではありません」

「色恋が得意な人間のことを軽薄と表現する。しかし不得意な人間も臆病と言われる。君はどちらがいい？」

「臆病の方がいいです」

「残念。正解はどちらでもない」

質問の形式からして俺の解答が正解なはずだが。

「色恋に得手不得手などなくていい。ただ普通であればいいのだ。ところが君は不得手の方に傾きすぎているようだね。もう少し開けっ広げにしていって方がいいと思うぞ。ねいきつど、だ。ねいきつど」

「余計なお世話です」

やはり臆病のままでいい。

「という訳で！」

もう少し脈絡というものを考えてほしいが、今さらそんなことをこの人に諫言したところで手遅れな感は否めないので、とりあえず無言のまま次の言葉を待つ。

「これから『ドキッ！ 天鈿女尊は誰だ！？ LDK内選考会！』を開催したいと思う！！」

そして出てきたのは相変わらずのネーミングセンスが光る、またしても面倒くさそうなイベントの開会宣言だった。

「一番、御厨斎都姫。祝詞を奏上する。では——『掛けまくも畏き伊弉諾大神、筑紫の日向の橘の小戸の阿波岐原に御楔被え給いし時に——』」

英語と同様に古文にも耐性のない俺としては、延々と続く先輩の祝詞とかいう聞き慣れない文言を馬耳東風と聞き流しながら、今一度大きな溜息をついた。

目の前には先輩、高木さん、ちづるさん、保宜の四人が、一人を除き乗り気でない顔をしながら並んでいる。その除いた一人というのは、当然ながら今も恍惚としたトランス状態で祝詞なる呪文を唱えている先輩だ。

そして俺の並びには、穏やかスマイルのフレイ氏、腕組み仏頂面の高木兄、突然ここに連れてこられたことに動転している虎之助が、それぞれ椅子に腰掛け、審査員然として座っていた。

いや、実際に審査をしるとのお達しだった。

「……はあ」

これじゃ、争いの火種を大きくするだけののような気がしなくもない。

あの後どうしたかというと、高木さんも含めたメンバーで栄養学

科が主に使っている調理実習室まで移動してきた。そこにフレイ氏が合流し、しかも何故か高木兄と虎之助を引き連れてきたせいでの大所帯が形成された。続いて、この選考会の概要説明。一番目に特技披露、そして二番目に料理審査があり、その総合評価で最優秀だった者を天鈿女尊に認定すると説明があつて、現在に至る。

今はその第一審査、特技披露が始まったところだ。

「ブヒブヒ」

いつものように寄つて来たシユールを膝に乗せながら、俺は欠伸を噛み殺した。

ぶつちやけ、審査員として評価していいなら、先輩はこの第一審査、落第だった。はっきり言つて退屈で仕方ない。内容が分かればまだマシだったかもしれないが、先にも述べたとおり、古文は英語と並んで俺の中の睡魔を活性化させる効果を持つ。

「『――聞食せと恐み恐み白す』。ふう、終わりだ。御静聴感謝する」

「お疲れ様です。それでは次、二番目の方」

いつしかフレイ氏が式次第を握った進行役となっていた。

「うう……はいっ！」

やけっぱちになつたような高木さんの返事が室内に響き、彼女は一步を前に出た。

「そんなに頑張らなくてもいい、我が妹朔耶。あのような猿に捧げられる人柱になど朔耶がなる必要はないぞ」

「高木風馬審査員。候補者への私的な発言は審査員心得第二項にて禁止とされています。以後慎むように」

「う、うむ……」

いやに真面目腐ったフレイ氏の注意に、高木兄も首を縦に振る。

それは傍から見てみると、何かしらの強制力が働いているようにも見える強引な了承だった。

「さ、どうぞ。二番目の方」

完全に審査員になりきつてるな、この人。本当に役者に向いてる

んじやなろうか。

「二番、高木朔耶！ モノマネやります！」

思い切ったな。こんな即席の状況じゃ滑るの必至だぞ。

「野沢さんドラえもんのマネ行きます！」 『僕ドラえもんです。ほんやくこんにやくー』。あ、ありがとうございます——！！」

怒涛の如くモノマネやり逃げしていったが、それにしても随分と微妙な秘密道具をチョイスしたな。……しかも意外な高クオリティ。以前のリンキー酒井ピン芸人発言から考えても、この人はなかなかにお笑いに造詣が深いと思われるな。浮世離れた美貌のくせに、意外と庶民派。

「は、早く次の人へ。どうぞっ」

「あ。そ、そうですね。ありがとうございます。えー、それでは次の……方？」

フレイ氏が言葉を詰まらせた。どうしたのかと、その視線の先にいる次の演者であるはずのちづるさんを見ると、俺も同じように瞠目した。

基本設定として腹の中が真っ黒なあのちづるさんが、恥ずかしげにモジモジしながら頬を染めて、更には上目遣いでこちらを見つめていたのだ。

「は、はいっ。畏まりましたご主人様！ 三番にエントリーさせていただきます、稲倉ちづると申しますっ。な、何なりとお申し付け下さ——きやあっ！ ……いてて。転んじやいましたあ」

姿勢よく腰を折って礼をし……ようとしたところで何かに躓いたように前方にすっ転んだ。立ち止まった状態から何かに躓くというおよそ現実にはありえない要因で転んだ彼女の演目はズバリ——

「ドジっ子メイド……！」

戦慄か歓喜か驚嘆か。何にせよ、ただ現実を生きているだけでは巡り会うことの決して出来ない感情が込められた眩きを、虎之助が零した。

「うう……ぐすっ。ちづる、ちづる、いつも失敗ばかりで……ひっ

ぐ……いつも、ご主人様に迷惑掛けて……すん……本当に、ゴメンなさい。ご主人様あ、どうかちづるを見捨てないでえ……！ふええええん！」

「オウ、イエイス！ グッジョブ！ ナイスワーク！ 大丈夫、大丈夫だからね、見捨てないよ。ご主人様は見捨てないからね」

「ホ……ぐす……ホント……ですか？」

「ホントホントホントダヨ——ホッホー！ ユタハイナカジャナイヨー！」

「おい、フレイ審査委員長。あれはいいのか？」

遂には審査委員長になったのか。

「今のは演者の方から話しかけましたので、構いません。これも三番さんのアピールの一部なのでしょう」

「……う、うむ。そうか……」

というフレイ氏と高木兄の会話も耳に入らないほどに、虎之助が壊れていた。元から少し情緒不安定な感はあるが、ここに来て一気にその精神の均衡が崩れたらしい。

それほどの衝撃が、あのメイドさんには込められていたということか。

しかし俺的には、

「あ、ありがとうございますっご主人様！ これからもちづる、一生懸命ご主人様のために頑張ります——あいたつ。……また転んじゃいましたあ」

ちよつと外見とのギャップがなあ。

「何か言ったかしら？」

「うわ急に戻った！」

「今ちよつと癪に障るコメントが聞こえた気がしたのだけど」

「う、嘘だ！ 声には出してなかったはず………はっ！」

「あら、そうなの。じゃあ何て思ったのかしら？ 正直に言ってくれたら多少の容赦をして右の手の甲を十回抓るところを左手の甲に変えてあげてもいいわよ」

「容赦の意味が分からない！」

「あら佐田君、貴方って左利きだったかしら？」

「骨折されるとかならともかく、手の甲を抓られるだけなら利き腕も何も関係ないだろ！左右チェンジするんじゃないくて回数減らせよ！」

「それじゃあ私の鬱憤が晴れないじゃない」

「だから容赦はどこにいった！？」

俺が地味に痛いお仕置きの恐怖に震えていると、その横では置いてけぼり感のある高木兄とフレイ氏が、少しだけ寂しそうに会話していた。

「……あれも、いいのか？」

「演者の方からのアプローチなので……誠に遺憾ながら、問題ありません」

「オウマイスイートメイドウツ！ 一体君はどこにいったんだい！？ 許してあげるから出ておいでえ！！」

滂沱と涙を流す虎之助は相変わらず壊れて迷走していた。本人によつて微塵に碎かれたドジっ子メイドの幻想を追つて。

「佐田君とは後でゆっくり楽しむとして、私の特技メイドサービス終了よ。お粗末さま」

俺としては、ごちそうさま、なんてとても言えないエンディングだった。

「……はい、ありがとうございました。それでは次の方、どうぞ」司会進行の声にも力が無かったが、こちらの原因は俺とは違ふものだろう。

審査員が四者四様の陰鬱でもって揃つて肩を落としていた、その時だ。

ヒュウウ、と。緩やかな涼風が吹き抜けた——気がした。

というのも、

「よ、四番保宜ミオ……日舞、踊ります」

保宜が、見たことのないような澄ました表情で構えていた。その

玲瓏な佇まいから、涼風に頬を撫でられるような錯覚を覚えたのだ。おどおどしてはいるものの、しかし超然とした雰囲気審査員の四人だけでなく、これまで特技を披露した三人でさえ圧倒されたように吞まれていた。

その姿は、いつも自信無さげにオロオロしていた保宜からは、とても想像がつかないほど自信に溢れたものだった。

そして、踊り始める。

何かを優しく掴んだ手がたおやかに流れていく。小さく、それでも淑やかな動きは周囲の空気すら巻き込んで、俺をその幽玄の舞に引き込んでいく。

一時、俺は審査なんてものを忘れた。

これまで何度か日本の古典芸能というものを見る機会があった。その際の俺の率直な感想を発表しよう。

—— あ？ わりいわりい、寝てて見てなかった。

そう、開始十分もしないうちに俺は眠りの世界に落ちていった。俺にとってその時見た演目は退屈で退屈でしょうがなかったのだ。もちろん、それから俺も年齢を重ねたということはあるだろう。少しは古典芸能独特の良さを理解できるだけの感性が養われたのかも知れない。

しかし、この違い……本当にそれだけだろうか。演者の力量の差は、無いとは言えないだろうか。

審美眼なんてものが備わっているとはお世辞にも言いがたい俺だが、それでも自信を持つて言えることが一つある。

ごく単純なこと。保宜の舞には『魅力』があった。見る者を惹きつける力。それが圧倒的だった。

他に比較対象が無いので、身内贔屓だと言われたら返答のしようもないがな。

でもそんなことはどうでもいい。

保宜の舞を見終わった今、俺はとても満足しているから。

「え、えと……終わりです。お粗末さまでした」

心からの拍手を送ろう。そして今度こそ、心からごちそうさま、そしてありがとうと言おうじゃないか。

保宜にフられた経験のある高木兄も、顔を紅潮させながら掌の肌が裂けそうなくらいの盛大な拍手を送っている。その他の審査員だって、程度の差はあれど純粋な感謝を拍手に込めて保宜へと贈っていた。いいものを見せてもらった、と。

当の保宜はというと拍手喝采がいつまでも止まないことに気を良くするどころか、舞の間の洗練された雰囲気などどこかへふっ飛ばし、いつものおどとした保宜に戻ってしまった。少し残念。

「なあ保宜。お前、日舞って習ってたのか？」

「あ、はい。今でも通ってます」

「へえ、どうりで。凄い上手かったけど、日舞にも何か級みたいなのあるのか？」

「えと……、級……というか、名取っていう免許みたいなものは頂いてます」

名取。それくらい知ってる。免許皆伝というやつだ。
なるほど、そりや凄い訳だ。

きつと審査員や他の演者も含め、第一審査の結果には文句など無いだろう。

「四番さん、ありがとうございました。これで第一審査は終わりです。では早速、次の審査へ移りましょう」

殊のほか満足顔で、フレイ氏が告げる。

「次は、料理審査です！」

わざわざ調理実習室に移動してきたのは、全てこの審査のためだと言っている。それだけ、この企画を考えた先輩が料理に自信ありということなのだろう。

四人それぞれに調理用のスペースが割り振られ、どこから調達してきたのかも知れない山ほどの食材が四人の真ん中に堆く盛られて

いる。

その不自然さに目を瞑るのであれば、確かにこの場合は料理対決の様を呈し始めていた。

「制限時間は三十分。その間に自分が思う男性の好きそうな料理を作っていたいただきます」

すっかり審査委員長を自任しているフレイ氏の言葉に、皆がさつと中心にある食材に目を走らせる。ここから早い者勝ちで食材をゲットしていくルールらしい。

「ブヒー」

シユールが食材の山に近づこうとするのを、俺は抱え上げて阻止した。コイツが食材にされたらたまったもんじゃない。

しかも丸々太って……若干、美味そうだし。

「それでは始めてください」

フレイ氏がストップウォッチをスタートさせると同時、少女たちはライバルたちを目で牽制しながら、我先にと食材確保に動き出した。

ただ、鬼気迫る表情の他の三人に恐れをなしたか遠慮をしたのか分からないが、やはり保宜が出遅れていたのが気になった。

〓三十分後

「そこまで。皆さん手を止めて下さい」

終了の合図とともに、四人の吐息が漏れた。それは出来に満足するものや、時間内に完成しなかった無念を嘆くものなど、それぞれ違う。

先輩、高木さん、ちづるさんの三人は各々高級食材と呼べる種類のものをゲットしていたのだが、保宜はそれらがあらかた無くなった後の食材から選んだもので料理を作っていた。このルールはちよつと不公平だったんじゃないか、と審査委員長に提言してみたが、その時点で既に後の祭り。

申し訳ないが、保宜にはそのまま続けてもらうことになってしまった。

少し、肩入れしすぎだろうか。

「それでは一番さん。料理を審査員に」

「ああ、分かった」

先輩の料理は、百グラムあたり数千円するという超高級和牛を使用したサイコロステーキだった。審査員に分けやすいようサイコロにしたのだという。審査委員長フレイ氏曰くそういった気配りも評価対象になるらしかった。

付け合せの野菜には緑のクレソンやグリーンピース、赤のニンジン、そして黄色のカボチャやベビーコーンなど、標準的なものを持ってきた。しかし、スタンダードはいい。

そして肝心のステーキだが……こんなの、美味くない訳がないだろう。

シンプルに塩と胡椒で味付けした牛肉は、噛む度にジュワアと溢れ出す肉汁で口中を満たし、これまで味わったことの無いような満足感を俺に与えてきた。

今のところ、文句なし。

ただ料理とは関係ないのだが、少し気になるのが試食の順番。ここにきて、先輩が最初であるということに恣意を感じるのだが。先輩は自信のあるこの料理審査で優位に立つために、審査の順番を予め自分からにしたんじゃないだろうか。

考えすぎか？とは思いつつ、このことを審査委員長に申し上げると、後からの人は温め直すことだけは許されることになった。先輩は不満そうな顔をしており、この人も大概腹黒だったらしい。

「二番目の方、どうぞ」

「それでも私、料理得意なんだから」

高木さんの作った料理は、なんと金目鯛の煮付けという、予想以上に家庭的なものだった。見た目も香りも申し分ない。

さて、後は味がどうかだが。煮込む時間が足りなかったのか若干

固い気がする身を解して、口に運ぶ。

「……………、……………っ……………」

……正直言うと、吐き気を催す味だった。

祈るような格好で俺を見ている高木さんには悪いが、今すぐトイレに駆け込みたい。

身はパサパサで、味は甘味やら苦味やら酸味やら塩味やらがごちゃ混ぜとなり、これ以上ないほどの不協和音を奏でていた。そこには負の相乗効果しか見当たらず、鯛本来の旨味などは一切消えている。

「……………ざ、斬新な味、ですね」

何かを堪えるように、切れ切れに言うフレイ氏。その意力に感服する。俺なんて口を開いたらリバーズしてしまいそうなのに。

「そうなんです。醤油と酒とみりんの他に臭み取りの生姜、それからレモン汁とか蜂蜜とかインスタントコーヒーとか入れてみました。どうですか、この相乗効果！」

醤油、酒、みりん、生姜までは良かったのに、そこから先が果てしなく良くなかった。

「……………味見は、しましたか？」

「はいっ、とつても美味しかったです！」

今の台詞が少しでも不味い料理をよく見せるための気を張った演技なんだとしたら、こちらとしてもその健気さに多少のお情け点を入れてもいい心境だったが、目の前に咲く向日葵みたいな晴れ晴れとした笑みを見ると、それが本気の言葉だと気付く。

味音痴も、ここまで来ると十分に人を殺し得る凶器だった。

「……………次、行きましょうか」

「え、なにに？ どうして皆下向いちゃってるの！？」

確かに高木さんがこのまま家庭に入るのは拙そうだった。

続いて、ちづるさんが料理を運んできた。

「私は男性が皆大好きな、ラーメンを作ってみたわ」

小分けにしたラーメンを、審査員の前に置いていく。

「さあ、どうぞ召し上がれ」

しかし、誰も手をつけようとしないう。それもそのはずだ。この料理から、高木さんの煮付け以上の恐怖を感じていたのは、俺だけではないだろう。

料理には作った人の心が表れる、とは良く言ったもので。

そのスープは——真っ黒だった。

「名付けて『麺・イン・ブラック』よ」

上手いこと言っただろうが、とてもじゃないが笑えない。だいたい、何を使ったらこんな色になるのだ。イカ墨はまだ食べられる黒だが、これは絶対に違う。こうしている間にも、どうにも形容の仕様がないう悪意ある臭いが俺の鼻腔を侵食してくるのだ。

味にどれほどの殺意が秘められているのか、想像もしたくない。

「あら、どうしたの？ 冷めない内にどうぞ」

確かに、冷めた殺意はもっと怖い。しかし、どうしても俺の生存本能がこの魔女が煮詰めたとは思えないダークマターを口に含むことに警鐘を打ち鳴らしていた。

そこに、

「もしかして食べさせて欲しいのかしら。だったら早くそう言えればいいのに」

しょうがないわね、というように苦笑したちづるさんが、俺へと近づいてきた。

その目の中に、俺は確かに見た。

加虐の喜びに潤む瞳を。

黒くコーティングされたラーメンが、箸に掴まれて目の前に差し出される。

「さあ遠慮なく食べて。そして、そのあまりの美味しさに……桃源郷まで旅してくるといいわ」

本気の殺意だった——！！

「や、止めてくれえ！ 後生だから——！」

「あら、不思議なことを言うわね佐田君。後生なんか願う前にあなたはとくに極楽浄土を味わっているでしょう？ さっきはこの私のドジっ子メイドを見て、今はこの私が腕に縋りをかけて作ったラーメンを食べさせてもらえるんだから」

これはさっきのメイドに関したいざこざの仕返しか！

「さあ旅立ちの時間よ。……いつてらっしゃい」

「黄泉の国は嫌だあ——！！」

その叫びは空しく響き、無理矢理麵を飲み込まされた俺の意識の間もなくスープの色と同様にブラックアウトし——そうになったところで、どうしてか現世に繋ぎとめられた。

「……………」

繋ぎとめたものとは——香り。

黄泉平坂を登りきろうとしていた人間を現世に引き戻すほど強烈な、それでいて心休まる香りが漂ってきたのだ。

何とも落ち着く香り。

見える。見えるぞ。主人の身体のことを考えて、氣遣って、真心込めて手料理を作る奥さんの幻影が。

その奥さんのシルエットは、

「あ、あの……ミオの、出しても……いいですか？」

保宜ミオ、その人なり。

香りからだって分かる、この思いやり。食材の色を殺さない優しい色使い。見るからに人体を害するものなど何一つない。

里芋の煮転がし、ワカメと豆腐の味噌汁、鰯の開き、ほうれん草の胡麻和え、鶏肉のソテーに椎茸やきくらげなどキノコ類をふんだんに使ったあんかけ風ソースを掛けたもの。

そして、白いご飯。

確かに目立ったものはないかもしれない。しかし、そのバラエティに富んだ献立はそれだけで一目置くに値する。三十分という短時間で、六品も揃えた保宜の家事力は否定するところなどないだろう。「健康料理の鉄則『まごはやさしい』を基本に、鶏肉で動物性タン

パク質、お米で炭水化物も摂れるのですね」

フレイ氏の専門家っぽい御託を無視して一口食べてみる。するともう手は止まらなかった。

時間が経つと味が落ちる料理もあるだろうに、その不利にも関わらず今回の出来。文句の付けようもない。

あつという間に全品を平らげて他の審査員を見てみると、皆が同様に満足そうに笑んでいた。高木兄などは感涙に噎びつつ、まだ名残惜しそうにチマチマと胡麻和えの胡麻を摘んでいる。保宜の手料理を食べられたことももちろんだが、そこには味への感動ももちろんあるはずだ。

どうやら今回も、審査員の意見をすり合わせる時間はいらなそうだった。

「皆さん、お疲れ様でした。それではこれから審査員での最終選考会議を開く……ことになっていたのですが、その必要は無いようですね。既に審査員の意見は一致しています」

女子四人が揃ってごくつと喉を鳴らす。……うち三人は、そんな必要無いはずだが。

「天鈿女尊は……………や——」

「あたしだな！」

「私よっ！」

「この私ね」

馬鹿かコイツら。

「あ、あの！ 今先生『や』って言いました『や』って！」

保宜の事実に基づく指弾に対して、ちづるさんがさも気の毒そうに、

「大丈夫、ミオ？ あなた、持病の病弱体質が祟ってとうとう聴覚に異常が……」

「出てませんっ！ それに病弱なこと自体は病気じゃありませんっ」

「栄養学科に属しているのに病弱とは情けない。それに栄養学など学ぶのは、まず食材を生産する農家の人の苦勞を知ってからにすべ

きだ」

「学科批判は止めて下さいっ！ ミオを貶める以上に問題あると思
いまっ……けほけほ」

「そうやって儂げな雰囲気出して男子の同情誘うとか、女として手
段が小癪なのよ！」

「ひ、ひい！ この人怖いすっ！」

「さてはそうやって私のこと怖がるのも確信犯ね！ なんて狡いの
この女！」

いや、本気で怖がってるっばいぞ。男の俺から見てもその般若の
形相は背筋が震えるくらいだからな。

次第に四人は固まり始め、遂には保宜を三角形に囲う形で陣形は
固定された。

これはつまり、イジメの図だな。

「ミオちゃん、興奮しないのよ！。向こうで一緒にお花でも摘みま
しょうねー。この時期だときつとコスモスとか咲いてますよー」

「コスモスが春に咲く国は日本じゃありません！ ミオをどこに連
れて行く気ですか！」

「大体、病弱とかを言い訳にして運動を避けるその根性に問題があ
る。今度就農体験にお前も連行していくことにしよう」

「そ、それは何とも反論しにくいですが……。って、もう話がずれ
てます。ていうか、もっと前から話はずれてました！」

「そうまでして天鈿女尊になりたいのかしら。なんて浅ましい女！」

「話しは戻りましたが、物凄く釈然としないこと言われてます。

むしろその言葉を受けるべきなのはミオじゃなくて皆さんですよ！」

「ここに来て責任転嫁？ だめね、もうアンタの性根は先の先まで
腐りきってるわ」

「う、うわああああん！ この人たち理不尽ですうう！！」

「ねえミオ。女子が泣けば全て丸く収まる時代は、もうとつくに過
ぎ去っているのよ」

「安易に泣くなど弛んでる証拠だ。今度就農体験に……」

「アンタみたいな女がいるから、女の涙の価値が暴落するのよ」

「ねえ皆さま、さすがにミオ様が可哀想じゃありませんこと？」

「いや、せっかくだからこの機会に全てを言っておこうと思う。その方が彼女のためだ」

「そうよミオ。この苦難を乗り越えることで、あなたは一步前進するのよ。女として」

「ですけど、この会の意味を考えると、いつまでも彦名様を待たせるのもどうかと」

「それはそうだけど！ でも今のうちにこの女を矯正しておかないと、そのうち男子に被害者が出るわ！」

「そうですか。それでは私が天鈿女尊の役を頂きますわね。どうやら皆さまはあまり興味が無いようですし」

「……は？」

「……いや、気付けよ。もっと早く。」

俺なんて何か知らんが急にファーストネーム呼ばれてドギマギしてるってのに。

いつしか話は保宜のパーソナリティ批判になっていて、それで罵言を言われるのは保宜にとって全くの筋違いだ。そこは大いに非難されて然るべき。

しかし、最も大きくツッコむべきなのはそんなことでないのは明々白々。

この場に第三者の声が混ざっていたことだ。

聞き慣れない女の艶やかな声。本来の日本人には決してあり得ない奇妙なお嬢様口調。

皆が声の発生源を特定しようと目を走らせるが、それらしい人影は見当たらない。そんな中でフレイ氏が額に手をあて、何やらあちやーとでも言いたそうな仕草をしていた。

「全く、人前では喋るなって言っただろう？」

そして、こう言ったのだ。

それこそが謎の声に語りかけるものだとすぐに気付いた。やけに

親しげなのは置いておいて、どこからその声が聞こえてくるのか耳を済ませていると、何とその出所は――

「ですけど私、もう我慢できませんの。何度も救っていただいたこの命ですもの、彦名様に私という全てを捧げないと気が済みませんわ」

――俺の膝上にいる、シユールだった。

「シユ、シユール!？」

「はい、彦名様」

シユールは膝から降りて、こちらを見上げながら嬉しそうに俺の名を呼んだ。

……やはりまだ『麵・イン・ブラック』の影響が俺の脳内に残っているらしい。遂に豚が喋りだす幻覚まで見始めてしまった。

確かにこれまで、シユールがまるで人語を解しているんじゃないかと思わせるような反応をすることはままあった。しかし、よりによって豚が人の言葉を喋るなんてファンタジーがこの世に存在するはずが無い。存在してはたまらない。

どうやら俺はちづるさんの魔手に掛かって意識を手放してしまっていたのだ。そこからずっと、今まで夢を見続けていたに違いない。賑やかで、楽しい夢ではあった。でも、夢なら覚めないといけないうな。早いとこ、豚が喋りだすこの幻想世界から抜け出さなくては。

さあ、目覚めの時間だ。

「どうしましたの、彦名様？ 急にお黙りになって」

「いや、ちよつとな。不思議な夢を見ていたんだ」

「はあ、どんな夢でしたの？」

「それがな、豚が喋るんだよ」

「まあ、それは素敵な夢ですわね」

「でも実際に豚の姿で喋られると、微妙なものがあるぞ。豚が器用に口元動かして人と同じような喋り方するんだから」

「そうでしたの。この姿はお気に召しませんでしたのね？」

「ああ……………つて、え？」

瞬間、目の前に太陽が現出したような強烈な光源が発生した。驚いて椅子を蹴倒しながら立ち上がると、その膨大な光は容赦なく目の前にいた俺の網膜を焼き、光が収まった後もしばし視力を奪う。ちかちかする目を指先で揉んでいるが、まだ視界は回復しない。一体何が起こったのかも把握できていないまま立ち尽くしているのも心もとなく、とりあえず誰か近くにいる人と接触しようと両手を前後左右に動かして周囲を探る。

と、右手が何か大きくて柔らかいものに触れた。

「あん」

「……………」

俺は知っている。ラブコメの主人公ともなると、この反応を聞いた上でそれでもその柔らかい何かを揉み続けるということを。そこに背徳感や倫理観なんて言葉を使うのは全くのナンセンス。あるのは条件反射という言葉を免罪符とした、男子の情欲に忠実であろうとする確信犯的な行動意識のみ。

しかし。そんな行動が出来るのは、その行為が『もう、バカッ』程度で済まされるラブコメという土俵があつてこそ話なのだ。

それを理解しているからこそ、俺は真っ先にその手を引こうとした。

ところが、その手は意に反して動かなかつた。断じて言おう、これは俺の意志によるものではない。

「もう、我慢しなくてよろしいのですよ？」

声の正体のものであるう手が、俺の手首の辺りをがっちり掴んでいたのだ。さらに、あるうことかその手は俺を引っ張り込み、その色々な意味で抗いがたい力に身を任せたままにしていると、急に――

「……………！」

頬に、柔らかい感触があつた。

「ふふ、本番は他の時に取っておきましょう。どうせならロマンチックな場所で、お互いの顔を見ながらしたいですもの。ね、彦名様

？」

その甘ったるい声を聞きながら、俺はしばらく放心していた。やがて視界が戻ってきた頃、俺はまだ茹だつたように朦朧としている頭に活を入れ、あの柔らかな感触の正体を探した。

それはすぐに見つかった。

そりゃそうだ。俺のすぐ横、肩同士があと数ミリで接しそうなくらい近くに、その人肌らしい熱源はあつたのだから。

その体温の持ち主は、会ったことの無い外人女性の姿をしていた。いや、現世では会えないだろうほどの神掛かつた美貌をした女性、と表現した方が的確かもしれない。

心臓が止まる。比喻ではなく、本当に一瞬は止まっていた気がする。

外人なんて誰も皆同じに見えると思っていた俺をして、この人の姿はいくら時を経ても忘れられそうにない。それくらい綺麗な人だった。

黒いワンピースドレスの大きく開いた胸元やスラリと長い手足の目に痛いほどに白い肌は間違いなく黄色人種たる日本人に発現する形質ではない。更にはコレこそが本物だと納得させられる艶を持った金髪が膝裏くらいまで伸びていて、またそれが彩る白皙の顔は丹精込めて造られた西洋人形の如く精緻極まる造形だった。

黙っていたら、すぐにでもこの高貴な女性に頭を垂れてしまいそうだ。

だからここで、当然の疑問を発しようと思う。

「……………アンタは、誰だ？」

「シュールですわ。彦名様」

「……………シュールって、俺は豚しか知らないんだが」

「だから、私がお豚さんでもあつたシュールですわ。あの姿がお気軽に召さないご様子だったので、本来の姿に戻りましたの」

「……………」

はは、何だ『本来の姿に戻った』って。それではまるで、あの丸

々太った豚がこの現実離れしたレベルの綺麗なお嬢さんに変身したみたいに聞こえるではないか。

全く、人をからかうのも大概にして欲しい。

とか考えていると、その疑念が表情に出ていたようで、フレイ氏が仕方なさそうに苦笑しながら、俺を見ていた。

「何を驚いているんだい？ 君たちは、この子の変化なんて足元にも及ばないほどの非現実的な現実の中にいるだろう？」

こちらに歩を進めながら、続ける。

「世界趨勢決定会議、異次元『第十三層』、神々の世界『神界』。信じる信じないは別にしても、こんな馬鹿げたものを追っていた君たちが、今さら驚くほどのことじゃないさ」

自分で言うか、それを。

フレイ氏は女性の傍まで行くと肩を軽く叩く。俺だったら触れることすら無礼だと感じてしまう、その肌理細かい肌に遠慮なく触れる。

「さあ、シュール。見せてしまったんならしょうがない。改めて皆に自己紹介を」

「はい、お兄様」

何ですと？

「この姿でお会いするのは初めてですわね。私、豚のシュールとして皆さんと一緒に行動しておりました、こちらにいるフレイの妹、フレイヤと申します」

「フ、フレイヤだと!？」

「はい、御厨様」

瞠目した先輩は、それからフレイ氏を睨む。

「……どういことです？」

「いやー、僕がこつちに来る時、フレイヤもどうしてもって付いて来たがつてね。この姿のまま来ちゃったら大騒ぎになるだろうからと思って、豚に変身させておいたんだ。仮にもフレイヤは北欧の美の女神だからね」

そのふざけたような物言いに先輩は目を眇める。

「……騙っていたのですか。あたしたちを」

「心配しないで欲しい。この子は特に上の思惑とは関係ないよ」

「フレイとフレイヤ……北欧の中でも有名な二人が共に日本に来ている。それにこれまでフレイヤが姿を偽っていたことも、あまりこちらとしては良い印象を持ってないのですが」

これは、これまでとはうって変わって声を低くした高木さんの台詞だ。

「最初の方の解答、僕らは兄妹なんだよ。他意はない。そして後の方の解答、さつきも言った通りこの子は北欧の美の女神だ。でもこの子はまだ半人前でね。ブリーシングメンの制御もできないのに人の姿を取っては、下手をすれば日本人の半分がウチの妹に傳くことになってしまう。それは君たちにとっても不都合なはずだ。そうじゃないかい、高木朔耶さん？」

「……………っ」

「それに、向こうでの生活は君たちの想像以上に退屈なんだよ。時に退屈というものは神さえ殺す。それを理解してくれるとありがたい」

「……………」

先輩と高木さん、フレイ氏の三者間で交わされる会話は他のLDK同好会員にとってはチンプンカンプンな内容で、皆して首を捻る。しかしフレイ氏が何かしらの規約違反のようなことをし、先輩がそれにキレている、という状況は何となく理解できた。

先輩も高木さんも、そのフレイ氏の言を受けて追及の矛を収めたようだ。まだ納得いかないようにブスツとしてはいるものの、口を開く気配は無い。

どうにか最悪の展開は回避されたようだ。

シニール改めフレイヤさんは、この状況を変わらぬ笑顔で見つめていた。それは三者の危うさをも包み込みまんとしているような、超然としたもの。

こうして見ると、兄妹だけあって確かにフレイ氏と似ている気がする。顔の作り以上に柔和な雰囲気か酷似していると感じた。

それにしても、さっきのフレイ氏の話を聞いていて、一つ疑問が浮かんだ。本筋には全く関係ないが。

「シュ……フレイヤ」

「どちらでも構いませんよ。彦名様の呼びやすい方で呼んでください」

「それじゃあ、シュール」

「はい、何でしょう？」

「豚の時は、どうしてシュールって名前だったんだ？」

「豚さんだからですよ」

「は？」

「フレイヤは北欧神話でシュールとも呼ばれているのですが、このシュールというのは古ノルド語で豚という意味なんです」

それじゃあ俺は今まで、この人のことを『豚、豚』と呼んでいた訳か。

それはきつと女子にとって、尻軽以上のNGワードに違いないのに。反省。

「……何かスイマセン。シュールシュール言いまして」

「ふふ、大丈夫です。私はこの名前が嫌いではないので。お気になさらず、彦名様」

そいつは良かった。

「なら、そもそもどうして豚なんだ？」

「フレイヤは北欧神話の神々の中でも子孫繁栄のために信奉する女神でもあったんです。そのため、繁殖力の強い豚という動物の名前が別名として付いたんだと思いますよ」

「へえ……………え？」

ん、ちよつと待て。今さらながら、とある疑問に行き当たった。

「アンタの名前は、フレイヤ」

「シュールでも構いませんわ」

「で、その神話の女神様の名前も、フレイヤ」

「シュールでも構いませんわ」

「さつきアンタ……変身、とか……したよな？」

「はい、しました。豚さんからこの姿に」

「……今から、物凄い失礼かもしれない質問してもいいか？」

「はい、何なりと。彦名様」

「あなたは人間か？」

「いいえ、神ですわ」

「……………」

これは笑うところだろうか。

やはりこの人はシュールだ。こんなに真顔で、人間の真顔で『神ですわ』なんて言われたら、シュール過ぎて困る。

でも、どうしても笑い話で済ませることができない。嘘だと断じることができない。

もし今の『神ですわ』発言がジョークだとして、あの豚からこの見目麗しいお嬢さんへのメタモルフォーゼをどう説明したらいい？
やはりどうしてもそれは人知を超えた怪現象としか言いようがない。

つまり、この人は――

「か、神様あ！？」

「？ 何を驚いてらっしゃるんです？」

「オウ、マイガッ！」

「え……？ は、はいっ。私、彦名様のために一生懸命頑張ります。
不束者ですが、どうぞよろしくお願いしますっ」

「……、……何を言ってるんだ？」

「え？ だって今『ああ、私の神様』って英語で言っただけじゃないですか。これって、慎重なことでも有名な日本人男性のプロポーズですね？」

「この言葉を直訳して、しかも言葉通りの意味に受け取る人を初めて見た！ しかも妄想逞しい自己解釈！」

「うんうん。早速いちゃいちゃしているね、君たち」

フレイ氏が俺とシユールの肩に手を回してきた。

それから言っただのは、今日これまでの諍いにケリをつける言葉だった。

「天鈿女尊に選ばれたフレイヤが、猿田彦たる佐田君とイチヤイチャした。ということはこれで、あの演習林の中にあった社の扉も開かれたはずだ」

「あつ。ちよつと、どういうこと？ 結局あの選考会はどうなったのよ！？」

「ああ、と。そうだった。それを言うのを忘れていたよ。いやー、朔耶さんや他の皆さんの頑張りはとても素晴らしかったんですけどね、こうして佐田君がウチの妹とイチヤイチャしちゃってどうもお上も御納得されたいらしい今、もう必要ないかな……って、……思ったん、だけど……ご不満？」

「当たり前でしょご不満よ！ 大体なんで勝手にフレイヤに決まってるのよっ！」

もつともだった。

「今回の選考会では、審査を通じて一番最初に佐田君の肌と接触した女性が天鈿女尊の役を担う、という取り決めになっていたんだ」
「何だか罰ゲームみたいな品のない条件だが、やはり誰との取り決めかは聞かない方がいいのだろうか。」

「その作業を選ばれた女性との熱い抱擁プラス接吻という形で決着させようと思っていたんだけど……、どうやらそれを待たずして佐田君がウチの妹に触っちゃったみたいだね。妹のグラマラスボディを見て我慢できなくなっちゃったかな。はっはっはぶへ！」

「笑ってんじやないわよっ、この怠慢教師！」

「お、お兄様！」

高木さんにドロップキックをお見舞いされたフレイ氏に駆け寄ろうとしたシユールだが、その前に高木さんにズビシッ！ と人差し指を突き付けられた。

シユールはそれにビビツた様子で、身体を硬直させてしまう。

「だいたいアンタは日本人ですらないでしょうが！ 日本神話の神様なのに、野蛮な北欧人がそれをやるのは無理があるわ！」

「そ、それは大丈夫じゃないかな」

復活早いなフレイ氏。

「フレイヤといえば、北欧の世界でもちよつと名の知れたエロ女神だ。桶の上で胸をはだけながら踊ったという伝説が残っている天鈿女尊の代役としては申し分ないだろう」

「あ、あるわよ！」

「でも残念ながら、お上は申し分ないと言っているようなんだ」

「さつきから思ってたけど『お上』って誰なのよ！」

「君も知っている人だよ」

「……え？」

それつきり高木さんは黙りこくり、フレイ氏も高木さんから顔を逸らした。

「他の人も、何かあれば聞くよ？」

「………扉が開いたのなら、文句は無い」

「え、あ、ええ。私も特にないです………あの女は少し気に障るけど」

「何だか今日一番被害を蒙ったのはミオな気がします………けど、はい。大丈夫です。………でも、何でしょうか、ちよつと残念です」

「そう、良かった」

とか言いつつ、良くない雰囲気がぶんぶん漂って来るんだが。

「それじゃ、今日はお開きにしよう。それで明日は土曜日だけど、皆予定は空いているかい？」

「ああ、空いている」

「私も大丈夫です。………あの女を絞めるのは来週にしますから」

「ミオも空いてます。………けど、本当に何なんでしょう、この心残り」

大丈夫だろうか。果てしなく不安だ。

「佐田君は？」

「あ、はい。俺も大丈夫です。明日来れます」

「よし。それじゃあ明日の朝十時に会室に集合しよう」

フレイ氏が笑顔で締め括る。

「遂に明日は『神界』に突入だよ。皆、お菓子は千円までだから注意して」

仮にも日本の将来を決めるはずの大仕事を遠足みたいに言っな。しかもおやつ代高っ。

ともあれ、このどんちゃん騒ぎのお陰で、どうやら新たな道は開けたらしい。何だか危機感など微塵も無くただ遊んでいただけのよな気がしなくもないのだが、これでいいなら万々歳だ。

きつと、どんちゃん騒ぎで開く扉もあるだろう。

天照大神が隠れたっていう岩戸みたいに。

「……我々、忘れられているよな」

「……そうですね、高木先輩」

「今日、共に夕餉でもどうだろう、加藤後輩」

「はっ！ お供します、兄！」

妙な関係が生まれつつある男二人は見ないことにした。

翌日。

土曜日ということで当然だが、平日に比べて乗客の少ない電車を乗り継いで大学へと向かう。朝から電車の中で座れたのは、今日これからの苦勞に対する神様の褒美の前払いだろうか。

もしくは、

「受難の前の最後の安息、なんてな」

我ながら縁起の悪いことを言ってしまった。この国には言霊とかいうのがあるというのも聞いたことがある。信じたことなど俺の人生の中で一遍とて無いが、こういった良くないことは往々にして現実となることが多い気がする。

ただの被害妄想もしくは誇大妄想かも知れないがな。

などと今日も今日とて晴れ渡った蒼天を見上げながら考えていると、思ったより早く学校に到着し、会室へと辿りついた。

会室には既に先輩、ちづるさん、保宜の三人にフレイ氏とシールの兄妹、呼んでもいないはずなのに高木兄妹まで集合していた。フレイ氏曰く特に問題もないだろうからと、しょうがなく、ぶつぶつ文句を言いつつ俺たちの金魚のフンになった高木兄妹も引き連れて、構内演習林を前回と同様ぐねぐね蛇行しながら抜ける。そうして辿りついたのは、例の絢爛な社だ。

鳥居をくぐり、前回吹き飛ばされた際に出来た傷が残っている箇所を擦りながら、扉の前に立つ。

生唾を飲み込みつつ、扉に手を掛ける。

しかし、なかなか踏ん切りがつかない。やれやれ、刷り込みとは難儀なものだ。こつも身体が動かなくなるとは。

その時だ。

扉に掛けていた方の手に、誰かの手が重なった。

白魚のように細く滑らかな指。しかし確かな熱を持っている、柔

らかな手。

「大丈夫ですわ。彦名様には、この私が付いています」

声の方に振り向けば、すぐ近くにシユールの整った顔があった。

その近さにまず息を呑み、続けざまその整った美貌に息が止まった。

「……なあ」

「はい。なんでしょう、彦名様？」

「どうしてそんな俺にこだわるの？」

そう聞くとシユールはショックを受けた様子で顔を歪め、それから剥れたように唇を尖らせると、不機嫌顔を上目遣いに近づけてきた。

背後から聞こえてきた気がするブチツと何かが切れたような音は、聞かなかったことにしようと思う。

「忘れてしまわれたのですか？ この場所」

「この場所？」

「ここで、私は彦様に命を救っていただきましたわ」

「……あ。そうか、あの時はまだシユールは豚だったな」

そういえば、結構必死になって空を翔ける豚を救いに走った記憶がある。

「それで、か」

「はい。もし彦様に受け止めていただけなかったら、私は間違いなく死んでいましたもの。だから救って頂いたこの命、彦様に捧げようと決めたのです」

「そ、そうか……」

情けないことだが、返答に窮する。

俺は質問を変えてお茶を濁すことにした。

「……神様も、やっぱり死ぬのか？」

「もちろんです。でもお兄様でしたら、幾ら痛めつけられても死にませんよ。ご自分でそう仰ってましたから」

きつと自慢げだったんだろうが、とても不憫に思うのは俺だけか。サンドバッグの運命に、幸多からんことを。

「あつそうだ。彦名様」

「ん？」

「あの時……私を受け止めてくれた時のお洋服って、まだ残っていますか？」

あれか。……家に帰ると同時に捨ててしまったな。しかし、それを正直に言ってしまうのも何だか本人を前にしていると気が引ける。
「あ、ああ。まあな」

「良かった。あのお洋服に沁み込んだ私の涙は、しばらくすると黄金に変わりますから。そうしたら是非、換金などなさるとよろしいかと」

「……………はい？」

黄金、ですと？

「私の零した涙が黄金に変わったっていう伝承が北欧には残っているんです。もちろんその性質は私も受け継いでいますから、あの時の涙も黄金になりますよ」

「……………ははー……………ああ、そう……………」

この人が言うんだ、それは真実なんだろうな。……………家帰ったら、ゴミ箱漁ろう。

それにしても、だ。

世間話に近い会話。その間もずっと、重ねられたままだったシュールの手。

それだけで、こうして安心させられてしまう俺は、なかなか単純な男だったらしい。

「それじゃ、せーの、で行くぞ」

「はい」

「せーのー！」「」

力を込める。と、呆気なく扉は開いた。

昨日、どれだけ力を入れてもびくともしなかった扉が、今日はいとも簡単にその内部を晒している。本当に昨日のあれで条件を満たしていたらしい。

ほとんど力を入れずに、まるで自ら動き出したと勘違いするほど滑りの良かった木製の扉は、微かな擦過音だけを俺たちの耳に残し、内部を開帳した。

背後からは歓声が起こる。

ところが。

喜々として中に入ってみると、そこには『がらんどろ』としか表現のしようのない、何も無い空間が広がっているだけだった。俺に分かるのは、畳に使われている蘭草の白緑色と心安らぐ香り、そして障子から漏れる透影だけ。

そこで、盛り上がっていた思考が、急速に冷めてきた。

まさか――

「――ここじゃない……なんてこと、ないよな？」

これまでの苦勞――と言えるのかどうかは分からないが、それなりに濃密な経験をして辿りついたこの社が目的の場所とは違うとなると、正直、心が折れそうだ。

「大丈夫。ここで合っているよ」

フレイ氏がいつもと変わらぬ穏やかな口調で、腕を上げた。それは右側の壁を指差していて、導かれるように俺もそちらに視線を向けると、

「……………あ？」

たった今気付いたが、そこには壁に掛けられた一振りの古めかしい剣があった。諸刃の剣には其処彼処に長い年月を物語る錆が入り、欠け、今にも折れてしまいそうだった。

なのにも関わらず、それから強烈な圧力を感じた。この社から感じたものを、より濃密にしたようなプレッシャー。俺はそれに向かって反射的に頭を下げる。

このプレッシャーは、ここで終わらない。

続いて同様の圧力を左側からも感じ、そちらにも頭頂部を向けた。どうにか上目遣いに見ると、そちらには数珠状に何個も繋がれた勾玉があった。

そして真正面からは、一際強力な、まるで重力自体が何倍にもなったような暴力的とも感じる圧迫。

無意識の内に正座の形に足を整え、両手を付いて額を畳みに擦り付ける。今度はかなり力を入れて反抗し、圧力の正体を探ると、

「か、鏡……？」

ついさっきは見えなかった、しかし今は大きすぎる存在感を放っている三つの物品。

剣。勾玉。鏡。これくらい俺だって知っている。

三種の神器だ。

でも、そんなものがどうしてここに。

「あれが、向こうに続く扉だよ」

フレイ氏が言う。

「こちらから『神界』に行くために必要なものは、どこの神話にも必ずあるはずの『人と神とを繋ぐもの』だ。日本においてそれは、神々から天皇家に渡った、これらの三種の神器ということになる」
声の聞こえてくる高さからして、フレイ氏は立った状態のままのようだ。おそらくは他の人も同様だろう。とうとう俺は口も開けなくなり、フレイ氏の言葉の続きを待つ。

「さあ皆。佐田君と同じように鏡に向かって頭を下げて。そして目を瞑るんだ」

衣擦れの音が背後から耳に届く。

「そして佐田君」

「……………」

何でしょう、生憎俺は今しゃべれませんよ。

「君が言うんだ。こちら側と向こう側を繋ぐ祝詞を」

だから喋れないんですってば！　だいたい祝詞とか知らんし！
とか心中で文句を吐いておきながら、この落ち着いていく感覚は何だ？　まるで自分がこれから神聖な何かに望むかのように、自分の意に反して澄まされていく心。

その変化はいつそ、自分という存在が別の何かに置き換わってい

くような。

そして、まるでそっちの方が本来あるべき状態のような折り合いの良さ。

何故だ。

——何故、頭に言葉が溢れてくる。

「ひふみよいむなや、こともちろらね、しきるゆめつ……」

勝手に口が動いた。自分自身全く意味の分らない、異世界の呪文としか思えない文言を、俺が唱えていた。

何故だ。

——何故、何も違和感が無い。

「わぬそをたはくめか……」

自分が不自然極まりないはずの台詞を唱えていることに、俺の頭が何一つ反抗的な思考を起こしていない。それどころか、まるで心地よく眠ったように静まりきっている。

一体、何なんだ。

——何なんだよ、俺は！

「うおゑにさりへて、のますあせえほれけ」

今にも自分が消えてしまいそうな心細さに押し潰されそうになりながらも呪文を唱え終わった、その瞬間。

まるでホモジェナイザーにでも入れられて攪拌されているような浮遊感を得た。目まぐるしく重力の掛かる方向が変化するように脳が揺さぶられる。もしくは無重力空間に放り込まれたように、だ。

どちらにしろ経験したことなどないので、的確な表現になっていないかは自信がない。

俺は足に伝わる畳の感触に縋りながら、必死に畳に爪を立てていた。

唐突に。その無重力感が失われ、通常通り自然の摂理に則った重力も戻ってきた。しかし頭の揺れはすぐには収まらず、俺はしばらく畳に爪を食い込ませていた。

「……そうだ、良く出来たね」

フレイ氏の声が、いつもの朗らかなものとは遠く感じた。ここに来て何かを躊躇っているような、まるで自分の中の大きな感情を必死に抑えている、そんなふうに聞こえた。

俺の、俺自身に対する懷疑心ゆえの錯覚か。

「皆。もう、目を開けても大丈夫だよ」

「……………」

ゆっくりと瞼を持ち上げる。こんなにも瞼が重いものだとは知らなかった。

だがそれも、目に飛び込んできた風景を前に吹き飛んでしまった。

「……………お……………あ……………」

絵に描いたような風景。

それが第一印象だった。

空。見たことのないくらい蒼色の濃い空。ただ高いのではなく、どこまでも続いているように思わせる、田舎でも見られないような天壤の蒼穹。

森。見たことのないくらい逞しく大きく育った森。一見寒冷な地方に見られる針葉樹林のタイガのような印象だが、高さは桁違いだ。言うなれば、緑の摩天楼。

花。見たことのないくらい豊富な彩りを見せてくれる花の群。季節などを全て無視してありとあらゆる地球上の花が同時に咲いたとしても完成しない、色の万華鏡。

湖。見たことのないくらい鮮やかに陽光を照り返す湖。底の石が観察できるほど澄んでいるのに、一度遙か遠くの湖面を見やれば、そこには天然の巨大映画幕。

そして、そこを渡っていく、尾を長く伸ばした青い鳥。

鬱陶しさという言葉とは無縁の、人が望んで止まめ楽園の如き自然。

秘境と呼ばれる僻地にありそうな、しかし地球上のどこにも見つけられないと確信できてしまう——無何有の郷。

その世界の中に、ふと一人の男が姿を見せた。

男は銀色の長い髪を風に遊ばせ、その楽土のような世界に佇む。表情こそ優れないが、男と世界は、それはもう良く似合っていて、一服の名画とでも呼べそうなほどだった。

「ようこそ」

その男——フレイ氏が、両手を広げる。

「僕らの世界へ」

俺たちの、クライマックスの舞台だった。

その後、俺たちの団体はフレイ氏を先頭にしてゆつくりと歩いていた。

当然のように舗装などされていない道。しかしながら短く柔らかな芝草が地面を覆っているお陰で歩きづらくなどない。むしろアスファルトの固い路面に比べたら幾分足も疲れないように感じた。

二十分近く歩いたら多少は疲れが来たりするものなのにな。

大学の社で正座していた俺たちは、気付くと四阿のような場所にいた。西洋風の楽園みたいな空間の中でそこだけが和風に切り取られており、床も畳敷きのままだった。

そこから穏やかな気候の中を歩くこと約二十分。俺たちがフレイ氏に案内されたのは、これまで見てきた風景とは違い、随分と雑多な印象を受ける場所だった。

奥行きも横幅も果てが見えないほど広大な芝生広場に、ギリシャの神殿みたいな石造の列柱建造物が数多く立ち並び、かと思えばストーンヘンジみたいな謎のオブジェのようなもの、巨大な岩や樹木に注連縄を巻いた日本的なものなども複数見受けられる。

言ってしまうえば、世界各国で描かれた神話の世界や神々に関係のあるものが時空を捻じ曲げて一箇所にまとめられた、そんな遠大な空間だった。

規模を見れば、一つの町と称しても問題ないかもしれない。

建造物の間を縫うように縦横に伸びる歩道の幅員は十メートルほ

どもあり、かなりゆったりしている。もちろん、そこを歩く人もいて……人？

ここは、神様たちの世界じゃなかったか？

それにしては、皆の服装が随分と現代的というか。建物とのギャップが凄まじいというか。まあお陰で自分たちもそれほど目立っていないという意味ではありがたいが。

道行く人の中にはアジア系の人もいて、少なからず感じていた場違い感も解消された。

フレイ氏は、ギリシャっぽい建築物の中でも一際大きい神殿に俺たちを案内し、特に扉などもないそこに通していく。

屋根のある神殿に立ち入った瞬間に風が止んだ。それはあたかも屋外から屋内に入った時の感覚と似ていた。

すぐ傍を歩いているのが如何にも普通の、自分たちと何ら変わらなく見える人たちなので忘れそうになるが、ここはもう俺たちがいた世界ではない。それを思い出せば、ここで出合った現象にいちいち論証を付けることの無意味さを理解できる。

そもそも俺たちがここに来たという事実ですら、論証なんて不可能なんだからな。

フレイ氏に連れられたまま進む。

内部は明らかに外観以上に広くなっており、この内部空間拡張システムは現実世界の構内演習林で体感したものと同性能のようだ。

更に歩くと、直線の突き当たりにも広間のような場所が見えてきた。どうやら目的地はあそこらしい。

その広間に、先頭のフレイ氏が足を踏み入れるや否や、

「遅かったじゃねえか、このウスノロ」

と、柄の悪い少年のような声が飛んだ。

それに笑みを濃くしたことからして、フレイ氏に向けられたものようだ。

「こちらにも色々と事情があったんですよ、デメキ……じゃなかった、デメテル」

「デメエ今、オレを食えもしねえブサイクな小魚と間違えそうになったな？　しばらく滞在するうちに、デメエにも日本の陰険体質が移っちまったか。ご愁傷様だ」

「生憎、金魚はカワイイですよ。食用でないのは認めますが。でも……」

彼には珍しく、口端を吊り上げた笑みを浮かべる。

「少なくとも、貴女よりは食えそうです」

「抜かせ」

俺たちも順にそこに入っていく、ガラの悪い声の正体を見る。

声の正体は意外にも、中年の女性だった。

「よう島国御一行。オレはWTC農業部門統括理事、ギリシャ神話オリンポス十二神に数えられる豊穰の神デメテルだ。特に歓迎する気もないから、勝手にもてなされた気分になってくれ。得意だろ？

そーゆー勘違い」

フレイ氏がデメテルと呼んだ女性が一段高い場所から俺たちを睥睨しながら言う。

広間には、マールブル模様の大きな岩が相当数、円形に並んでいた。それはちょうど人が腰掛けやすいくらいの大きさで、実際にそこに腰を下ろしている人も幾人かいる。

その中でも、奥の上座らしき一際巨大で純白の岩にデメテルは腰掛けていた。表情や言葉使い、ついでに年齢にも似合わず艶かしい脚を見せ付けるように組んでいる。

それにしても癪に障る言い方だった。日本という国に漠然とした嫌悪感を抱いていて、それを国民でもある俺たちにぶつけているような、大雑把な敵意。

これがデメテルという人らしい。いや、一応は神様か。

「それにしても……ガキばっかじゃねえか。大丈夫なのかよ、コイツラで」

「おや、心配しているのですか？」

「アホか。ここで色々あると後が面倒なんだよ。それを処理するの

は誰だ？ オレだ、オレ。はあ面倒くせえ。全くガキはいいよなあ、責任は全て大人任せだよ」

明らかにこちらを蔑んだ物言いに、表情を苦笑のそれにしたフレイ氏が窘める。

「まあまあ、恐らく大丈夫でしょう。貴女の心配はきつと、杞憂に終わります」

「随分な自信だな」

「しばらく滞在していましたからね」

「情が移ってなけりやいいが」

「なに、貴女ほどじゃありませんよ」

「……ふざける、この」

純白の岩に両手を叩きつけると、それから腕に力を込めて飛び降りる。

その着地点は、十数メートルも離れた場所に立っていたフレイ氏の真横だった。

「あんまり舐めたこと言ってた……」

フレイ氏の耳元にたっぷりと何かを塗りたくった艶々の唇を寄せる。

「――」

続く言葉は小さく囁かれ、俺の立っている位置からでは聞き取れなかった。しかしフレイ氏を見ていれば、その台詞の効果のほどは一目瞭然。

柔和な笑顔のまま血の気が失せて顔面が蒼白になり、やがて細かな痙攣が始まった。

「分かったら、さっさと話を進めるぞ。天然ボーヤ」

「……はい」

えらく従順になっていた。

「それでだ島国御一行。テメエらは今日、ここに何しに来た？」

デメテル曰くガキばかりの集団の中で先頭に立っていたため、その視線は俺を向く。

「それは、あれです。……日本の将来がどうかこうとか」

ぶつちやけ、それほど詳細を把握しているわけではなかった。それを隠すつもりなど初めから無かったが、そのしどろもどろさがデメテルの眉を顰めさせた。

「……おいおい。マジで大丈夫かよ」

「か、彼はまだこのミッションに参加して日が浅いのです。まだ少し認識が固まっていなかったのでしょうか。彼を責めるのは酷というものかと……」

「じゃあ監督不行き届きだ。テメエの不手際だな、フレイ？」

「……はい」

どうやら俺のせいでフレイ氏がデメテルに怒られているらしい。何だか申し訳ない。

とにかく、聞いたままを答えてみることにした。

「世界趨勢決定会議とかいう名前の農業分野の会議に俺たちが参加して、今後の日本の方針転換を伝えればいいんですよ」

「そ、そうだよ佐田君！ちゃんと憶えているんじゃないか……！」

「一般人として暮らしてきた俺には、とても忘れられそうにないインパクトでしたから」

と、俺が言うや否や、デメテルが噴き出した。

「つぶ、くはははははははははははは！一般人！一般人つつたか！こいつは傑作だな、おい！」

相変わらず癪に障る哄笑に嫌悪感を催しながら、

「……俺はそんなに馬鹿笑いでできる傑作喜劇などを語ったつもりはないんですが」

「喜劇？滑稽劇の間違いだろうが！」

こちらを見下したデメテルの笑みは、とてもじゃないが見るに堪えなかった。

「テメエが今いる場所はどこだ？」

「どこって……『神界』とかいうところ？」

「そんじゃあ、その『神界』とはどんな場所だ？」

「……………神様が集まる場所」

「そんなところに、人間が入れるとでも思ってたのか？」

「……………」

「デメエは導き手だろう？　ここに来るまでに幾つも扉をくぐってきたはずだ。そして、そこで起きたのは人間の世界の常識で測れるものだったか？」

一回目の社で吹き飛ばされたことと、二回目の社で俺が勝手に口にした祝詞を、俺は思い出した。

幻痛のように、直りかけの傷が疼く。

「……………」

こちら試すようなデメテルの言葉を聞きながら、俺はしかし驚くほど平静だった。むしろ、ああそうだったのか、と腑に落ちた部分の方が大きかったりする。

確かにここへの扉を開く時、口が勝手に意味の分からない祝詞を唱え始めた時は、自分が自分でなくなってしまったようで不安で怖かった。でも今になってみると、その原因が分からない方がもっと怖い。

その原因は、今はつきりした。

「暢気なもんだな。ええ？　属国根性丸出しの日本の神様。何も知らず、何も考えず、いつまでも誰かの尻にくつついて行けばいいなんて甘えた考え、まさに日本らしくて反吐が出る。アメリカにヘラヘラ尻尾振ってた第二次大戦終戦直後を思い出すな」

嘲弄するデメテルの顔も、そう考えると何の不安もなく見返すことが出来た。

「……………へえ」

デメテルが意外そうに目を見開く。

「あまり驚かないんだな。現実味が無さ過ぎたか、猿田彦？」

「現実味が無い経験を幾つも経てきましたからね。逆にその現実味が無い経験の理由付けができて、今ではむしろ猿田彦の心は穏やかですよ」

それに、そんな気はしていたしな。

俺とちづるさんと保宜とで三枚のお札に書かれていた神様の名前を調べた時のこと。その結果報告に際してちづるさんが口にした、突拍子も無い考察。

それはまるで、俺たちが神様の生まれ変わりだとも言ってしまう馬鹿げた話だった。

しかし、今だから明かそう。俺だって同じようなことを頭の片隅で考えていた。これだけ不自然に符合する部分が多かったら、それがどんなに非現実的なことでも頭の片隅にでも引っ掛かってしまうだろう。

ただ単に、己の理性と常識がその非現実的な引っ掛かりを否定しようとする力の方が強かっただけで、その疑い自体はいつまでも思考の隅っこの方に確かな重みを持って存在したままだったのだ。

そのパワーバランスが、デメテルの言葉でひっくり返った。

ところがそれは絶望感や喪失感などとは一切無縁で、俺の心にあるのはただワクワク感のみ。初めて社に向かった時、構内演習林を歩きながら感じていたのと同種のものだ。

自分が神様？

——これほど心躍ることもないさ。

これはきつと、ちづるさんも保宜も同じに違いない。

だからこそ今、あんなに平然と微笑しているのだ。

「へえ、それなりに肝は据わってるってことか」

「どうも」

慇懃無礼にそう返すと、デメテルは笑いを隠そうともせず、もう一度己の純白の岩に腰を下ろした。

「なら、さつさと会議を始めるか。日本の最高神の眷属が二人もいることだしな。立会人には事欠かない」

デメテルの視線を追った先には高木兄妹がいた。

驚かない。ただ、どんな神様なのかと疑問が浮かんだだけだ。

その視線に高木さんが気付いた。それから神妙な顔で口を開く。

「私はね、月読尊なの」

「ひいひいひい！」

唐突にミオが悲鳴をあげ、高木さんはそれに神妙な顔から一転、苦笑する。

「そう。月読尊は日本書紀で保食神を殺した張本人。ちなみにお兄ちゃんは素戔嗚尊よ。きつと保宜さんも、保食神の本能的な部分で気付いてたのね。私たちの正体に」

「最高神の眷属、っていうのは？」

ちづるさんが問う。

「死んでしまった伊弉冉尊を追って黄泉の国に行った伊弉諾尊は、そこでなんやかんやあって逃げ帰ってくるんだけど、黄泉で付いた穢れを落とすために顔を洗った時、左目を濯ぐと天照大神が、右目を濯ぐと月読尊が、鼻を濯ぐと素戔嗚尊が生まれたの。ご存知、天照大神は日本神話の最高神。その弟である素戔嗚尊も、妹である月読尊も、最高神と並び称される存在って訳」

淀みなく答える高木さんには、確かにそれらしいオーラがある……
…
気もした。

なんて、今さらか。

そもそもが、人並み外れて綺麗な人なんだから。

月の天女——なんて風雅な呼び名すら似合ってしまう、大和撫子。最近ではすっかりすぐカッ力する癪癪持ちになってしまつて、天照大神とどっちが太陽の神様らしいか分からなくなっているがな。

「そついつこつた。日本の農業神である倉稻魂神に豊受大神、保食神もこの場に揃つてゐるなら、なんも不都合なんざ無いだろう？」

デメテルがパン！ と大きく手を打ち鳴らす。

瞬間。

無色透明な空気から滲み出てくるように、数多の人影が浮かび上がってきた。その人影は間もなく明確な人の姿となつて、各々の岩に腰を落着けた。

「んじゃ、さつさと始めるか」

その場が整うまで、僅か数秒のこと。

「議題は『日本国の今後六十年』。そんじゃ、まずは日本の言い分を聞こうか」

その声に従って、先輩が一步を踏み出した。しかし、それはすぐにフレイ氏に止められる。不思議そうにフレイ氏を見る先輩。俺たちも同様に彼に注視した。

「……きつと、辛い思いをする」

フレイ氏が声を潜めて、言う。

「……これから君たちにとって、辛い言葉が向けられるはずだ」

その目は俺たちをゆっくりと見回していき、最後に先輩と視線を交わした。

「……覚悟を」

静かな言葉だったが、その意味は先輩にも十分に伝わっただろう。緊張を押し隠すように、一度はつきり頷くと、座席用の岩が円形に並べられた空間の中心に、先輩が進んだ。

「日本代表、伊勢大神宮外宮鎮座、豊受大神が奏上する」

やはり先輩は、全て承知の上で俺たちを集めたんだよな。自分の発する言葉に絶対の自信を持っている堂々とした語り口は、この驚天動地な事実を知って数日かそこらでできるものじゃない。

「今後五十年、我が日本国は農業・環境分野に重点を置き、またこれらに心血を注ぎ、これまでの五十年の工業発展の弊害として起こした数多くの問題の悉くを反省し、それに対処していくことを宣言する」

「だ、そうだ」

特に興味もなさそうに先輩の話聞いていたデメテルは、それから他の列席した神様へと嫌らしい薄笑いを向け、

「この戯言に賛同するヤツはいるか？」

戯言だと？

俺が顔を顰めていると、そこかしこから嘲笑が聞こえてくる。それに気を良くしたようにデメテルは笑みを濃くすると、先輩を

見る。

「あまり好感は得られてないみたいだな。くくく」

「……………」

先輩は、押し黙ったまま。

「異論のあるヤツは言っていいぞ」

途端。

広間は、怒号の飛び交う戦場に変貌した。

「罰だ！ 天罰を下せ！」

「同意だ！ この五十年間、卑小な島国の独りよがりな暴走によって世界がどれだけの被害を被ったか、身をもって分からせるべきだ

！」

「制裁措置を提案する！」

デメテルは、さも可笑しそうに先輩を見ていた。

これがフレイ氏の言っていたことが。

にしても、なんでこんなに敵視されてるんだ？

「こーゆー状態が『四面楚歌』ってんだろ？ 他国の歴史事実を状況表現に使うつてのもいかにも日本らしいな。迎合してばかりで、自国の誇りもあつたもんじゃねえ」

「……………」

先輩は気丈にデメテルを見据えたまま、口を開かない。

しかし、身体は動いた。

「……………ああ？」

丁寧に腰を折った、最敬礼の形に。

「何のマネだ？」

「……………も……………あ……………し……………」

「聞こえねえんだよ！」

糾弾するような叫声に、初めて先輩が身体を震わせた。

「……………申し訳、ありません、でした」

「何でも頭下げりゃ許されるとか思ってたんじゃないぞ」

デメテルは岩から降りると先輩の前まで歩いていき、それから先

輩のポニーテールを勢い良く掴み上げた。

「……………あ」

先輩の口からは苦悶の声が漏れる。

これは、どう見てもやりすぎだろう。

俺や高木兄は咄嗟に駆け寄ろうとした。なのに、フレイ氏に遮られてしまう。

非難の目を向けてみても、フレイ氏は真面目な顔で首を横に振るだけだった。

視線の先には、先輩の髪を掴んだままのデメテルが、内側に嵐のような猛烈さを秘めた静かな表情で立っている。

「今、この世界を侵している環境問題。主だったところで地球温暖化、その原因ともされる森林の砂漠化、自然環境の悪化によって引き起こる生態系の破壊、後々の地球にとってまさに致命的な問題となり得る火種を作り出してきたのは、どこの国だと思う？」

「……………いつ……………」

痛みに堪えている状態では答えられないはずだ。それを見越していたように、デメテルは息継ぎの間程度を待っただけですぐに続きを語りだす。

「——日本だ。テメエで問題起こしておきながら見ないフリして、今も暢気に資源を浪費している日本なんだよ！」

唾を飛ばしながら、歯を剥き出しながら、凶暴にデメテルが吠える。

でも、先輩は黙っているだけで、何も言えない。

周囲からは、すぐにでも俺たちをとって食おうとしているような、恐怖を煽る息遣いが伝わってくる。それは全面的にデメテルの言葉を肯定しているということだろう。

それには反感を覚える。

日本が全て悪い？ そんな馬鹿な話があるか。地球は広い。そんな理不尽を片っ端から日本に押し付けられたりしたら、この国に住まう人なら誰でも憤りを感じるだろう。

と、その時。

「おいおい、何だデメエは」

デメテルの凶暴な視線が俺を捉えた。

「……何です？」

「その反抗的な目は何だ、つってんだよ」

「生まれつきです」

「冗談に付き合ってる暇はねえんだよ、ガキ。質問に答えろ」

「……まるで日本だけが悪者のような口振りですが、貴方がたの国には後る暗いことが一つも無いんですか？」

「何を言うかと思えば、口を衝いて出るのは我が身可愛さの自己弁護。話にならん。そもそも話の中心はそこにはねえんだよ」

逃げにしか思えなかったのは俺だけか。

「危機管理能力。問題意識だ、ここで問うているのは。考えてみる、デメエら日本人の暮らしを。少しでも環境問題に危機感を持つているか？ エコだエコだと騒いではいるが、本気で危機感を感じている日本人がどれだけいる？ 我関せず。対岸の火事。風馬牛。それが日本人の本当の姿だろ？ ほれ、認めろよ。自分たちに直接的な被害が出るまで傍観を決め込んで、他の国が凋落しようと見て見ぬ振りをする、デメエらの醜い性根を」

嘲るように吐き捨てると、デメテルはさっさと視線を戻した。ちようど見下す位置にある、頭を下げたままの先輩の後頭部へと。

「……………」

言われ放題。なのに言い返せない。

「デメエらは、今まで何をしてきた？」

問われた瞬間、俺を形成している時間という積み重ねが、一気に崩れ落ちたような感覚を得た。足場が覚束なくなるような不安。それは心当たりがあるからに他ならない。

自分が全幅の信頼を置いていたはずの自分。その自分が経験し、考えてきたこと。

それの——なんと薄っぺらいことか。

そう。俺たちは、これまで何をしてきた？

日本を救うといった先輩の言葉を、どれだけの気持ちで受け止めていた？

どこか遊び半分のような、軽い心で行動してはいなかったか？何も考えていなかった。そうとしか、言いようがない。

俺の生活にしてもそうだ。我慢できる程度の暑さなのに反射的にクーラーのスイッチを入れてしまう。つい水道の蛇口を出しっぱなしにしたまま歯を磨いてしまう。その他諸々身近なところで無駄なのが明らかな事柄。

思いつく。思いついてしまう。

正直に言おう。俺は環境について何も考えていなかった。

マイ箸やマイボトル、エコバッグなどを使うべきなのは分かるのだが、結局面倒くさいという心理が勝ってしまう。

本当に些細な、努力とすら呼べない、ちよつと意識をすれば出来ることなのに。

環境と直結することを学ぶはずの、農業大学に入学したのにな。思案するまでもなく、俺にはデメテルに抗う言葉を持ち合わせていなかった。

それに引き換え、あの人はどうだ。今もデメテルに髪を掴まれたまま、しかしせめてもの反抗とばかりに押し黙っている先輩は。

これまで何度も俺に接触してきた先輩。

強引に俺をLDK同好会に入会させた先輩。

非常識とも取れる行動の数々。それは全て、誰よりも日本を想っていたが故の行動。

本当に俺は、ただ先輩の尻にくっついて来ただけだった。

「ふん」

反応のない玩具に興味を失ったように、先輩の髪を投げ離すデメテル。

俺たちに背を向け数歩を歩き、

「決まりだ」

判決を下す。

「今年、日本に天災地変を起こす」

広間中から、拍手喝采が巻き起こった。

「……………！　そ、それは」

「てめえは何も言い返さなかった。つまりは自覚してるってことだろ？　だったら甘んじて受け入れろ。それが日本という踊り狂った国に相応しい制裁だ」

それからデメテルは、何か楽しい悪戯でも計画したようにほくそ笑んだ。

さながら、積み上げた巨大な積み木の城を、どうやって崩してやるうかと無邪気に思案する子供のように。

「さーて、何を起こしてやろうか」

「台風だ！　伊勢湾台風以上のものを首都にぶつけてやろう！　東京の排水設備は脆弱だ。ちよつと大雨を降らせてやればたちまち大混乱に陥るぞ！　ついでに暴風でも起こしてやれば交通網すら分断され人の往来は不可能になり、都市機能も完全に麻痺する！」

「いや、それなら地震の方がいい！　最近日本では耐震住宅などと謳った建築が増えているらしいが、それらすらも木端微塵に出来るような規模の大地震を！　それにこちらなら津波も起こせて手っ取り早く二次的な被害を期待できる！」

「酸性雨もいいんじゃない？　丁度隣には一昔前の日本みたいな国もあるし。東南アジアから熱帯林を伐採しまくっているくせに、国土の七十パーセント近く森林だつて誇らしげに言っている日本の森をシユバルツバルトみたくしてやろうよ！」

滅茶苦茶だ。

これは会議なんかじゃない。裁判だ。

いや、それも違うな。裁判なんて生優しいものじゃない。ここで話し合われているのは全世界公認の大量虐殺の企てだ。

被害は、決して俺たちだけに留まらない。

全ての日本国民が標的だ。

ソドムとかゴモラって町に住んでいた人々も、全員が全員悪事を働いていたわけではないだろうに、神様は町ごとこの世界から消したらしい。

これが神様なのか。

——自分が嫌いになりそうだ。

「ふむ。どれもいいじゃねえか。危機に鈍感な日本人がアホみたい慌てて逃げ惑う姿が目につく」

「ちょっと待——」

「おっと、そうだダメエラ！ こんな余興はどうだ？」

いい加減、文句を言おうとした俺の言葉を覆い隠すように、デメルが何かを思いついたらしく声を張り上げた。

「今月末日までに、日本の欺瞞の象徴である東京の、現人口以上の日本人が神に反省の念を唱えたら、今回の制裁措置を免除にしてやるってのは」

「……………」

何故にいきなりこちらを救済するような言葉を？

なんて一瞬でも考えた自分が情けなかった。

「ははっ。無理に決まっているじゃないか、そんなこと」

その通り。どう考えても不可能だ。

「ああ無理だ。でも、だからこそ余興だろ」

「ほう、なるほど……面白いかも知れんな。今月末のWTC閉幕までの間に、こやつらがどんな悪足掻きを見せてくれるのか」

「くく、窮地に追い込まれた人間というのは鼠以上に愉快なものである。なまじつか知能があるからこそ人の末世では犯罪が横行し、その様はまさしく地獄絵図の様相を呈すであろう。それは確かにいい余興であるな」

そんな大事を求められても生憎、頑張り方が思いつかないな。

「どうやらオレの提案の方は好評らしいぜ。どうだ、豊受大神？」
くるりと振り返ると、奸吏のような下卑た笑みを見せる。

「何もせず終わるか。それともオレたちの腹を擦じらせてから終わ

るか。選ばせてやる」

「……………」

先輩は口を引き結んでいる。僅かに顎が震えているところを見ると、かなりの力で歯を食い縛っているのだろう。

それは一体どんな感情の表現なのか。憤怒か羞恥か絶望か。もしくは彼女の責任感に由来する孤独か。

どれだとしても、それは先輩一人の双肩には重すぎる。

きつと、約一億三千人で分け合って初めて丁度いいサイズだ。

だから先輩だけが槍玉に挙げられているのは、絶対に間違っている。

「笑っていただきましょう」

気付くと俺が返答していた。それも自信満々の笑顔で。

これには会場がしんと静まり返り、四方八方から視線が集まってくる。

少しだけ、気が晴れた。

「貴方がたの望むまま踊ってさしあげます。しかし、お覚悟を。笑いも度が過ぎれば死と近い。人は貴方がたのように、遥か高みからのんびりと世界を眺める悠長な時間など持ち合わせておりませんだからこそ、限られた時間の中で踊るダンスは、クライマックスに最高の盛り上がりを見せます。それこそ、末端兵が高級貴族の令嬢すらものにするほどに」

信じられないくらい俺の頭からスラスラ言葉が溢れてくる。

それにしても、よくこんなスリルした演説みたいな台詞を言えたもんだ。

黙ったまま顔を顰める神様たちの中で一人、面白そうにこちらを眺めていたデメテルに指を突きつける。

「抱腹絶倒の喜劇を、どうぞご期待下さい」

そのまま俺は、皆を促して広間を出た。

もちろん奴らに頭など下げてやらなかった。

日本人が誰にでもへこへこ頭下げるとは思うな。

頭を下げるべき相手は、ちゃんと選ぶんだよ。

なんて啖呵を切ってみたものの、実際のところどうしたものか見当もつかない。

どうも、あの世界の技術で人々の祈りを具体的な数値で示す装置が開発されているらしい。それで日本国民の祈りを捧げた人数を計測できるという。それに、広間にいた神様連中は何かしらの手段で今も俺たちの行動をモニタリングしているんだろう。

いざその立場になってみると、腹立たしいことこの上ない。何なら、このまま無気力状態を通して何の面白みもないショーにしてやつてもいい。もしかしたら、その方が奴らの期待を裏切れるかもしれないし。

しかし本当の意味で奴らの鼻を明かすなら我武者羅にでも行動して、少しでも奴らの出した条件に近づくのが常道だ。

その間の俺たちの行動が、どれだけ滑稽でも。

ならば行動あるのみ――

「……………はあ」

――と、決意表明してはみても、ぶつちゃけどうすればいいのか分らない。

実は俺の頭の中は、ずっとこの堂々巡りなのだ。

あの会議とは名ばかりの密室裁判から、早一週間以上が経過していた。その間ずっと今のような調子で、状況は一ミリも進展していない。この心労のお陰で、変わらずあった平日の講義内容は何一つ身になっていない自信があった。

四月の晦日まで、あと二週間。

会室の椅子に腰掛け、テーブルに頬杖を付きながら、もう何度目かも分からない溜息をついた。

「かつこよかったぞ」

ふと、隣に座っていた先輩が、そんなことを言ってきた。

「一体なんです藪から棒に？」

「君が最後にデメテルに言った言葉だ」

先輩はこちらに顔を向けず、窓の外を見ている。

二週間前の出来事を思い出しているのか。

「あの言葉のお陰で、あたしの心はふつと軽くなった。……………本気で、惚れてしまいそうだった」

「……………どうも」

俺から見えるのは、部屋の空調によって僅かに揺れるポニーテールのみ。

これ以上眺めているのはマナー違反かと、俺も正面に視線を戻した。

「……………どうにかしたいな」

「……………そうですね」

「行動をしようにも、どう行動すればいいかが分からない」

「同じく」

会室には今、俺たちの他にもちづるさん、保宜、高木兄妹、シュールがいる。その全員が全員、暗い顔で沈み込んでいた。

「……………本当に、アイツらは大災害なんて起こせるんでしょうか？」

「起こせるよ」

一縷の望みを掛けた現実逃避の問いも、一瞬で粉碎される。

声のした方に振り返ってみると、

「……………先生」

神界から返ってきて以来、顔を見ていなかったフレイ氏が会室の入口付近の壁に背中を預けながら立っていた。心なしに強めに腕を組み、瞼は閉じられ、見慣れたはずの柔らかな笑顔は影を潜めている。「信じられないかもしれないが、彼女はかの有名なギリシャ神話に登場する、オリンポス十二神の一柱に数えられる豊穡の神デメテルだ。ギリシャ神話は他国の神話、更にはその成立以降の芸術や哲学にも多大な影響を与えた。それほどの影響力を持った神話の重要なポストを占める神様なんだよ。多分、異常気象を起こすことなんて造作も無い」

「……………」

俺たちの認識はまだ甘いと教えるように、簡単に縋りつける希望を打ち砕いていく。

「君たちは、この国が好きかい？」

唐突に、フレイ氏が訊いてきた。

「何ですか、突然」

「答えてほしい。この国が好きかい？」

そんなの、解答は一つしかない。

「……はい」

俺の答えに続くように、他のメンバーからも肯定の返事が届く。

「この国が、これから贖っていくべき罪を抱えていたとしても？」

「はい」

「これからの時代、国を引っ張っていく世代は君たちだ。つまりは、君たちが矢面に立たされることになるんだよ？」

「はい」

迷うことなんてない。

「俺、この前あそこで日本のことを馬鹿にされた時、すごく悔しかった」

デメテルに日本を、引いては日本人を扱き下ろされた時の感情を素直に吐露する。

「俺は、他の国の大統領選とかで盛り上がってるその国の人をニュースで見たとき、冷めた目で馬鹿にしてました。なんでこんなに盛り上がるんだかって」

皆の視線が集まってくるのが分かる。だから俺は精一杯に胸を張った。

「でも、デメテルに日本を馬鹿にされた時、悔しかった。それで気付きました。俺もあのニュースで見た、大統領選で盛り上がっている人たちと同じなんだってことに」

ふと見ると、フレイ氏の顔に小さな笑みが戻ってきていた。

「テレビの中の彼らは、自分の国の将来を真剣に考えているからこ

そ、あんなにも盛り上げれる。それは、俺が日本を馬鹿にされた時に感じた気持ちと、何も変わらない」

それから窓の外から見える景色に目を移す。そこには見慣れた摩天楼と、晴れ渡った青天井が広がっている。

「俺、自分で思ってた以上に、この国のこと好きみたいです」

と、そこまで言ってから、自分がとんでもなくこつ恥ずかしい台詞を吐いたことに気が付いた。顔が熱を帯びていくのが分かる。

とてもじゃないが、他の人の顔など見れなかった。

そんな俺に追い討ちを掛けるように、皆の笑い声が唱和した。逃げ出してしまおうかとも思ったが、出口はフレイ氏に押さえられている。

逃げ場はなかった。

「ふふ、そうね。私も好きだわ、この国のこと。だって、こんなに面白い人がいるんだもの」

ちづるさんの言葉は本気が、それとも照れ隠しか。いまいち判別できない。

「ミオも好きです。色んな問題抱えた国ですけど、そのお陰でミオたちは今便利な生活をさせてもらっています。今度は、ミオたちが問題を解決していく番ですよ」

それは何とも保宜らしい、優しさを持った言葉だった。

「私だってこの国のこと好きよ。なんて言っただって、たくさん愛でるものがある。この国に住む人はそれを見つける名人なのよ。これはきっと、日本人だけに許された能力ね」

風雅なことを言うのは高木さんだ。何だかんだで雅という言葉が似合う彼女らしい。

「あたしも同感だ。元々この国には優しさと感謝が溢れていた。祈願をし、それが叶ったなら御礼をする。当たり前のことだが、これほど気持ちのいいことはない」

これも義理人情に厚い先輩らしい台詞だった。

「問題があるということは、逆に言えば、この国はまだ幾らでも改

善していく余地があるということだ。悲観することばかりでもあるまい」

高木兄は何だかんだで頼り甲斐がある。虎之助じゃないが、俺も兄と呼びそうだった。

「私は、この国で暮らすようになって日は浅いですけど、それでも日本が大好きです。だってこの国には、自分の事も顧みず、他人を助けてくれる優しい人がいるんですもの」

そこでシュールに優しく微笑まねなどしたら、照れない男はいないだろう。

「……ははっ」

皆も俺に負けず劣らず恥ずかしいことをのたまってくれた。

これで俺も、はにかみながらも顔を上げられる。

「その言葉が聞けて嬉しいよ」

目尻に光るものを見せながら、フレイ氏が言う。

「この国は、捨てたものじゃない」

見た目は明らかに外人なのに、その言葉には俺たちの誰より熱い日本への想いが籠っていた。

「ボクもこの国に来てから、たくさんの人を見てきた。もちろんあまり褒められない人も中にはいたよ。でも、それ以上に良い人はたくさんいた。ボクが道に迷っていた時に、尋ねた女性がわざわざ目的地まで案内してくれた時は感動で涙しそうだった」

「ベタなエピソードですね」

「しかもその人はネオンがキラキラしたホテルで休んでいかなかったか、なんて気まで利かせてくれてね。この国の人の優しさに、ボクは感激したんだ！」

「……………」

そのホテルがどんな施設なのかは、黙っておくのが吉だろう。

「……ちゃんと、目的地には辿りつけたんですか？」

「うん。その人が最後まで案内してくれたよ」

「……そうですか、それは良かったです」

「どうしたんだい？ 厭世論者みたいなニヒルな顔して」

「いえ、何でも……」

若干、捨てたものかもしれない。

「それにこの国がこれまでやってきたのは、他国から非難されることばかりじゃない。多くの新技術を開発し、中には全世界の人々の暮らしに革命をもたらしたものだ。だって沢山ある。だからこそ、ここでそれに水を差しちゃいけない。この国はちゃんとこれから、自分たちの罪と責任を自覚してやっていけると僕は確信してる。だから――」

「だから？」

「とっておきの技を教えるよ」

涙を拭い、子供のような笑顔を浮かべた。

四月末日。

神界の例の会議場では、神様が忙しく動き回っていた。

「どういうことだ、これは！」

悔しそうに頭を掻き毟る者。

「……こんなの、あり得ないでしょ」

目の前の事実が信じられないというように遠い目をする者。

「ペテンだ！ 奴らは神を謀ったのだ！」

ありもしないことを叫ぶ者。

概ね俺たちに友好的でない神様たちが親の仇でも見るように俺たちを睨んでいる。

広間の奥。丁度デメテルが座っていた純白の岩の上あたりの壁をスクリーンにして映し出された数値に、俺たち以外の皆が目を瞠った。

そこには現在『8618432』と言う数値が踊っていたのだ。その後も断続的に数値は上がり続けている。

これこそが、東京二十三区に住んでいるのと同数の日本人が神に

祈りを捧げたという、動かぬ証拠。

「何故、このような結果に……」

よほど俺たち——というか日本に損害を与えられなかったのが悔しいらしい。そんなに頭を抱えるほど日本が憎いのか。

その時、誰かが叫んだ。

「おいおい女々しいぞデメエら。素直に負けも認められねえほどデメエらは堕ちたのか」

この声、この口調、聞き覚えがある。というか忘れようがない。あれほど俺たちに鋭い牙を見せ付けた声だ。

「……………」

そのはずなのだが、しかし前回聞いたときとは少し印象が変わったような……。

「ですがデメテル！　こんなことあり得るはずが……！」

「あり得るもあり得ないも、今この目の前にある結果が全てだろうが。いい加減デメエらもその僻み根性を直せ」

「なっ……………」

聞いていた神様たちが絶句する。

「……………そう言えば、デメテル殿は随分と落ち着いていらっしやるな」

「ま、まさか！　貴様が何か小細工を……………」

「する訳ねえだろうが。んな面倒くさいこと。オレはただお前らより分別があるだけだ」

「何を！？」

いつしか神様たちの標的は、俺たちからデメテルへと移っていた。その展開に俺たちが拍子抜けしていると、フレイ氏が面白そうに目を瞑った。

「さて、帰ろうか」

「……………いいんでしょうか、このままで？」

「大丈夫さ。後は彼女が何とかしてくれる」

保宜に問われると、フレイ氏は当然のようにそう答える。相手との間に信頼とも呼べるような何かがあるようだった。

彼女？ と聞き返す前に、フレイ氏は踵を返してしまふ。

「それよりも。明日から皆も心機一転、大学の授業に集中しないとね」

「そ、そうでした……。ミオの学科、レポート課題がたくさん出て」

「それにきつと、ワクワクするイベントも待っているからね。これから」

「まさかまだこんなのが!？」

もううんざりというニュアンスを出しつつ、俺は満更でもなかった。

ただ退屈なだけだと思っていた大学生活。それがいきなり俺のアイデンティティさえ覆され、挙句の果てには日本の危機すら救ってしまった。

確かに俺に掛かってくる責任感とかは尋常じゃなかったが、それでもまた同様のことがあれば、俺は何だかんだ言って首を突っ込む気がする。

それくらい、この一ヶ月は濃密で、そして楽しかった。

それに何てったって一癖も二癖もある女子たちと出会い、今となつては女難どころか最高の女運だと言えるほどに彼女らのことを好きになつている。

これから、どんな日々が待ち受けているのか。

入学前の無気力が嘘のように、今は楽しみでしようがない。

まだまだ、やることも沢山あるしな。

——この世界のために。

「ああ、帰ろう」

先輩の声も喜びに弾んでいるように聞こえた。

「あたしたちの国へ」

エピローグ

「これでいいのかよ」

濃紺に染まった空が、列柱の間から覗く。

昼間とは打って変わって静まり返った会議場に、不機嫌そうな女性の声が反響した。すると、熱気が去った柔らかな空気から滲出するように、一人の妙齡女性が姿を現した。

「ええ、上出来よ。さすがはデメキンね」

「出所はデメエか、この腹黒がつ！ こんな万年皆既日食みたいなヤツが太陽の神じゃ、日本は毎日暗くて大変だな、おい！」

「失礼ね。そちらほどじゃないわ。女神もニンフも人間も、ところ構わず孕ませまくる、ギリシャの最高神様ほどじゃ」

「……まあ、それは否定しないが。………ウチの娘もアノ色情魔のせいで」

「ああ、ペルセポネちゃん。結局どうなったの？」

「あの色ボケ爺とハーデスの野郎を半殺しにしてきた。これですばらく大丈夫なはずだ」

「そう。良かったわね。今度お祝いにザクロでも送るわ」

「本当に送ってきやがったら殺す」

「やあ。相変わらず物騒ですね、君たちは」

間延びした声が、二人の応酬を止めさせた。

その正体は、丁度二人の間に割り込むような形で顕在化した長い銀髪の男。

「仲が良いんだか悪いんだか」

「これが仲良く見えるんだとしたら、デメエの頭は末期だぜ。フレイ」

「そう言うわりに、迫真の演技だったじゃないですか」

「ハッ、抜かせ。言っとくがオレは本気だったぜ。あのガキどもが条件をクリアできないようなら、問答無用で巨大隕石を落とすつも

りだった」

「……台風、地震、酸性雨から、随分スケールアップしてますね」
「クライマックスは派手に盛り上げる、との導き手のお達しだったからな。オレのささやかな心配りだ。ま、それも無駄に終わったが、お前の予想通り。——にしてもなあ」

そこでデメテルは納得の行かないように腕を組んだ。

「一体どうやったのか、オレにも想像がつかねえ。自分で言うのも何だが、二十日かそこらで東京在住の人間と同数の人間に祈らせるなんて、普通にやったら万に一つも達成する見込みの無い課題だ。どうせセコい真似したんだろうが……」

「あ、それは簡単ですよ」

フレイは手品の種明かしをするように得意げに笑うと、場所を譲るように身をどけた。

デメテルの視線が、その先に向かう。

それから間もなく、信じられないというように大きく目を見開いた。

「デ、デメエは……！」

「どうも。デメテルさん」

デメテルの視線が縫いとめられたのは、そこに佇む一人の少年だった。

小柄で垂れ目、撫で肩に天然パーマ。一見すると無害そうな、人の良さそうな少年。

しかし、その雰囲気は何事もしなやかに受け流してしまう柳を連想させ、瞳の奥には好奇心という、何よりも心揺さぶる情熱を湛えていた。

「あら、加藤君じゃない」

「どうも。学長」

加藤清侯——そう呼ばれる少年が、天照大神と言葉を交わしていた。

フレイがしたり顔で、加藤を示す。

「彼に協力を仰ぎました」

「……ハッ」

デメテルが参ったというように額に手を当て、背筋を逸らした。
そして、

「ク、ククハハハッハハッハハハハッハハハッハハハハハハハッハハハハッハハハハハッ！」

盛大な哄笑が会議室に木霊する。

「ハハッ……ハー……そうかよ、そういうっ、ことかよ。これでようやく合点が行った」

一頻り笑い終えると、息苦しそうに呼吸を繰り返した。

「期間中、何やらこそそこそと動き回ってる鼠がいるのは気付いていたが、まさかデメエだったとはな」

デメテルは、少年の本当の名をすぐさま看破した。

「随分と似合わねえことしたじゃねえか——ロキ」

「はは。だってフレイさんが『手伝わないと君の居場所をオーディンに教えちゃうよ』って笑顔で脅してくるからさ。僕、あの人あんまり得意じゃないんだよね。喧嘩っ早くて」

「『人の不幸は蜜の味』で御馴染みのデメエが、それだけの理由で人助け、ねえ」

胡乱な目を追求の刃とし、加藤——改めロキへと突き刺す。

「北欧神話の終焉である最終戦争『ラグナロク』のきっかけともなったバルドルの殺害をその弟に囁けた鬼畜な能力を、日本人相手に使ったのか」

「まあね。僕の場合は普通の人には効果がないけど、ここは日本で、今回の条件では東京の人口以上ってことだったからね。僕の神様を唆す能力だけで何とかなったよ」

「……八百万、か」

「そうです」

フレイがロキの言葉を継いだ。

「日本には太古より八百万の神々がいると言われてきましたが、現

在だつてそれは変わっていません。そして東京特別区の人口は約八百五十万。元々八百万とは数が途轍もなく多いことの意味ですから、プラス五十万人程度なら余裕ですよ」

「自分の事を普通の人間だと信じているなら、例えその本質が違つたとしても、それは紛れもなく普通の人間ですよ」

デメテルはガリガリと頭を搔く。

「気バリバリみたいだしよ、最近日本と北欧の間に同盟でも出来たのか？」

フレイは笑顔で首を振る。

「ただ——気に入ってしまっただけです。日本を」

「すっかり情が移ってんじゃねえかよ」

「貴女ほどじゃありませんよ」

「……だから何度も言わすなウスノ口。オレは別に」

「聞きましたよ？」

物知り顔でデメテルに近寄っていくと、その耳元で囁いた。

「何でも、最近ペルセポネさんが日本への留学を希望しているとか」

⌋
⋮
⌋

「日本のオタク文化にダダ嵌りして、最近ではすっかりその道まっしぐらとか」

「お忍びで時々日本に来ては、声優さんのライブを喜々として見に行っているとか」

「愛しい娘さんのためにも、日本に被害与える訳にはいきませんよ」

ね？」

「ツツツ……ッダ

黙れ黙れ黙れ！！ 知らねえ知らねえ知らねえ

！！」

怒気に任せてデメテルは目の前のフレイに殴りかかった。繰り返しているはずの拳は見えず、ただ水面に平手打ちをしたような破裂音が連続して、耳障りなハウリングとなる。

しかしフレイは不変の笑顔のまま、デメテルの不可視の攻撃を最低限の動きで飄々とかわしていく。

限界ある体力。やがてデメテルの方の表情が苦しげに歪み始めた。

一方のフレイは、緩みきった表情を微塵も崩していない。それが尚更デメテルの癪に障った。

「分かってんだろうなア——！！」

「何がです？」

「これじゃあ何の解決にもなっていない、ってことがだッ！！」

唐突に、デメテルの動きが止まった。

肩を上下に揺らしながら、荒い呼吸を繰り返す。

他の三者は、それを神妙な面持ちで見つめていた。デメテルの言葉に、何かしら思うところがあったのだ。

「今回の世界趨勢決定会議は裏技で切り抜けたが、それは結局のところ全ての問題を一度棚上げしただけってことだ。日本の、引いては世界の直面している問題に、解決の糸口すら掴めていないままだな。もちろん悪いのは日本だけじゃねえ。他の国だって大なり小なり同じことくらいしてる。その技術力の差を僻んでいただけで、この世界の住民、全員が全員同罪だって言っても過言じゃねえ。でもだからこそだ！ 世界が羨み、そして世界を救済できるかも知れねえ技術をテメエら日本が持っているからこそ！！ テメエらは大きな責任を背負わなきゃなんねえんだぞ！！」

「分かっているわよ、そんなこと」

憤っているのか心配しているのか判らない絶叫が響く。しかし、

確かにデメテルの中にもあった、強い信念。

信じ、念ず。

人を導く立場の者が持たざるを得ない、とても重く——強い想い。その悲痛な心を覆い包むような声を発したのは天照大神だった。

デメテルとふざけあっていた時の声色は、もう見当たらない。天照大神の表情には、一国の頂点に君臨する神としての責任にも似た、熱い想いが滾っていた。

「だからこそ、私は農業大学の学長なんてしてるんだもの」

「……………ッ！」

デメテルは息を呑んだ。

天照大神の中に根付く、自分とは似て非なる心。しかし根本は何も変わらない、強い信念に気付いたのだ。

「確かに、この世界は危機に瀕している。それに相対する上で、日本に掛かる責任は途轍もなく重大なものでしょう。だからこそ私は、そんな問題を解決しうる優秀な人材を社会に送り届ける。それらの問題を解決するための礎を、生徒たちの中に作り続ける」

「ハハッ——遠大な話だな、おい」

「そうかしら。私は悲観してないわ。だって今も大学には優秀な子が沢山いるんだもの」

目を瞑る。

その瞼の裏に移るのは、過去か現代か、それとも——

「彼らが担う未来だもの。この世界の将来は明るいわよ」

おまけ

「なあ天照よお。ガキどもが所属してるLDK同好会の『LDK』って、結局どんな意味なんだ？」

「あら、分らないの？ やっぱり神様であつても親は馬鹿なのね。お・や・ば・か」

「絞めるぞテメエ！ 親が馬鹿なのは子供に關してだけだッ！」

「尚更あなたにピッタリじゃない」

無意識に放ちそうになつた拳をすんでのところでデメテルは止めた。ここで鉄拳制裁を下しては、氣こそ晴れるだろうが疑問は晴れない。

「んで、答える氣あんのかよ？」

「分かりません——つて素直に言つたら教えてあげてもいいわよ」
全身を震わせながら、一際大きく痙攣している右腕を必死に押さえる。口からは荒い呼氣が絶え間なく吐かれ、我慢だ、我慢だ、と自らに言い聞かせるようにぶつぶつ唱えていた。

「……、……………分かりません」

「聞こえないわ」

「分かりません！ これでイイかよこの腹黒！ いやノドグロ！」

「あら、いいわねノドグロ。わたし好きよ？」

「だあ——！！ いいからさつさと教えるよッ！」

すると天照大神は、しょうがないわね、というように両手を肩の高さに持ち上げて首を振ると、クイズの出題者のように芝居ぶつて言い放つ。

「LDK同好会に所属する神様を考えてみなさい」

「あ？ ——導き手の猿田彦に豊受大神、倉稻魂神、保食神の三神……ただの稻荷神だろ？ 商売繁盛やら水難防除やら家内安全やら縁結びやら、五穀豊穡以外にも御利益大盤振る舞いの」

「その氣前のいい神様の使われしめといえば？」

「そりゃアレだ、キツ——」

そこでデメテルは、呆氣に取られたように放心した。
その表情が如実に語る。

——まさかの日本語？

「氣付いたみたいね」

「……最悪だな、このセンス」

「あら、悪かったわね」

「デメエか発案者！」

デメテルの叫びにも表情を変えない。むしろ得意気ですらあった。
「思いついたときはわたし天才だと自画自賛したんだけど」

天照の艶やかな唇が、答えを紡ぎだす。

——『立派にでっかいキツネ同好会』と。

良し悪しの判断は、各々の裁量に任せるとしよう。

——朝よいに 物くづごとに 豊受の 神のめぐみを 思え世の人

了

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0001k/>

ゆたにたゆたに

2011年1月3日11時25分発行